して社會公共に背く行爲とは、御身等夫れ自身に、自らの墓穴を掘るものでなくてはならないのである、憚るべき社會に憚るところなく、怖るべき天を怖れざる彼等富豪の徒は、自ら爲せる横暴の繩に自縛せられ、將來――或は甚だ近き將來に於て、彼等の上に落下せんとする大なる天罰と社會的制裁は、眞に戰慄驚駭に値すべきものでなくてはならぬ筈だ。

吾人は切に滿天下の富豪のために計る、彼等にして他日に於ける嗟臍の悔に陷らざらんとせば、そしてまた更に彼等の子孫をば、絶大なる禍害より救はれしめんとせば、今日に於て悔ひ改むるところがなくてはならない、そして其が自身に有するところの富の力を以て、あらゆる社會の善事に黽め、己れに奉ずるに薄きを以てし、よく社會多數の人々に厚うするの心掛けに出つべきものである、若し彼等にして、此の聰明なる行動に出づることが出來ぬとしたら、彼等は最早眞善なる國民にあらずして、全く獸人たる異端的動物として、夙に吾人が集團たる圏外に排去せらるべきものである。

我國の富豪なるものが、如上の域埒に喰喝しつゝある時に方つて、其と對立せしめられて居るところの、所謂プロレタリアは、果して如何なる狀態にあるであらうか、律義者の子澤山といへば、何となくしほらしいところもないではないが、其日暮らしの無産階級と銘を打たれたものとあつては、しほらしさを通り過ぎて、寧ろ哀れな感じに打たれずには居られぬのである。

生活がプロレタリアの全部であるといふ事は、吾人の既に前に述べたところであるが、實際今日に於ける彼等の狀態は、生活が全部であるどころか、彼等の全部が、僅かに生活の一部に過ぎぬといつた有樣である、だからブルジョア階級が、生活に放心であるに對して、プロレタリアは實生活以外の何物に對しても放心であるのは、素より數の然らしむるところである、然るに世の中には、また一種中產階級と唱へらるゝところのものがある、此の者は、文字其の通りに、中等程度の產を有して居るものである、之れは或時機に於ては、動もすれば無產階級に墜落することが多いが、普通に於ては、所謂有產階級として算せらるゝものであつて、謂はゞ一種の灰色階級であり、調和的階級であるのだ。

此のやうな中間階級は兎に角として、無產階級と目せらるゝプロレタリアが、社會的に重大なる關係の下に立つことは、大に注目すべきものであらねばならぬ、デ我國に於けるプロレタリアは、其の生活を勞役によりて支持されるのを通例とするものである、勿論此の勞役には、

知能的と、筋肉的との二つがあるので、前者は頭腦の勞働者に屬し、後者は筋肉の勞働者に屬するのである。

併し夫れがたとひ、知能勞働者であるにしても、筋肉勞働者であるにしても、其が勞働者たることには何の變りはない、則ち彼等は、孜々として働き、兀々として勉める、そして一定の賃銀――則ち勞銀――を得て、夫れによつて日常の生活を營むのである、此の樣なことは、何も吾人の呶々を要するまでもないが、サテ靜かに之れを考想するときには、彼等の地位と行動とが、社會に重大なる關係と影響とを有つことを感得さるゝのである。

富めるものは、資本の上に活き、貧しきものは、勞力の上に活きるといふ原則が、如實に且つ正則的に現前せらるゝ社會であるならば、問題はたゞ之れのみにして終りを告ぐべきであらう、併しながら實社會の實狀況は、往々にして此の原則に悖らされるのである、富者が資本に活きるといふけれども、場合によつては、富者と雖も、資本の追迫に惱まされることがある、そして貧者にあつても、働きが必ずしも生活の支持者であるとは言へぬ場合も尠なくはない。

稼ぐに追付く貧乏なしとは、プロレタリアに對する前掲の原則を言明したものであるが、今日にあつては、稼ぐに追付く貧乏ありといふ變態現象を見るに至つたのである、働くこと、稼ぐことを以て本義とし、夫れによつて生活の保障を得べきことをば要約とする彼等にあつて、稼ぎつゝ猶ほ且つ貧乏の追及を免れ得ぬとあつては、所謂プロレタリアの運命は、其が根柢から覆へされたものでなくてはならぬ。

ブルジョアも社會の人間であり、プロレタリアも社會の人間である、富と貧とによつて、偶偶其が名稱を異にしたりとはいへ、其が一人格たる上に於ては、素より何等の區別や差別があるべき筈のものではない、然るに一方にあつては、高枕安臥して、生活てふものを浮世の外に見、一方にあつては、營々刻苦して、生活のために其が身血を絞るといふのは、果して何による差別的運命なのであるか、ブルジョアが金錢の上に特權を有するものであるならば、プロレタリアもまた勞作の上に特權を有しなければならぬ筈である、況んやブルジョアが擁するところの金錢的富は、プロレタリアの勞作供給によつて得られたものである以上、プロレタリアは、ブルジョアの富の母體として、寧ろより優つた特權をも有しなければならぬ道理である、然るに事實は全く正反對の現象を呈し、富めるものは倍々富み、貧しきものは倍々貧しといふのは、

知能的經濟的論議は姑く措き、石が流れて木の葉が沈むといふ觀があるではないか。

併しながら一面冷靜に觀察すると、プロレタリア共のものにあつても、また如實に大なる缺陷を有することが認められるゝのである、吾人は事實として、世の多くのプロレタリアに向つて、無限の同情を寄するものではあるが、併しまた彼等の眞相を窺知したときに、より以上の顰蹙を以て、彼等に對せざるを得ぬものである、世界の人が、同時にみな君子たり聖人たりすることが出來ぬと同じく、總てのプロレタリアに向つて、如法に人格者たれと要求することは不可能であらねばならぬ、が今の世に於けるプロレタリアは、其が反面に幾多の惡德を有つて居て、之れがために彼等の本領が、漸次に鎖磨されて居るものである。

吾人は之れまでに於て、屢々公平なる語を繰返したのである、そして或る一事を品隲批評するに方つては、常に具象的な、そして公明的な態度の上に云爲する事をも表明したのである、則ち吾人は、此の要約の下に、如實の批評を下すならば、所謂プロレタリアなる階級のものは、今や全く社會のドン底に墮在するものと言はなければならない、ト言つて吾人は、故意に彼等を侮辱しようとするものではない、況んやまた爲めにするがために、謂れなき中傷を彼等に加ふるものでもない、其の衷心にあつては、腹藏なき所見を表明して、一には以て彼等の自省に資し、一には以て社會識者の考想を喚起せんと欲するものである。

方今所謂無產階級者の生活的事態を觀察するに、彼等は全く自暴自棄の雰圍氣に包擁されて居るものである、これは前にも言つた通りに、稼ぐに追ひ付く貧乏のために歪められて、其が平靜なる心的の上に、壓迫的傾斜を招來されたことでもあらう、成程彼等としては、確かに社會から繼子扱ひにされて居るのである、資本家たり富者たるブルジョアが、惣領の甚六として、我儘一パイを振舞ふのを眼前にしながら、彼等は破れ茶碗に盛られた冷飯一パイの境涯に放り出されて居るのだから、如何に隱忍性に富んだ彼等としても、ひねくれた繼子根性を起さずには居られぬところであらう。

いくら働いたからとて、貧乏から遠ざかつて行くことは出來ないのである、まゝよ何うせ駄目と相場が極まつた以上、何も然う跪くにも當るまい、といふのが、彼等プロレタリに共通された現代心理である、ダカラ彼等には、現在はあるが將來はない、兎も角も過去の隋力によつて、現在に活きて居るのであるが、現在の力によつて、將來に活きようなどゝいふ考へは、毛

頭持つて居ないのである、否な嘗に將來に於ける生途を認めないばかりでなく、まざ〳〵と夫れを否定すべく試むるものさへあるのである、過去に於て然り、現在もまた此の如くして然り、將來もまた此の如くであらねばならぬといふ、奇態不思議な論法が、絶えず彼等の胸底に往來して、彼等をして如實に、社會的弱者の群に導くものであらねばならぬ。

夫れかあらぬか、當面的刹那の生活は、彼等に於ける如實の事實である、過去は追ふべくもあらず、將來は求むるところでない、殘るところはたゞ一つの現在的生活で、此の生活にして充足さるゝのであつたら、彼等は夫れで滿足するものである、此の様な心的狀態にあるので、彼等は敢て恒産に生きようともしない、隨つて彼等には恒有の心といつたものがない、昨日は昨日と過ごし、今日は今日と暮らし、明日は風の吹き次第と諦らめるところに、彼等の生活は、一層現實的に、そしてまたより强き刹那的に引き入れられて行くのである、世の諺にいふところの、太く短かくが、所謂彼等の信條であつて、細く長くは、決して彼等の採り得る主義ではないのである。

元來が斯うした變態心理の現前されて居る矢先きへ、一層彼等の上に、不安の渦を投げ懸けるのは、方今に於ける生活向上其のものである、言ふまでもなく方今に於ける生活の向上は、決して順潮的に誘致されたものではなく、謂はゞ片磨きに光り輝やかされた文明の反映を受けた、一種の幻華的向上に外ならぬのである、デ此の生活向上などいふことは、其の向上としての動機が、常に所謂ブルジョア階級をモデルとして出發さるゝのであるから、プロレタリアの生活に適合されたものでないことは言ふまでもない、併しながらプロレタリアとしても、同じく一人格を具備しつゝある以上、其が生活要求の點に於ても、何等ブルジョアに異つたところはない、則ち彼等は、ブルジョアの爲すところを見、聊かにても夫れに模倣して行かうとするのである、ダカラ出來ないまでも、彼等は其の可及的努力を以て、ズン〳〵在來の生活狀態を押し進めて行く、斯うした關係が、不知不識の中に、彼等全般の生活向上を誘起したのである。

生活の向上といふことも、素より世運の進展に連れて、必要の事であるには相違ない、地球はよし太古のまゝであつても、其が表面は時々刻々に改造されて行くのである、(自然的にも、また人爲的にも)殊に日進月歩を以て、其が情態を改めて行く人類の社會にあつては、必ずしも一定不變の事相にのみ固着さるべきものではない、此の意義に於て、人々の生活向上も、如

法に必要なものであることは、素より疑ふべきところのものではないのである、併しながら夫れとても、其所にはまた一つの定量的理法がなくてはならない、生活の向上が如何に必要であるからといつて、無限に之れを向上せしむるといふことは、大なる弊事と言はねばならぬ。

然るに現代のプロレタリアにあつては、何所ともなしに芽ぐまれて來た自棄心に唆かされて、己が力量以外の生活向上を敢てするものである、向ふ見ずの生活、根柢のない生活、重荷的の生活、之れが現代プロレタリアの生活であり、全部的のものである、然なきだに生活の重味に困憊し切つて居る彼等として、今更に此の重味を添加されるのであるから、彼等が精神的に、また同時に經濟的に、破産の憂目を見るといふことは、素より當然のことゝしなければならぬ、が彼等プロレタリアにあつても、之れだけの道理は、素より知つて居るには相違なからうが、之れを知りつゝも、猶ほ之れを爲すといふところに、言外の悲慘が仄見えるのである。

稼ぐに追ひ付く貧乏ありとは、吾人も確かに之を認むるものである、現代の社會は、遺憾ながらモウ稼ぐに追ひ付く貧乏なしではない、が一歩を退いて、冷靜に之れを觀察したならば、此の變則的現象は、決して永遠のものでもなく、不變のものでもないのである、今の世に於て、稼ぐに追ひ付く貧乏ありといふのは、實際社會の眞世相ではないのである、前にも言つた通りに、官憲の愚劣な政策や、富豪の横暴な古利やが直因となつて、國家に於ける正當の富をば、不當に彼等に占有横奪されて居るからである、故に此等の害物と害因とを除き、社會をして眞の姿に立ち歸らせたならば、世の中は再び稼ぐに追付く貧乏なしの常規に復するに相違ない、ダカラ所謂プロレタリアなるものは、今日に於ける變則的世態に悲觀する事なく、進んでは社會の改善進歩に貢献盡瘁し、退いては自己の修養と品位性格の向上に努力し、以て眞なる社會の現前を促成すべきものである、プロレタリアにして、斯の如く理法的態度を執るに至らば、ブルジョアとても、安閑としては居られなくなつて、其所に悔悟と覺醒と發奮を表現し、相率ゐて眞善なる社會の現前に貢献するところがあるに相違ない、然るにプロレタリア其のものにして、飽くまで頑迷の様態を改むることがなく、徒らに嫉妬と怨嗟とに悶え、自暴自棄の行爲を敢てするのであつたら、彼等は當然享受すべき復活の光りにすら浴することが出來ずに、未來永劫浮む瀬のない、無限無底の魔の谷に投じなければならぬのである。

ところで吾人は、此の機會に於て、更に所謂知識階級なるものと、其が生活問題について、二

三言説を試みなければならぬ、筋肉勞働者、或は單に略して勞働者と稱するもの丶階級的關係については、世間可なりに論議を重ねて居るのであるが、知識階級其のものについては、比較的に之れを云爲するものが尠ないやうである、併し吾人の見るところを以てすれば、所謂知識階級と目せらるゝもの丶問題(勿論生活上の)は、單なる筋肉勞働者としての同じ問題に於けるよりも、更に一層深刻なものであり、重大なものであるとせねばならぬ。

ソコデ先づ明らかにして置かなければならぬことは、知識階級とは、何を指すものであるかといふことである、單に知識階級とのみ言つては、甚だ漠然たるものであるが、之れを一般的に言へば、俸給生活者、新らしき中等階級者、精神的勞役者、官吏、會社員、サラリーメン等のもので、其の名稱によつて知らるゝ如く、其が所得の全部、或は主要部分を、精神的勞作によりて取得し、以て其が各自の生活を營んで居るものを指すものである。

彼等は其が勞作によつて、一定の貨幣を得て居る、デ其の他の人々が、直接的に貨物の生産に關與して居るところのものに比し、其所に或る非常な特色を有つて居るのである、ダカラ一種の論法を以てすると、直接生産に關與するところのものを、貨物の世界に住む人とすれば、知識階級の人々は、貨幣の世界に住むものであるといふことが出來よう。

サテ世人は口を開いて、容易に生活問題のことを云爲するのであるが、其が生活問題なる言葉の下には、直ちに知識階級なる語が連想されるのである、生活問題は、あらゆる人間の問題であつて、何も知識階級者にのみ言はるゝところのものではないが、而も其が直ちに知識階級を連想さするといふのは、全く知識階級なるものが、何れの階級よりも、先づ眞先きに大なる生活上の惱みを有つて居るからである。

元來知識階級なるものは、所謂中産階級に屬すべき性質のものであり、そして國家の中堅たるべき地位を占むべきものである、然るに今や开は、事實に於ける有識無産階級として、世間からは洋服細民だとか、腰辨だとかまで呼びなされて、體裁のよい一種の貧民と見做されて居るのである、此の樣な特殊の觀察と取扱とは、知識階級者に取つて、極めて重大なる侮辱であるかも知れぬが、事實は事實で何とも致方がない、之れが若し世が世であつたならば、彼等もまた、武士は喰はねど高楊枝的に、高く止まつて澄まして居られるのかも知れないが、何事も實際一點張りで行かなければならぬ現代にあつては、然うした壁塗り生活には安んじて居られぬので

ある、ところで現代の生活魔は、先づ何よりも第一に、其が呪ひの征矢をば、知識階級に向つて射込んだのである、サア斯うなつては、知識階級の運命は既に決せられたかの觀を呈し、彼等は次第〳〵に生活の戰線に追ひ詰められ、脆くも減食線を超えて、今や正に餓死線に突き込まるべき窮地に立ちつゝあるのだ、痛ましきかな知識階級の人々よ、斯くして御身等は滅び行かねばならぬであらうか。

世間には好景氣だといつて、有頂天になつて騒ぎ廻るといふ時節もあるが、其の樣な時だといつても、大した慶澤に與ることの出來ないのは彼等知識階級の人々ではないか、ところで一朝不景氣風が吹いてゞも來ようものなら、先づ第一番に其が影響を受けて、イの一番の不安を感ずるのはまた彼等である、事業の縮少、行政の整理、此等の聲が、自分達の身を如何なる地に持ち行くであらうか、何んな成行となるであらうか、斯うして考へ惱むといふのも、決して無理ならぬところであらう。

世に先だつて憂へ、世に後れて樂しむといふのは、實に知識階級に恰當した言葉である、社會に於ける運命的地位から言へば、眞に割の悪いものでなくてはならない、然るに彼等は、一面に於ては、少なくとも知識階級たる形容は保持しなくてはならないし、また或る程度までは、あらゆる壓迫にも隱忍しなければならぬ立場にあるがために、より以上の苦痛に處らなければならないのである、殊に方今に於ける異常の物價騰貴は、知識階級の上に禍すること、眞に多大なものがある、此の物價騰貴は、我國の經濟上に於ける、顯著なる現象で、社會の全體が、痛切なる影響を受くることは勿論であるが、知識階級に對しては、其が更に一層深刻なる苦惱を與へるものである、此の經濟的壓迫は、知識階級を通じての脅威となり、不安となり、斯くて其の生活の安定をすら缺かしむるに至つたもので、知識階級の生活を說くには、先つ物價騰貴よりして說いて行く必要がある。

言ふまでもなく、生活には支出と收入との二方面がある、そこで仔細に考察すると、物價騰貴が生活を壓迫するといふことは、つまり收入が支出を支辨することが出來ないといふことになるのである、デ收入が何故に支出を支辨することが出來ぬことになるかといふに、夫れにはもとより種々な原由があるが、其の中で最も主要なものとして數へられるのは、物價が騰貴せるため、當然支出が增多するといふことである、之れを世の中の實際に見るに、物價が騰貴し

たからといつて、人々が其の物品の購入を見合すか、或は減少するといふことはない、成程之れを理論の上から言つたならば、或は此の事があり得るかも知れめが、實際には決して然うでない、夫れは何故であるかといふに、所謂知識階級なるものは、如何なる時にあつても、始終緊迫された經濟を持つて居るのであるから、平生とても、買はずに濟むもの、求めずともよきものなどは、素より之れを購求することがない、其の購求するところのものは、日常の生活に當つて、必須缺くべからざるものゝみであるから、たとひ如何に物價が騰貴したればとて、其の購買種目や數量に變りはないのである、だから結局物價騰貴は、相對的に其が支出を大にするものであつて、物價が騰貴すれば騰貴するほど、彼等は直接の苦痛を嘗むるものである。

更にまた之れを相對的に言ふならば、一方に於て物價が騰貴する、即ち他の一方に於て支出が增多となる以上、更にまた他の一方に於て、收入が增多となるべき筈である、ところが之れもまた實際に於て、此の如き相對的現象は見得られぬのである、即ち斯る場合にあつても、俸給其他による收入は、現在居据りが上出來の方で、動もすれば却つて低減さるゝことさへあるので、之れが即ち知識階級に於ける、最も大なる壓痛點とさるゝものである、此の事實からして、近時著しき物價の騰貴を見る場合、何分かの收入增加が、知識階級の上に講ぜらるゝ傾向もないではないが、而も之れによる收入增多なるものが、支出の增多に伴はぬことは言ふまでもないことで、決して之れを以て、支出の增多を支辨し得べき程度のものではない、要するに其の名は美にして、其の實は否なるもので、實際に於て何等取るべきものはないのである。

ところで所謂貨物の世界に生活する人々になると、物價の騰貴は、得て其の人々の生活に、よりよき影響を與へるものである、元來物價騰貴といふことは、何れの物品もが、一齊に打揃うて其が價格を騰貴するものではない、必ずや先づ一二の品物から始めて、三四の品物に及び、斯くして全體の品物に及ぶのが例であるから、其が騰貴された品物を取扱ふ人々にあつては、其が物價の變動によつて、利潤を受くべきは當然のことであつて、たとひ支出が增多されたとしても、其の利潤を以て、充分に之れを支辨することが出來るから、結局其が生活の上に、大なる好果を收むることが出來るのである、之れが即ち物價の變動や騰貴による生活上の壓迫が、餘りに貨物の世界に生きる人々を見舞はぬ理由であらねばならぬ、ところが知識階級の人々になると、中々然ういふ譯には行かない、即ち彼等の收入なるものが、貨幣であると同時に、其

の額は數的に於て一定されたるものである、デ其が使用するところの知的能力なるものは、素より貨物其のものゝ如き、當面的評價を有つべき性質のものでないから、先づ如何なる場合にも、其が額は一定されたものと見られるのである、尤も中には、ボーナスであるとか　臨時手當であるとかいふやうなもので、何程かの收入增多を見るものもないではないが、此等は多くは一局部に止まるもので、之れを全般に押し擴めて言ふことは出來ないのである、ダカラたとひ物價の變動に際會しても、其が惡影響をこそ受くれ、決して好影響を受くることがない、知識階級の人々は、經濟上の何れからも惠まれることがないのである。

デ玆に一つ注意しなければならぬことは、物價の騰貴に伴ふところの、生活の向上といふ特異現象である、之れは普通に考察したところでは、殆どあり得べからざることであるが、斯る場合には常例として見られる特異現象で、或人は之れを稱して、物價騰貴の必然的副產物であるとさへ言つて居るのである、此の現象は、言ふまでもなく、社會人の對應的希求心の發露と見るべきもので、物價騰貴といふ一現象に刺戟された、一種の反抗要求に外ならぬものである、併しながら知識階級に於ける此の向上は、必ず貨物に生きるもの、夫れに踵いで擡頭さるゝのが常である、前にも言つた通りに、斯かる經濟上の變動を見る際、貨物に生きる人々は、其が懷中の暖かなるに任せて、思ふ通りに其が生活を向上させるのである、欲して成らざるなく、求めて得ざるなき底の貨物界の人々が、ドシ〳〵と生活の向上をなしつゝあるのを見ては、知識階級の人々にあつても、平然として之れを眺めて居る譯には行かない、が今までは、其が有する理性によつて、群立つ感情を抑へ、生活の上に大なる隱忍を持して居たが、其が欲求が一程度に達するとなつては、さしもに堅固な隱忍も破れずには居ないのである、そして其が腦裏に有つところの文化生活としての希求と、經濟的現象に對する對抗的要求とは、玆に相合して、遂に貨物に生きるもの、生活に追隨しようと希圖するのである、知識階級にして旣に然り、各階級また同じからざるを得ずで、生活の向上は終に全社會の風潮となるものである、サア斯うなつては何うであらう、然なきだに窘迫狀態にあるところの知識階級の生活は、彌が上に壓迫を感ぜずには居ない、支出の增多は、更に一層の增多を招いて、其が收支は反比的數式に懸隔を生じて來る、斯くの如きは、知識階級者に於ける、收支的背馳のクライマックスとも稱すべきものであらう。

今の時は、知識階級者に取つて、正に危急存亡の秋である、若し一歩を誤つて、此の上些かにても不利なる地歩に立たんか、彼等は終に浮む瀬のない奈落のドン底に墮ち込んでしまはなければならないのである、況んや世智辛い現代には、其が資本家階級の中に、物價を暴騰せしめて、擅まゝに私利を博する鼠輩が跳梁して居り、他の一方には、虎視耽々たる勞働者階級なるものがあつて、よく此の間に處し、以て己れ等の地歩なば、有利の點に占めようとして營々たるものがある、然るに獨り知識階級者は、此の數者の間に介在して、一日一日と社會の最下層に沈淪すべく餘儀なくされて居るのである、之れをしも慘と言はずして、將たまた何をか慘と言はんやである。

ところで此の悲慘なる運命に立つところの知識階級は、我國の現在にあつても、隨分多大な數を示して居るのである、加之ならず、高等教育制が完成さるゝ事も、今や時日の問題となつて居るのであるから、近き將來に於て、倍々其の數の增加を見るべき事は、知者を俟たずして知るべき事である、果して然らば其が多大の增加を現前した曉には、彼等は如何なる狀態に推移さるゝであらうか、今日にあつてさへ、其が生活苦や就職難や失業數が容易ならぬ問題であるのに、更に一層其の數の增多を見た場合には、より大なる痛苦の地に立たねばならぬ事となるのは、數の上より見ても、理の上より見ても、毫も疑ふべき餘地はないのである、シテ見ると、知識階級と生活問題とは、切つても切れぬ腐れ緣であつて、未來永劫其が解決を得べき期は無いのであらうか、此の重要にして、而も至難なる問題に對して、吾人は然りと答ふる事を以て、餘りに無情であり、また餘りに無策であることを歎ぜずには居られぬのである、則ち吾人は茲に數策を提げて、敢て彼等知識階級のために、一道の坦路を啓かうとするものである。

デ先づ吾人が高唱するところは、知識階級者としての、有規的生活改善といふ一事である、之れを要するに、生活上の過不及といふことは、畢竟經濟上の過不及を意味するものであるから、其が根本義として、生活的經濟の上に、或る減刪と塡補とを以てせば、たとひ夫れが十全的でないまでも、兎に角可及的に、其が支辨的可能級に近接せしむることが出來ようと思ふ、然るに此の根本義に觀入することなく、徒らに社會に於ける經濟關係の矛盾齟齬のみを數へて居るやうなことでは、譬へば百年黃河の淸むを待つ如く、決して何等の得るところもないので、人生の愚之れより甚しきはないのである、そこで之れに對して、生活改善の前提として、物價

の引下げを策すべしとか、給料の引上げを講ずべしとか論ずるものもある、が斯る問題に於て、果して其の何れが適當であるかは、大なる注意を以て考究することを要するのである、然るに今の政府は、夫れでなくてさへ生活難の狀態であるのに、官吏の俸給二割減など、いふ、お芋の煮えたも御存じない非常識の策を立てゝゐる、ところで吾人の建策としては、僅かな物價引下げや、少しばかりの給料引上げなどは姑息の消極手段であつて、眞に國家を負荷して立つほどの爲政者としては、徹底的に、積極的に、今日の物價、勞銀、給料の總べてに對して、法律を以て强制的に五割減を斷行せしむるといふ、根本的の荒療治を施す程の大メスを振ふ度胸がなければ駄目である、併しながら、斯くて其が本然の根本狀態に歸入しても、物價が如何に引下げられたにしても、生活者其のものゝ生活が、眞實自己の經濟に適應せぬものであつたら、其所に何等の經濟意義をなさぬもので、斯の如きは大に考慮すべきところのものである。

近來所謂俸給生活者も、筋肉勞働者などの擧みに倣つて、往々ストライキやサボタージュなどに出づることがある、之れは個人の經濟上に於ても、由々しき弊害として、大に戒心すべきものである、勿論其が罷業といひ、怠業といふものも、畢竟は各自の利害の上に立たされるものであるから、敢て其を以て無理な行動とするのではないが、夫れ等の事態からして生ずる、社會的及び個人的損失が、如何に大なるかをも考量しなければならぬのである、罷業による賃金や給料の不收が、直ちに罷業者の經濟に影響することは、言ふまでもなく、且つ之れに要する運動の費用の如きも、また罷業者の負擔に歸すべきもので、其の結果、たとひ一時的にもせよ、更に支出を增大せしむることゝなるので、何等の餘裕を有たぬ彼等にあつては、より以上の苦痛を招來するものである。

デ先づ彼等に於て、眞摯的に考ふべきことは、何うしても生活程度の問題であらねばならぬ、衣の問題は如何、食の問題は如何、住の問題は如何、社交的關係の問題は如何、之れ實に彼等が如實に考想し、如法に解決すべき問題でなくてはならぬ、そこで之れを今日の實際に見るに、此等の問題は、所謂背縻問題であつて、平たく言へば、彼等としての死活問題たるべきものであるのだ、此の四つのものゝ解決にして、其が適當なる點を見出すことが出來ぬ以上、知識階級としての生活問題は、到底始末が出來るものではないのである。

デ衣の問題は何うであるかといふに、之れは比較的に安易な問題であつて、決して社會的に

も、經濟的にも、重要な關係的論議を要せぬのである、則ち一言にして之れを覆へば、たゞ儉素なれ、實用的なれで足りるのである、尤も之れとても、見やうによつては、素よりさう單純に片付けてしまふ譯には行かぬかも知れぬ、則ち內國品を使用する場合と、外國品を使用する場合に、其の時現在の經濟狀態に於て、需用供給の上に、相當の注意を支拂はなければならぬこともあるし、また彼の奢侈品に屬するものゝ如きに對して、之れを取捨する上に、或る經濟的見地に立つべきこともあるが、扨は姑く措いて、吾人は寧ろ住居と食料の問題を以て、之れよりも更に一層切要なるものとし、夫れに向つて充分なる見解を試みようとするものである、元來食料の如きは、人生に於ける最大必要品として、之れが充當を圖るべきは言ふまでもないことであるが、併し之れとても、人々の夫れ自身の實生活に對して、多少の手加減を加ふべきことは當然であらねばならぬ、食物が如何に必要であるからと言つても、一食萬錢を費す如きは、決して能事と稱すべきものではない、食膳方丈と言つたり、酒海肉山と言つたりするやうなことは、素より論ずるに足らぬ愚事であらねばならぬ。

今日に於けるブルジョアなどは、動もすれば奢侈驕傲を以て、生活の向上など、心得て居るものである、某富豪などは、毎日一回數圓の鰻を食するとか、或物持は一日の食料にコック二人の調理品を要するとか、或る大官人は、毎食必ず天下の初物を見なければ承知せぬとか言ふやうなことは、吾人が往々耳にするところであるが、斯の如きは所謂天井見ずの贅澤三昧であつて、社會人としての生活の向上ではないのである、勿論此のやうなものは、一般的のものでないのであるが、多くのブルジョアは、少なくとも質に於て、之れと相似たことを敢てし、以て自ら生活の向上であるとし、得々乎として快を呼んで居るのである、然るに此のやうな風は、次第々々に社會の全般に瀰漫し、經濟的に根柢の薄い知識階級すら、其が風に感染して、奢侈的生活を以て、向上されたる生活であるとし、不知不識の間に、其を學ぶものが多いのは、事實慨歎すべきことでなくてはならぬ。

則ち吾人が提唱するところは、知識階級者としては、何所までも有識無產階級たる本分に立脚し、敢てブルジョアの夫れに見ることなく、資本家の夫れに倣ふことなく、最も着實に、最も緊切に、そして最も適當に、其が有する經濟範圍に於て、自己の生活の本義を確立すべきものである、社會が進步し、世態が複雜となつたと同時に、人々の精神狀態も、著しく緊張味を

帶び、腦力の使用も激度を加ふるに至つたのであるから、食物とても其れ相當に、榮養價値の優れたものを攝るべきは言ふまでもないことである、併しながら科學の進歩した今日にあつては、所謂食品に對する研究なども、可なり具體的となつて、同一のものも、其が調理法によつては、より多くの榮養價を有つことになるので、必ずしも高價な物や、稀有の物を用ひないでも、充分食料としての目的が達せられるのであるから、少しく意を茲に用ひたならば、何等經濟的に顧慮を要することなしに、理想的の食料を求むることが出來るのである。

ところで吾人は、此のやうな問題に逢着するごとに、所謂國家に於ける爲政者の態度を一考せずには居られぬのである、彼の奢侈品重課稅の如き、大體の趣旨に於ては、素より間然するところがないやうであるが、飜へつて其の細目について考へて見ると、其所に何分かの生活脅威の分子が仄見ゆるのを遺憾とせずには居られないのである、今其が一例を言へば、彼の米國あたりから輸入さるゝ、文明的食料品の如き、中には當然贅澤品として算へらるゝものもないではないが、其が中にも廉價にして豐量を有するところの、精良なる鑵詰類や、乾肉、乾果の如き、また實用向の服裝品の如き、之れを內國品に求むれば、却つて粗品であり高價であるのだ、それが重課の結果、より高き價を支拂はなければならぬ事となつたのは、確かに國民一般の經濟の上に、如實の不便を投げ與ふるものでなくてはならないのである、一方に割りの惡い生活の境地に立つて居る有識無產階級が、また此の如き生活の脅威に處るとしたら、眞に泣面に蜂と言はなければならぬではないか、吾人は國家爲政の局に當るものに向つて、深く此の邊に意を致されん事を切望する者である、如何に濱口ライオン、國民に對する獅子身中の虫たらざる樣賴む。

國家の經濟を打案する場合に、國家の體面を經緯の中に伍入することも、素より國家の立場として、必要であるには相違ない、併しながら此の場合にあつても、可及的に國民經濟といふことを打算したものでなくてはならない、外形に賞讃を博したからと言つても、內容に非議すべき點があつては、決して經濟の根本を確立して行くことは出來ない、お座なりや投機的な經濟施設は、所謂飴經濟であつて、眞な經濟ではない。

それから住宅の問題であるが、之れは刻下に於て、最も緊要であり、且つ重大なものである、然なきだに住宅難といふ聲に驚かされて居る國民は、之れによりて其が經濟を攪亂されることが何れ程であらう、今の時にあつては、ブルジョア階級は別問題として、中產階級以下のもの

は、實際住宅問題に惱まされて居るのである、殊に方今に於けるが如く、住宅の拂底に伴ふ家賃の暴騰は、知識階級などの中產階級者に取つて、眞に頂門の一針であらねばならぬ、一方には物價は天井見ずに暴騰する、そして一方にまた家賃の昂騰を見るに至つては、正しく前後に敵を受くるもので、其が經濟的慘狀に至つては、到底筆紙の盡すところではないのである、昔からしてよく唱へらるゝところの、家賃は收入の五分の一を以て最高限度とすといふことは、今日に於ては既に其の最高限度を超えたるものであらねばならぬ、今假りに月收百圓の知識階級者があるとしたならば、其が五分の一は正に二十圓である、則ち前言の如き割合を以てすると、其人は二十圓の住宅で滿足しなければならない、ところで二十圓といふ額は、素より鮮少なものではないが、今日之れだけの金で、果して如何なる程度の住宅が借入れられるであらうか、少しでも便利のいゝ所や、些かにても文化的施設が試みられようとするやうな住宅は、決して之れだけの金では借入れられぬのである、最も市外郡部などの場末であるならば、何うにか斯うにか名ばかりの家といふ、粗末な住宅が借入れられるかも知れぬが、其代り外出する毎に多額の電車賃を要するといふ有樣で、結局損の上塗りをすることになるのである、ところで苦痛はまだ夫ればかりではない、家賃はたとひ二十圓であるにしても、其の家を借入れるには、また一心配しなければならない、則ち方今では、少なくとも六ヶ月分の敷金なるものを要するのである、そして中には七ヶ月八ヶ月、甚だしきは一ヶ年分といふ敷金を要求する强慾な家主もあるので、また時としては、權利金などゝ唱へて、得體の知れぬ金圓を貪り取るものすらあるのだ、故にたとひ家賃の二十圓は我慢もし、また收入からして支出する見當を立てゝも、敷金や何かゞ無いといふ事情から、見す〳〵借家さへなし得ぬものが多いのである、此の樣な連中は、仕方なしに間借りなどの窮策に出づるのであるが、此の間借りとても、六疊一室が二十圓、そしてお多分に洩れず、前賃どころか、一軒並に二つ三つの敷金を取られるのであるから、多少の相違こそあれ、同じく住宅に於けると同樣の苦痛を嘗めさせられるのである。

袖手遊俠して居る徒輩ならば兎に角、苟くも夜を日に次いで働きつゝある人々にして、斯くの如く經濟の八方攻めを受けなければならぬといふのは、人世の一大悲慘事である、稼ぐに追付く貧乏ありは、決して筋肉勞働者の上にのみ限つたことではないのだ、知識階級は斯くして苦鬪するのであるが、苦鬪は終に惡戰と化し、最後には所謂死戰となつて、玆に自暴自棄の深

淵に墮入するので、其が心事は眞に憐むべきものである、デ吾人は如何にして彼等の危難を救濟すべきかを考ふるに方つて、先づ第一に思ひ浮び來ることは、彼等知識階級が、果して自分自己の社會的地位と、人生的立場とを考へて居るか何うかといふことである、之れは實際に於て、彼等に取つて極めて重大なる意義を持つものである、彼等をして主要なる國民として、其所に或る階級的責任と眞價を自認せしめ、そして其が頭上に係る生活上の問題を解決せしむるには、何うしても此の二點を自覺せしめなくてはならぬのである。

資本家でもなく、然りとて筋肉勞働者でもない、所謂有識無產階級としての知識階級は、其が生活のみじめさからして、動もすると、社會から無用物のやうに視られるのである、現に或學者の如きは、知識階級なるものは、社會の存立に向つて、何等の意義を有たぬところの、一種の寄生的階級であるといひ、口を極めて其が無能と怠慢と無眞摯とを罵つて居るのである、併しながら吾人を以て之れを見れば、知識階級其のものは、決して其の樣な意氣地の無いものではない、彼等は社會に於ける變態經濟の影響を受けて、事實不遇の境地にあるとは言へ、其を以て直ちに無用の長物であるといふことは出來ない、成程一面から言へば、知識階級其のものとしては、別に之れといふ、社會的貢獻の稱讃に値するものを有つて居らぬかも知れぬ、隨つて彼等が此の社會から跡を絕つたからといつて、何も此の社會が暗闇になつてしまふなどゝいふことは、勿論一般から思考されて居ないのである、此樣な立場にある彼等であるから、無用の長物であるなどゝ評されることも、或は無理でないかも知れぬ。

併しながら、社會には社會としての底力がなくてはならぬ、モシ其の底力なるものがなくて、單に表面一通りの力で動くものとしたら、社會の根柢は、極めて無力であり、無成規であり、不活動であらねばならぬ、が幸には、其所に所謂知識階級なる底力があつて、夫れが深く社會の內部に潛在し、暗々裡に現在の世界を指導し、將來の社會を建設することに於て、大なる主要の力を有することを示して居るのである、且つ之れを實際に見ても、彼等知識階級は、全く社會なり國家なりの中堅たる國民と目すべきものである、彼等は知能を有して居る、そしてよく理性に動くことを知つて居るものである、其が感情は情緒として動き、其が意識は藝術の上に充分の理解を有する、智の人、情の人、意の人として、彼等は社會人たるすべてを備へて居るものである、故に社會なり國家なりにして、若し此の知識階級を失なつたならば何うであら

う、其は全く落寞たる世界であり、無味なる境涯であらねばならぬ、殊に方今社會の精髓とせらるゝところの、所謂文化なるものが、全く此の種の階級の手によつて調唱され整理さるゝに於ては、單に無產なる故を以て、また單に生活に根據なき故を以て、決して其を排斥すべきものではない。

然かく樞要なるべき使命を有するところの知識階級は、決して現在の境遇にのみ悲觀すべきものではない、否寧ろ悲觀するどころか、自分自己の使命が、斯くの如くに大なるものであり、其の社會的位置が、甚だ重要であることを考想して、衷心天に謝して可なりである、財の外に、產の外に、筋力の外に、何等の誇るべき無きものに比して、より多き人生的の或物を有しつゝある自分共は、眞に幸福であると氣附いたならば、彼等は決して悲觀すべきでない、況んや何等落膽するところもなく、倍々其が天賞的知能を尊重して、社會生民のために、建設的指導者たる任務を盡すべきものである。

が吾人が常に讃嘆しつゝあることは、所謂知識階級其のものが、大なる忍耐性を有しつゝあることである、如上翠言せる如くに、彼等は社會的に大なる壓迫を受けて居るものであつて、一面から言ふと、殆ど片手落ちの取扱ひを加へられながら、彼等はいつもヂツと堪へ忍びつゝあるものである、極端なる經濟上の抑壓、異常なる思想上の壓迫、其の他あらゆる抑壓に對して、彼等は實に忍ぶべからざるものを忍ぶものであつた、彼の筋肉勞働者の如き、一つの壓迫に際會した場合には、直ちに其が壓迫に應じて立つに躊躇せぬのである、そこへ行くと、知識階級にあつては、決して然かく輕々に動くものではない、彼等は自分を見詰むると共に、社會を見詰むるものである、そしてまた社會を見詰むると共に、國家を見詰むるものである、故に如何なる場合にあつても、彼等の思考するところは、自己と社會と國家の三角關係の上に立脚されるのであるから、其が行藏動止は、常に理性を中心として見られるのである、此の點に於ても、知識階級なるものが、如何に理想的な中堅的國民であるかゞ分るではないか。

中堅國民は、剛健を以て主としなければならぬ、上にも附かず、下にも附かずといつたやうな、所謂中ぶら國民であつては、中堅に位する價値はないのである、先陣後陣乃至は右翼左翼遊軍が崩れ立つても、中堅は中堅として、儼然其が陣地を保ち、よく全體の頽勢を收拾する底のものでなくてはならぬのである、デよく剛健の國民たらんとするものは、あらゆる事物に試

錬されたものでなくてはならない、如何なる艱苦に際會しても、如何なる誘惑に遭遇しても、斷々乎として心を變ぜぬ底のものであつて、始めて眞に剛健なる國民であり得るのである、然るに之れを世の中の實際に見るに、口には剛健眞摯を唱へながら、其の實何等の稱すべきものがないのが多いのである、彼等は其が外觀に於ては、如何にも强剛であり、雄宕である如く見えるが、其が內的性狀は、案外に應への無いものである、ダカラ時あつて何等かの困難事にでも遭遇すると、平生の俤は何所へやら、一堪りもなく屁古垂れてしまふのである、之れは言ふまでもなく、內に其の素とするところがなく、外徒らに其の形彩を衒ふものであつて、殆ど一嘘にだも値ひせぬものである。

則ち苟くも眞個剛健の國民とならうとするには、其所に大なる覺悟を要する、そして克己的修養の下に、第二の理想天性を現前せしめなければならぬのである、デ吾人は此の方法に就て、常に考想しつゝあることは、可及的に簡易な生活に慣るゝといふことである、此事は前にも既に述べたのであるが、更に繰返して之れをいふと、簡易な生活といふことは、取りも直さず最もよき經濟的生活を採るといふことである、之れまでも屢々言つた通り、經濟といふ事は、今

や社會の眞義であり、根本義である、故に生活其のものにあつても、此の經濟の上に立脚したものでなくては、決して理想的であるとは言へぬのである、デ此の生活に就ての、衣食住のことは、吾人の既に述べた所であるから、今更茲に贅加するにも及ぶまい、たゞ究竟的な知足といふ見地に立つて、過不足の無いやうに、理法的にまた實際的に、之れに處して行きさへすればよいのである、が此の外にモウ一つ言はなければならぬことは、社交の方面に屬する一事である。

人間が集團して、茲に社會人として立ちつゝある以上、社交を以て其が主要なる形式となすべきことは、素より言ふまでもないことである、故に人は社交的動物であるとまで言はれるもので、人の人たる所以のものも、また實に茲に存するのである、ところで社會が進歩すればするほど、社交其のものも漸次に複雜となつて來る、つまり社會と社交とは、其の進歩に正比するもので、社會がまだ一向單純的であつた時には、社交其のものも、また單純的であつたに相違ない、デ兎も角も、今日のやうな、極めて複雜な社會に立つて、複雜な社交に處して行くといふことは、決して容易なことではない、夫れも彼のブルジョア階級のやうな、金もあれば閑

もあるといつたやうな手合であるとしたら、社交などは一向苦にならぬかも知れない、否寧ろ一歩を進めて、彼等は社交を以て、一の娯樂的行事のやうに考へることであらう、がプロレタリアなどになつて見ると、世の中に社交ほど辛く五月蠅いものはないのである、ヤレ正月ぢや、中元ぢや、歳暮ぢやと言つて、不生産的な贈答から始めて、日常の訪問から非常の慶弔、病災の見舞から慰問、さては長上などへの伺訪に至るまで、イヤハヤ實に五月蠅き限りである。

けれども其所が則ち社交の社交たる所以で、如何に迷惑であらうとも、單に五月蠅いといふ一事を以て、之れを拋棄したり廢止したりする譯には行かぬのである、五節句や彼岸の贈答や、其の他あまり意味のない贈答や音問に對しては、大に異議のない事もないではないが、大體に於て、現下に於ける社交的行事として存在さるゝ以上、何うしても或る程度までは、之れに遵行しなければならぬのである、然るに若しも單に理窟のみに走つて、此の事を疎にするやうな事でもあると、社會は直ぐ之れに向つて異議を挾むのである、或は義理を知らぬといひ、或は木强漢であるといひ、或はノッポであるといひ、或は世間知らずであるといつて、遂に一般から指彈されるのである。

ダカラ今の時に於て、一擧にして之れを廢するといふことは難かしいに違ひないが、併し之れに向つて、多大なる手心を加へるといふことは、極めて必要なことであらうと思ふのである、此事に就ては、今日の社會にあつても、往々其が論議を聞くところであつて、或は生活改善會であるとか、或は何々矯風會であるとか言つて、可なり其の多くが發表されて居るやうであるが、サテ其の効果は何うであらう、其の言ふところの可否善惡は姑く措くとしても、果して其が社會的に實行されて居るものであらうか、吾人は未だ不敏にして、其の總てを知らぬのであるが、何うも實行は一つとして伴なつて居ないらしいのである。

百の美論が語られても、夫れに一つの實行が無いとしたら、其の美論は、所詮事實上に無價値であると言はなければならない、生活の改善などゝいふことも、其が事實として行はれるのでなかつたならば、寧ろ之れを改むるにも及ばぬことではないか、則ち吾人は玆に改めて知識階級者に語らうとするところは、御身等先づ其が改善の急先鋒となつて、社會全般の上に、社交改革てふ一大光彈を投ぜよといふことである、此の事たるや社會生活の上にあつては、極めて喫緊な事柄であつて、社交の改善といふことは、直ちに實生活の大半に効果を齎すべきもの

である。

虚禮と稱せらるゝものが、案外社會に多いことは、何人も周知の事であらう、デ吾人は先づ此の虚禮から廢止する、年賀の如きは、素より虚禮ではないが、其れに附隨された、種々な手重い形式的作法などは、全く虚禮と稱すべきものである、則ち普通の場合にあつては、年賀は二日乃至三日を以て定日とし、止むを得ぬ場合には、七日までの間に之れを果たすことを許すやうにしたらよからう、而も其が賀禮の方法は、極めて簡短の方法によるべきもので、徒らに名刺配りとならず、また坐り込んで正覺坊組や蟻黨にならぬやうにし、あつさりと、昆布か鰯か、乾菓子位で一献乃至三献を限度として、理想的に賀年の意を果すと同時に、成るべく時間を節約して、サツサと罷り歸るといふ事にすべきである、其の他の存問や慶弔なども、一に此の流儀に倣ひ、第一に衣服を質素にすること、第二に待遇に無用の餘計な馳走などをせぬこと、第三に應對に無駄な時間を要せぬこと、第四なるべく其の時一回にて濟ますことゝいふのを主眼として、所謂經濟的に、其の所用を果たすのが肝要である。

公會などにあつては、吾人は一層其が質素を叫ばずには居られぬのである、一體諸種の公會などに於て、隨分不經濟的な事實を見ることは、何人も否まぬところであらうが、之れなどは最も害ある通弊として、速かに改めなければならぬところのものである、則ち一般公會に於て、第一に浪費するところのものは時間である、たとひ案内狀などで、如何にキチンと時間を限定しても、之れに臨むものが、夫れを守つた例がない、午前十時とあれば、十一時か十二時にやつて來る、正午といふのは一時か二時で、何うしても一時間以上の掛目がなければならない、時即金といふ今日にあつて、一度の會合に一時間も二時間も無意味な時間を浪費するといふのは、非文明もまた甚しいかなではないか。

夫れから公會なるものは、よく私會に變化したがるものである、公會が私會に變化するなどとは、甚だ奇矯な言のやうであるが、實際は正に其の通りである、則ち何か一つの公會でもあつて、其れへ臨席したとする、ところで公會其のものは、其が性質として、兎も角一定の時間に閉會されるのであるが、サテ其の後が何うであらう、平素から意氣相投じた友達であるとか、久し振りで稀らしく逢つた知人であるとか、または常から酒盃を以て交つて居る人であるとか言つたやうなものに對しては、必ず其所に何等かの妥協が成立つのが常例である、何うも此の

まゝに手を分つのは殘り惜いとか、折角の好機逸すべからずだとか言つて、夫れ等は三々伍々と、さながら牒し合はせたやうにして、第二次的に私會を催すのである、此の樣なことは、何でもないやうなことであるが、實社會の上に、實生活を營むものにあつては、其の內底に、極めて重大なる弊根を培ふものでなくてはならない、則ち此の樣な場合にあつては、先づ第一に公會の所能が破壞される、第二に風紀が保持されない、第三に家庭に不良の空氣を漲らす、第四に子女に惡感化を與ふ、第五に更に時間の大浪費を加重す、第六に支出の大增加を齎す、第七に品行上の非難を招く、一寸數へたゞけでも、之れだけの大なる損失があるのであるが、夫れで居ながら、世の中の紳士だちや學者どもまでが、一向平氣で、而も公然と此の弊事を敢てして居るのは、實に沙汰の限りと言はなければならぬ、吾人は上來口を酸くして、有識無產階級のために述べ來たつたのであるが、玆に至つて吾人は、其の有識無產階級たる知識階級に向つて、其が聲を大にして、所謂世の紳士たり、學者たり、教職たり、物識りたるものを見習はぬやう警告するものである。

夫れから終りに一言すべきことは、知識階級と副業といふことである、斯ういふと或人々は、其の樣な問題はモウ古いものであつて、收入の細い家庭にあつては、副業といふことは疾うの昔から行はれて居るのであるといふかも知れない、勿論其の通りで、家庭に於ける副業などは、既に陳腐の言草であるかも知れない、が其の事はたとひ陳腐であるにしても、其の言ふべき事や、相異した內容の發現やが、新規な意義を有するものとしたら、陳腐必ずしも眞の陳腐ではないのである、副業といふ事柄は古いかも知れぬが、其の事柄が、或は改善され、或は新たに發見されたものであつたら、其は最も新らしきものであり、最も言說すべきものであらねばならない、吾人は此の見解を以て、更に新意味の副業をば、知識階級者の前に推薦しようとするものである。

高が內職位……といふ言葉は、吾人が常に耳にするところであるが、此の樣な言を發するものは、決して眞に副業其のものを理解したものではないのである、高が副業位といふのは、丁度高が稼ぎぐらゐといふのと同じであつて、根本的に經濟の原則を無視したものである、勿論副業といふ程のものであるから、然う大した收益が得らるべきでないには極つて居る、けれども、之れを本收入に附加するとなると、案外有効な働きをなし、時としては、よく其が本收入

の不足を塡補して、生活の上に根本的な便益を與ふることがあるもので、決して單に高が副業位といつて、度外に附し去るべきものではないのである。

併しながら吾人は、決して從來に於ける副業を以て、理法に完全であるとするものではない、また其の副業が取扱はるゝ現狀を以て、充分なるものとはせぬのである、言葉を換へて之れを言へば、所謂副業なるものに究竟的の開發を加へ、そして夫れを最も徹底的に、また最も普遍的に、過不及なく一般に行き渡らせなければならぬと思惟するのである、之れを實際に見るに、現在の副業の多くは、只管に簡易なものばかりを利用して居るやうである、養豚や養鷄や養兎のやうなものは姑く別として、其の他のものにあつては、謂はゞ老人子供にも出來るやうなものゝみが擇ばれて居る、素より夫れが本業といふのではなく、謂はゞ餘暇を利用しようといふのが本旨であるから、簡單平易なものを擇ぶといふことは、決して無理なことではなく、寧ろ當然とすべき事であるが、併し社會が夫れ相當に進歩されて居る今日としては、其が副業としても、更に一歩を進めたものでなくてはならない、たとへば養鷄をやるにしても、之れまではたゞ老父や子供のみに任せて置いて、舊式の飼養法で放つて置くといふやうなことでなく、少なくとも文化的飼養法を採用して、可及的に產卵の增加を講じたり、育雛の良策を計つたりすることに注意を拂ひ、其が家の主人公も、朝夕の少時間と、休暇日の時間を割いて、手づから其が飼育に參するといふことでなくては、眞に徹底したものとは言はれぬのである。

然うして兎に角、副業の收入を利用すべく考へねばならぬ、副業の收入を本收入に加へ、之れを全收入として、一家全體の經濟を立てゝ行くといふことも、素より一つの方法であるし、副業の收入は之れを別途のものとし、之れを以て家賃に充當するとか、米代に充當するとか、或は教育費に充當するとか、其他或る一定の費目に限り充當するとかいふやうなことも、一つの方法として惡いことはないのである、其の何れにしても、之れを如實に利用するといふ事が肝腎で、或人が副業から得た收入を以て、酒代に充當することに極めたなどは、折角の玉を瓦にしてしまふやうなもので、愚の骨頂とも何とも評して見やうがない。

此の酒代で思ひ出したが、プロレタリアのあらゆるものを通じての大敵は、實に酒と稱する魔性のものである、吾人は事の序に、之れに就て語らなければならない、元來時の何れたるを問はず、所の何たるに論なく、個々の人の經濟をば、同じく個々として打ち壞して行くものは、

全く此の酒といふ一物であらねばならぬ、酒は百藥の長などゝいふが、其の實は百毒の長とも言へよう、成程酒にはまた酒としての一つの特長があつて、少しく之れを用ひたならば、場合によつては、良き効能を見せることもあるが、之れもモルヒネも場合によつては良藥となるに等しいもので、其が毒性を有する點に於ては、決して何等の讃辭をも捧ぐべきものではない、或る人は此事に就て、社會に若し究竟的廢酒が行はれるとしたならば、人は經濟の船に乘つて、黄金の島に向つて船出するものであると言つたのであるが、此の言などは、よく其の實際を穿つたものとせねばならぬ、昔からある下世話に、下戸の建てたる藏はないといふのがある、之れは頗る反理的な事實と見えるのであるが、眞實決して其の通りのものではない、兎に角下戸には何うしても下戸としての强みがあつて、たとひ藏は建てないまでも、其が生活の奥底には、何所となく力强い潜勢力を有つて居るのである、殊に之れを生理的の方面から見ても、酒が非衛生的であることは言ふを俟たぬところで、一國の精神病者は、費消さるゝアルコールの量に正比さるゝとさへ言はれて居るのである、たとひ夫れが精神病者として算せられないまでも、之れによつて國民の體格に損耗を來すべきは、當然のことで、殊に累を第二の國民たる小兒に及ぼす事は、非常なものがあるのだ、之に加ふるに、經濟上の損失を以てするのであるから、社會的にも國家的にも、大なる弊害を齎すべきは言ふまでもない、斯の如き性質のものでありながら、猶且つ之を飲用しなければならぬ國民は、實に不幸のものと言はなければならぬ。

政府は好んで國民の幸福を說くものである、が其の一面に於て、造酒者の租稅を唯一の財源として居る、而も何ぞ知らん、其が造酒稅なるものは、事實に於て、其が飲用者たる多數の國民が負擔して居るのではないか、して見ると國民の多くは、自ら多額の金を擲つて、自己を毒するものを求めて欣々然たるもので、世の中に之れほど馬鹿氣た話しはないのである、けれども政府者として都合さへよければ、文句なしに造酒者を保護するので、矛盾も甚だしいものと言はなければならぬ、併しながら此の害を知つて、而も之れを止むることを知らぬといふのは、畢竟國民の無智をさらけ出したに外ならない、斯くの如きは、或意味に於て、文明國民の恥辱でなくて何であらう、苟も世の識者を以て任じ、經世家を以て居るものは、深く思ひを玆に致し、一切の國民をして、此の弊害から脫れしむるやう企圖すべきであらう、徒らに一部の民情に迎合し、社會の風潮をして、倍々不良の地に誘致する如きは、正しく社會の蠹毒であり、國

家のバチルスであらねばならぬ、就中或る論者の如く、單なる勞働者の能率問題を提げ、酒を以て生産に對する有利成分なりと曲說するものあるに至つては、社會國家のため、洪敷大息に堪へざるところである、吾人は斯くの如き曲學阿世の徒が、滔々として社會を毒し、國家を害し、人生に大なる損耗を與へながら、自ら高しとして、白眼を以て世人に傲るの態度を憎まずには居られない、寄語す現代に於ける有識無産階級者よ、須らく御身達の地歩に自覺し、緊褌一番して、是等の徒を吾人の圈外に驅逐すると同時に、知識階級としての偉大なる實力を示すべきである、そして社會國家の中堅に儼立し、隱然としてあらゆる階級に號令するこそ、眞に快哉のことではないか。

第二十章　水平運動より觀たる思想中毒

現今高調された社會問題の中に、所謂水平運動なるものがある、此の運動たるや、一部の人人が、其が本然の地位にまで復歸しようとする運動で、純然たる社會問題と稱することは出來ぬのであるが、兎に角社會の一方面に偏起して、或る一定の運動を續けつゝある以上、之れもまた一個の社會問題と見る必要があらう、一體水平運動なるものは、如何なる事柄をいふのであらうか、此の問題を解くには、先づ之れからして解釋して行かなければならい。

元來此の運動の起原は、所謂我國に於ける、特殊部落と目せられた、一部の人々が、人間平等の見地からして、特殊民としての社會的取扱から超越しようと企圖したところに存するものである、則ち彼等の中の有志の徒が、時勢に應じて敢然として立ち、茲に水平社なる一結社を設けて、其が所期の目的を完成せしむべく、茲に宣傳と實行を兼ねたる新運動を起すに至つた、名づけて水平といふ意は、さながら水の低きに處して平らかなる如く、如實に平等均齊なるべしといふのにあるのだが、あらゆる階級を通じて、おのがじゝ現代に目醒めたる今日、此の人々の間に、斯うした運動の起されるといふのも、素より當然の氣運とすべきであらう。

彼等が誤まつて或る部落に逸出したのであるか、また一般が誤まつて彼等を逸出せしめたのであるかといふことは、茲に姑く之れを措くとして、兎に角彼等が、特殊の部落に屈居して居たといふことは、可なりに長き事實であつた、現時にあつては、其が部落に於て六百を算し、

其の人口にして三百萬を數ふといへば、之れを社會的に見ても、また國家的に見ても、決して少數なものではない、隨つて其が社會なり國家なりに於ける關係としても、素より重大であるべきは、言を俟たざるところである。

此の部種に數へらるゝところの人々の祖先は、吾人の祖先と何等異なるものでなかつたことは、今更吾人の吻々を要せざるところである、ところで其の人々が、所謂特殊的地位に伍入し、其所に一つの部落を形成したのは、可なりに遠き以前であつた、史家の傳ふるところによれば、其が種族的に一部落をなしたものには、皮革を業とするものを骨子とし、之れに種々雜多な部分的職業者を混じて、集團的に結合されたと謂はれるのである、が後世に至りては、更にまた種々雜多なものが混入された、則ち故あつて世を忍ぶ人達や、外國から歸化した人物や、稀れには刑罰を以て此の部落に編入された百姓町人もあつたとのことである、して見ると其の名はたとひ特殊部落であつても、其の實はあらゆる方面の人々の集合せるものと見ても差支へはないのである。

ところで此の人々が、何故に一般社會から別物扱ひにされたのであつたか、之れは冷かに考察して見る必要があらう、一體我國民は、其の本來的性質からして、淨潔を以て人間唯一の美德と考へて居るものである、此の固有な考想は、現今にあつても、猶ほ些も變るところはないが、兎に角然うした考へを持つた一般人は、動もすれば皮革業者などを以て穢れたるものであるといふ、一種の過誤的觀念に驅られ、何とはなしに、次第々々に彼等から離れ遠ざかるといふ狀態を呈するに至つたやうに思はれる、たとひ皮革を以て業としたからと言つて、何も取り立てゝ忌み嫌ふべき道理もなく、また其の業者が、穢れたものであるなどゝいふことは、之れを理法の上に見ても、不當の誤信であることは言ふまでもない、併しながら世が尙ほ未開に屬し、且つ小乘的宗教などが勢威を張つて居た時代にあつては、此の樣な誤れる信念を抱いたといふことも、また是非もない事かも知れない、兎に角彼等は、斯うした行き懸りから、所謂特殊部民となつて、長い間一種の壓迫的取扱を受けたことは、否むことの出來ぬ事實であつた。

此の特殊的取扱といふことが、所謂水平運動に於ける、言議の一となつて居るのであるが、斯うした取扱が、之れを今日から見て、不當であつたことは言ふまでもない、前にも言つた通りに、一般の人々は、其が誤想よりして、彼等を甚だしく卑下したのであつた、そして有體に

言へば、彼等と伍することさへ忌み嫌つたのである、此の風潮は、官憲にまで及ぼして、官廳公署に於てすら、明らかに彼等を以て、一種の特異なる部族として取扱つたのである、則ち彼等は、長い月日の間に、いつしか知らず識らず特殊民の極印を打たれたので、斯うなつては、彼等としては到底社會的に浮む瀬がないのであつた、特に往時に於ける百姓町人達は、自分達の目の上に位するところの、所謂武士階級のために、居常大なる屈辱を受けて居るので、所謂この一部國民に對しては、遠慮會釋もなく、頭から壓迫するといふ弊害があつたのである、此の様なことは、謂はゞ不平の轉嫁であるが、此の下級階級のために、手もなく壓迫されるといふことが、彼等に取つて、何んなに不平であり、不滿であつたか知れぬのである。

併しながら比較的に從順であつた彼等は、此の大なる屈辱に對して、決して怨嗟の聲を放つことはなかつた、否寧ろ彼等は、恰も大悟徹底せるものゝ如くに、眼を閉ぢ口を塞ぎて、我れと共の身を謙遜して、よく百姓町人にまで膝を屈したことは、眞に諒とすべきものがなくてはならない、が壓力は、共が抵抗の薄きところに多く加へらるゝと同樣に、一般の國民も、そしてまた共を統轄する官憲も、彼等が謙遜すればするほど、倍々共が壓迫を加へたのであつた。

此の究極のない壓迫と、間斷のない屈辱とは、茲に彼等としての、第二の天性を形成せしむるに至つたのである、此の第二の天性といふのは、素より共が境遇的假定性のものであつて、勿論彼等の性狀では無いのである、が此の第二の天性と見るべきものが、彼等自身を禍したといふことは、蓋し爭ふべからざる事實であつた、則ち彼等は、法外な壓迫に對して、極めて卑屈な態度を以て、些かにても之れを一時に愉安しようとした、そして堪へ得ざる屈辱に忍ぶの心は、終に一種の我觀主義となつて、倍々一般と懸絶する傾向を生じたのである。

彼等の種族が、オロツコ族(喜田貞吉氏說)であるとか、共の族稱が古くよりエツタと唱へられて居たとかいふやうなことは、今茲に多くを言ふ必要はない、また夫れがエトリ(餌取)であるとか、生來の肉食者であつたとかいふやうなことも、茲には共が詳解を省略する、吾人を以て之れを言はしむれば、何れの種族にあつても、共が根原に於ては、決して尊卑的差別や、優劣的相違などがあるべき筈ではない、が因習終に性をなして、茲に種々な相異なつた種族が現前されたのであるから、たとひオロツコ族であらうと、エツタ族であらうと、今日にあつては、最早何等の差別を以て觀るべきものではないのである、若し餘りに嚴格に詮索立てをすると、

時めく貴族の祖先も、或は大盗の種類であるといふやうな、思ひ懸けない事實も現はれて來るのである。

其は兎に角として、彼等の常職が、養鳥飼畜であり、屠殺剝皮であり、染革淹皮であると言つたやうに、日常畜類生物の生皮などを資料として、其が生計を營んで居たところから、自然獸類の肉なども食ふに慣れて居た、然うした關係から、其の子孫も父祖の業を世々にするといふことになつて、次第々々に一般から嫌忌さるゝに至り、婚を通ぜず、交りを結ばず、自ら別域の地に居り、たゞ其が同類とのみの交渉を持つのみになつたので、前に言つた通りに、終には全然一特殊の部民となつてしまつたのである。

彼等を以て、穢れたるものとしたといふことは、今日から見れば全く違法であつたのである、然るに遠き上代にあつては、夫れにも相當の理由はあつたのであらう、前にも言つた通りに、我國人は、元來が清潔といふことを以て、心身の第一義としたものであつた、則ち米穀を食ふことに次いで、最も尙ばれたものは、潔癖といふ一つの特徴であつた、此の國民性の現れとも見るべきものは、神祇は汚穢を忌み嫌ふといふ事である、故に祭祀には、必ず沐浴齊戒といふことをする、此の事は神祇令にチヤンと規定されてあつて、就中獸肉五辛を以て、禁忌の第一としたものである、此の樣な思想と形式とを持つて居た國人の間にあつて、獸を屠り、肉を喰ふところのものをば、異端者として取扱ふといふことは、今日の新しい思想としては頗る間違つたことであつた、が其の取扱が、單に異端者としてのみであるならば、別に重要な問題も起らぬのであつたらうが、之れを異端者とすると共に、更に之れを忌まはしきもの、嫌ふべきもの、賤しきもの、劣れるものとして、一種の侮蔑的待遇を與へることになつたのが、今日に於ける彼等の憤懣する焦點であらねばならぬ。

であるから彼等を目して、特殊部民とし、夫れに向つて、極端なる差別的取扱をなすといふことは、つまり因襲に捉はれた、一種の僻見に外ならぬのである、併しながら社會の進運は、あらゆる睡れるものに向つて、覺醒の曉鐘を傳へたのである、此の曉鐘を聞いて、愕然として枕を蹴つて起てるものは、其が永き長夜の夢を回想して、覺醒の遲きを悔いずには居られない、則ち猛然として起ち、遽然として行き、一刻も早く其の本然に復しようと、跪きに跪くに至つたのである、則ち水平社の人々による、如實の運動の如きも、此の覺醒によりて招來せられた

もので、長い間社會の最底に屈居して、全身の骨と肉とをば、怨嗟の塊と化せしめた彼等としては、素より當然の爲し方とせねばならぬ。

所謂水平社なるものは、奈良縣柏原在に住みつゝある、正義を愛し人道を進む、純眞淸廉な、若き三人の青年によつて、勇ましくも呱々の聲が揚げられたのである、デ其が創立の趣旨として叫ばれたところは、吾等の地位を水平の地位に引き上げなければならぬ、吾々は自らの力を以て解放を期し、失はれた人間の權利をば、如實に奪ひ返さうとするものであるといふのであつた、そしてまた此の事を完成せしむる上に就ては、個々の運動では効果が薄い、如實に其が目的を貫くためには、全國に散在する吾が部落民が大團結を決行しなければならぬといひ、奈良と京都とを中心として、盛んに之れが宣傳を開始したのであつた。

併しながら玆に斷つて置くことは、彼等一部國民に對する問題が、水平運動以前には絶無であつたかといふに、夫れは決して然うではない、彼の公道會といひ、同愛會といふ樣なものも、早く既に此の問題に着眼したのである、そして夫れ相當に其が解決に向つて力を盡したと言はれるが、夫れだけでは、餘りに効果が無かつたらしい、吾人は前に於て、屢々言つた通りに、現代の人々は、何うも運動好きである、そして何か一つの事件問題でもあると、其所に恩惠的や實名的な或る第三者が乘り出して來るのが例である、故に特殊部落の人々にあつても、是等の聲援や運動には、素より多大の感謝を拂つたであらうが、其の運動が他的であつて、自的でないところから、心底からは餘りに夫れ等に信賴せぬのであつて、自らの力によつて解放を期すといふ聲名通りに、他力を俟つことなしに奮起したのであのた。

此の新らしい運動は、彼等一部國民に取つては、實に大旱の雲霓であつた、そして譬へばホクチを得た火の如くに、一部落から一部落へと燃え擴がつて、あらゆる部落の人々は、さながら響きの如くに應じ、終に大正十一年三月三日を以て、京都を以て本部とするところの創立大會が、京都の岡崎公會堂に開かれたのであつたが、此の日會同せる各地部落民の代表者は、約四千を算せられ、最も悲痛的に、最も熱狂的に、そして或る一面には歡喜的に、其が式が擧行されたといへば、此の運動が、如何に彼等の共鳴を有つたかが分るであらう、デ此の大會に於て決議された綱領は、「一、吾々特殊部落民は、部落民自身の行動によつて、絶對の解放を期す、一、吾々特殊部落民は、絶對に經濟の自由と、職業の自由を、社會に要求し、以て獲得を期す、

一、吾々は人間性の原理に覺醒し、人間最高の完成に向つて突進す、」ト言ふのであつて、其が宣言は、「全國に散在する我が特殊部落民よ、團結せよ、長い間虐められて來た兄弟よ、過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によつてなされた我等の爲の運動が、何等の有難い効果を齎らさなかつた事實は、夫等のすべてが、我々によつて、又他の人々によつて、毎に人間を冒瀆されてゐた罰であつたのだ、そして、これ等の人間を剝るかの如き運動は、かへつて多くの兄弟を墮落させた事によつて、自ら解放せんとする者の、集團運動を起せるは、寧ろ必然である、兄弟よ、我々の祖先は、自由平等の渴仰者であり、實行者であつた、陋劣なる階級政策の犧牲者であり、男らしき產業的殉教者であつたのだ、ケモノの皮剝ぐ報酬として、生々しき人間の皮を剝取られ、ケモノの心臟を代價として、暖かい人間の心臟を引裂かれ、そこへクダラナイ嘲笑の唾まで吐きかけられた、呪はれの夜の惡夢のうちにも、なほ誇り得る人間の血は涸れずにあつた、さうだ、そして我々は、この血を享けて、人間が神にかはらうとする時代にあつたのだ、犧牲者が烙印を投げ返す時が來たのだ、殉教者が、その荊冠を祝福される時が來たのだ、我々がエタである事を誇り得る時が來たのだ、我々は必ず卑屈なる言葉と、怯懦なる行爲によつて、祖先を辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ、さうして人の世の冷たさが、何んであるかをよく知つて居る我々は、心から人生の熱と光を、願求禮讃するものである、水平社はかくして生れた、人の世に熱あれ、人間に光あれ、」ト言ふのであつた。

其の事理たるや極めて明白、言々肺を衝き、句々肝を抉ぐるの慨があるではないか、僅々數百の文字ではあるが、其が僉く長い歲月の苦衷の結晶であることを思へば、覺えずして襟を正さずには居られぬのである。

彼等特殊部落民と稱せらるゝものが、近代に至つて一層の慘境に立たされたことは、前にも言つた通りに、最も極端なる官民的壓迫待遇に其の原由を有するものである、則ち德川氏が幕府を江戸に定むるや、所謂四民制度なるものを制定した、士農工商といふのが之れで、士を以て民の最も上位なるものとし、農工商を以て、順次に之れに次ぐものとしたのである、そして國に民たるものは、如何に細小のものといへども、必ず此の四民の中の何れにか編入したのであつて、之れには一の異例をも許さなかつたのである、ところが所謂特殊部民に對しては、全く之れを四民の圈外に置いて、民としての取扱をなさぬのであつた、則ち穢多なる名稱の下に、

さながら人間部外でゞもあるかのやうに、殆ど畜生同然に見做したのであつた、夫れまでは、たとひ忌み嫌はれながらも、人間として心得られて居たものが、四民制の制定と共に、彼等は手もなく人格を褫奪されてしまつたのである、之れまでは、彼等に對する嫌忌は、一般人の任意であつたが、今となつては、其が實に法定的となつたのである、結婚も、同居も、同食も、一般人との間には許されない、頭髪の如きも、一般人と區別するために、二重元結が用ひられ、燬くが如き夏日の炎天にあつても、笠や其他の冠り物は許されなかつた、まだ夫れば かりでなく、如何なる時にあつても、木履を穿くといふことは嚴禁され、夜間に城下へ入ることも禁じられて居た、之れに加ふるに、一般の人家を訪づれるにも、決して正門や表門からは入れぬのであつて、出入は裏門か木戸口か乃至は不淨門にのみ限られて居たのである。

之れだけでも、大した人權の蹂躙であるのに、更にまた一層大なる屈辱があつた、則ち彼等は法の上にも何等の慶澤を蒙ることがなく、刑罰を受くるときの如きも、必ず最も重きによつて處斷されるのが例であつた、且つ一般人と爭鬪した場合にあつても、所謂喧嘩兩成敗といふ成法に照らさるゝことなく、必ず彼等特殊部民のみが成敗されることになつて居た、殊に彼等は、人間部外として、何事にもあれ、一切抗言異議を許されぬのであつた、萬一何か逆らひ口でも听かうものなら　忽ち一刀の下に、斬捨て御免の成敗を受くるといふ、不合理、非人道の取扱の下に、奄々たる氣息を繫いで來たのである。

其は兎に角として、水平社は此の如くにして設立せられ、水平運動は此の如くにして開始された、デ所謂水平社に於ける人々は、眞に一代の殉教者たる態度を以て、敢然として其が運動に從事しつゝあるのである、其の有樣は實に水火をも辭せぬといつた慨で、其の眞劍熱烈なる事、東奔西走殆ど席の溫まる暇もなかつたのである、或者は家を追はれ、或者は逮捕の身となり、あらゆる迫害は彼等の上に降り灌いだが、彼等は決して辟易するところがない、たとひ如何なる阻害が湧いて來ようとも、我等の意思は決して阻止されるものではないと叫んで、時あつては殆ど不眠不休、不食不飲的に奮鬪するところは、決して他の如何なる運動者にも見られぬところのものである。

如上の宣傳と運動は、至大の反響を社會の全般に與へたのである、況してや其が部落にあつては、殆ど眠つて居た獅子が目覺めたやうに、何れも猛然として蹶起するのであつた、彼等が

一千餘年に亘つて、積りに積らされた悲憤の血は、ボイラーの中に於けるが如く沸き立てさせられた、今が今までは、部落民であるといふことに氣を落して、兎角に肩身を狹くして居たものも、今や我れと名乘つて出て、却つて部落民であることを誇るやうになつたのである、此の花々しき迅雷突風的運動に對しては、實に何人と雖も、驚異の眼を睜らずには居られぬであらう、デ先づ之れを以て、我身のことの樣にして驚喜するのは、例の無產階級に屬する人々であるが、雨の夜の山路に、大入道にでも出會つたやうに驚くのは、そんじよ其所らの貴族富豪や當局者であると言はれるが、何れにしても目覺ましいものと言はねばならぬ。

爆發時の力は、緊張時の力の數十倍若くは數百倍である、今まで隱忍に隱忍を重ねて居た彼等は、今や絕大なる力を以て各方面に殺到しつゝあるのだ、則ち彼等は、其が平生に於て、最も不快とするところの本願寺に向つて、先づ募財拒絕といふ巨彈を投じたのであつた、由來彼等と本願寺とは、切つても切れぬ間柄であつて、本願寺の側からしては、特殊部落は其が募財の好得意であり、また比較的に物持信徒の集團であつた、ところで特殊部落の側からすれば、現世に薄倖なる生涯を超えて、未來に好生涯を得ようとする信仰からして、本願寺に對して無比の歸依を持つところのものであつた、此の兩者の關係が一たび逆轉して、歸依者たり信者たる部落民が、本願寺に對して、美事臀鐵砲を食はせたといふのは、實に不可思議なことゝも見られるのであるが、夫れにもまた餘儀ない理由が存するのである、元來本願寺なるものが、募財によつて其が教界的存在(募財の大半は法主の遊蕩費となる)を續けて行くといふことは、何人も周知の事であらう、ところで前にも言つた通りに、特殊部落は、彼等が募財の好得意場であるところから、近年彼等は夫れを好いことにして、時々多額な募財を申込むのであつた、部落民としては、然うした多額な募財に應ずることは苦痛でもあり、且つ謂れのないやうに感ぜられもしたが、兎に角以前からの行懸り上、成るべく之れに應ずるやうにして居たのである、然るに本願寺の方では、たゞ募財の便宜上のために、口舌だけの好意を此の一部國民に寄せるだけであつて、內心には嫌忌と侮蔑とを有して居たのであつた、則ち部落寺院の僧侶に對する待遇なども夫れに準じたもので、表面は然うでなくても、內實之れを回避するといふやうな態度が、何時とはなしに、此の一部國民の感情を害したのである、殊に部落寺院に於ける僧侶の如きも、本願寺が佛者にあるまじき心事に處るのを見て、常に不滿不平を抱かずには居られなかつた、

そこで彼等は黑衣同盟を造つて、其が反抗的氣勢を示したのであるが、斯うした關係から、終に募財拒絶の不意討ちを食はしたのであつた、勿論此れとても、喬起した猛獅の餘勇と見れば見られるので、何物をも摧かねば已まぬといふ鋭氣から、斯る點にまで其が解放的行動を執つたものであらうが、いつも優に百萬圓級の募財を得るといふ部落民から、强面に去り狀を叩きつけられた本願寺こそ、眞に泣面に蜂であらねばならぬ。

水平社第二回大會は大正十二年三月三日を以て、再び京都なる岡崎公會堂に於て擧行されたのであつたが、此の時には、隨分と多くの案件が議決されたのである、或は人間の尊敬すべきことを、小學校に徹底さす事とか、或は軍隊內差別に就て、陸海軍大臣に反省を促す事とか、或は一般民間に於て、穢多等の言辭を弄したる場合の態度に關する事とか、或は部落改善費を拒絶し、徹底的改善策を建議する事とか、或は本願寺より獨立して、自由敎壇とする事とか、或は募財拒絶の徹底を期する事とか、全國婦人水平社設立の事とか、水平運動の國際化に關する事とか言つたやうなものが、重要な案件として目さるゝものであつた。

デ此の中にもある通りの、募財拒絶の徹底を期するといふことに就て、大會の翌日、則ち三月四日といふに、三萬の民衆よりなる大示威行列は、東西本願寺に至り、苦もなく其の本堂を占領して、代表者達は代る〳〵賽錢箱の上に立ち、或は偶像を破壞せよとか、或は本當の親鸞にかへれなどゝ叫んで、中には銅貨などを本尊の阿彌陀佛に投げつけ、悠然と引き上げたのであつた。

如上は一の水平運動と、本願寺の間に生れた出來事であるが、吾人は之れを見て、人心の時代的變遷と、境遇的推移とに驚嘆せずには居られぬのである、永らく社會のドン底に居て、賴りない今生の生活に倦み、來世の果報を願ふといふ、やるせのない佛（是身是佛が宗敎の本旨で、今生の利益や來世の果報などは嘘の方便）賴みも、世運の進展には、忽ち一蹴し去られるのである、曾ては最も弱いものとして立たせられて居た彼等部落民は、今や文明の風潮に乘じて、最も强きものとして猛進しようとして居るものである、否彼等は、今や鹿を逐ふ獵師は山を見ずといつた慨で、其が目的とするもの以外には、何等をも認めようとはせぬものである、一たび人生的に目覺めた彼等は、他力本願などの迷夢を繰返しては居られないのだ、他力よりも自力だ、自分達を生かすものは、素より自分達の力でなくてはならない、自分達の力を措いて、

他に自分達を生かして行くものがあると考へるやうなことでは、決してよりよく、よりつよく生きて行かれるものではない、斯うした考へが、彼等の胸臆の全幅に漲られて居るのである。

人間は一生懸命となることによつて、驚くべき精悍の氣を示すものである、彼等部落民と稱せらるゝ人々が、殆ど決死の態度を以て、一毫の非違をも糺彈し、一糸の否理をも攻擊しようとすることは、一面に其が如實の最大要求による突進と見るべきものであらう、此の位の勢ひを以て、驀然に進み行くのであるから、其の運動が案外に大なる成功を見るので、敢然として之れを行へば、鬼神も之れを避くるといふものであらねばならぬ。

之れを要するに、彼等所謂部落民は、人間として根本的に覺醒したものである、併しながら彼等の覺醒は、たゞ人としての覺醒で、眞なる社會人としての覺醒は、未だ猶ほ搖藍の中にあるものとせねばならぬ、此の樣なことは、獨り彼等部落民の上にのみでなく、あらゆる一般の人々にあつても然うであるが、吾人は今彼等に就て、最も痛切に此の感を深うせぬを得ぬのである。

羅馬の成るや、成るの日に成れるにあらずといふことは、何人も周知するところであらう、之れを所謂部落民の上に見るに、彼等は今や如法に覺醒したとはいへ、回顧すれば實に長い長い間の歲月、最も深刻なる悲慘の境地に沈淪して居たのである、シテ見ると、其が境遇による變化は、或は本然の性格にまで相當の影響を與へて居るものとせねばならぬ、たとひ其れが一時性のものであるにしても、夫れをして其の本然に復歸せしむる上には、より大なる努力と、より大なる用意を以てせねばならぬ、此の點に於て、彼等所謂部落の人々は、より多くの人生的負擔を有つものとしなければならない、故に吾人は、此の時此の際、徒らに其が鋭氣に逸ることなく、また奔馬の狀勢にのみ乘ずることなく、時に或は一歩を退いて、事を全體の上に策し、所謂十全の計を以て、正々乎堂々焉として、而も綽々餘裕ある底の運動を續くべきものでなくてはならぬ、然るに萬一にも、たゞ一時の氣勢にのみ眩惑して、假りにも輕擧妄動の事があるとしたら、其が最後の目的を成就する上に、大なる支障を來すことを注意しなければならぬ。

世の中の言葉に、目的のためには、手段を擇ばずといふのがある、些々たる小さな目的などは兎に角、苟も一廉の大なる目的に對して、其が達成を期する上には、如何なる方法を執るも

よろしい、ト言つて害惡的な方法であつては困るが、然うでない限りは、何んな手段を取つてもよろしいといふ事である、之れは何か一つの事業を成し遂げようとする上には、極めて必要なことであつて、此の覺悟を以て立つものでなくては、決して成功といふことは得られぬのである、ダカラ水平運動のやうなことも、其が達成を期する上には、勿論如何なる手段方法をも執るべきであらうが、たとひ然うするにしても、其所に或る手加減を加へるといふことが必要でなければならぬ。

思ひ切つた遣り方は、往々望外の大なる効果を收むることがある、併しながらまた時としては、之れと反對に、ドエライ失敗を招くこともあるといふことを忘れてはならない、進まんと欲するものは先づ退くとか、伸びんと欲するものは先づ屈するとか、急がば廻れとか言ふやうなことは、畢竟此のやうな場合を想像した、失敗豫防に外ならぬのである、デ水平運動の如き、或意味に於ける氣分運動としては、時としては所謂遣り過ぎといふ弊に陷り易いのである、ダカラ其が宣傳や運動の衝に當るものは、努めて此の弊を回避しなければならぬ、若しも此の用意にして缺くるところがあつて、勢に乘じ、氣に任せ、徒らに猪突をのみ事とするやうなことになると、或は一般社會からして、更に新らしき嫌惡を佔ひ、惹いては折角集め得た同情をさへ失つてしまふやうな結果ともなるのであるから、兎にも角にも、自重といふ態度を以て、其の事に當るべきものである。

そは姑く措き、吾人は再び、所謂特殊部落なるものに眼を轉ぜねばならぬ、特殊部落の發生や沿革は、既に前にも其が大概を述べて置いたのであるが、世は二十世紀の中葉に進み、大正の御代も既に十餘歳を閲した今日に當つて、吾人は不思議にも、尙ほ我國の到所に於て、特殊部落なるものを見、また特殊民なるものを見るのである、特殊部落であるとか、特殊民であるとかいふやうな名稱は、一體何うして今の世に現存されつゝあるのであらう。

ソシテ夫れが此の愛すべき同胞のことであり、一部國民の集團であるといふならば、愈々以て不思議に感ぜざるを得ないのである、何故に然るかといふに、所謂特殊族などゝ呼ばれて居たものなどは、モウ疾うの昔に無くなつてしまつた筈である、彼の明治四年八月に於ける、太政官の布告は、明白に且つ立派に、當時現存の彼れ一部國民三十八萬人をば、一般人民に編伍してしまつたではないか、華族や士族は別として、所謂平民なるものは、權でも八でも、杢で

も田吾でも、みな一樣平等な民と定められたのである、シテ見れば、部落民などいふやうな變挺古なものは、其の時に於て既に我國家から除却され抹消されたものに相違ないことは、如何なる曲辯を以てしても、斷じて否拒することは出來ない筈だ。

ところが事實として、夫れがまだ現存されて居るから驚くではないか、斯ういふと或者は、所謂エタ族なる稱呼が、戸口の記錄に存しない故を以て、吾人の此の所言を駁するであらうが、夫れはたゞエタなる文字のみに就てのことで、決して事實に說入したところのものではない、成程前にも言つた通りに、其の當時四民の階級的區別が廢止され、部落民も非人も、一樣に平民として認められたのは事實であつたに相違ない、がたとひエタとしての稱呼は除き去られたにしても、其が他の或る名稱として殘されたのでは、事實何にもなつた話しではないのである、則ちエタなる戸口上の稱呼が廢止された後は、夫れが新たに、新平民として呼ばれて居た、ところが、新平民といふのは、餘りに現實な稱呼であり、且つ士分から平民に伍入したもの、上にも通ぜられるやうなものであるところから、終に特殊部落など、呼び出すに至つたのが、所謂今日の特殊部落である、然るに兎角名稱道樂である我國民は、更に之れを呼ぶに後進部落を以てし、また細民部落だの、少數同胞だのと呼ぶに至つたのである、之れではたゞ名稱のみが改まつた譯で、事實に何等の變ずるところがないのである、曾ては汽車の賃金や、旅館の宿泊料などに、上等中等下等の區別的稱呼が用ひられたが、夫れが今日では、悉く一等となり二等となり三等となつたと同じであるのは、寧ろ滑稽ではないか。

明治四年八月の令達は、決して改稱としての令達ではなかつた、世界の進運により、先帝の宏謨を體した、階級民の廢止であつたのである、然るに其が全く空文に終り、部落民なる一種の階級民が、麗々しく現存されるといふことは、不都合もまた甚しきものと言はねばならぬ、彼の水平社に屬する人々が、此の一事を以て、正しく先帝陛下の御聖旨に悖るものであると絶叫するのも、決して理由のないことではない。

彼れ一部國民が一の職業民族であるといふことは、彼等にあつても誇るべきものでなくてはならない、此の一部國民に比して、モウ一層下級に置かれた、所謂非人などに比すると、眞に天地霄壤の差があるのだ、非人は他の合力によつてのみ生活するもので、此の一部國民が職業的に活きて行くのには比すべくもないことである、ダカラ以前にあつては、非人はかばね(姓)

であるといはれる、夫れは古記にも姓非人を賜ふとあるにても知り得らるゝところであるが、一方部落民となると、モウ夫れは一つの家格として認められたのである、故に非人は時として一般の民になることが出來るが、此の一部國民には夫れが許されなかつた、ト言ふのは、家格則ちいへがらの無いものは、場合によつて夫れを得ることも出來る、が此の一部國民は既に夫れとしての歴乎としたいへがらである以上、其を變改することは出來ぬといふのである、之れは如何にも尤もなことで、身分の固定を原義として居た往昔にあつては、然かあるべき見解であらねばならぬ、元來部落族といふのは、其が分化が、決して人種的差別から發起されたものではなく、まつたく職業上から分化特立されたものであることは、爭ふべくもあらぬことである、既に職業的に分立されたものであつて、人間的には何等の差異もないものであつたら、何も別に事々しく差別呼ばゝりや、特殊扱ひをすべき必要も道理も無いではないか。

斯ういふとまた一部の論者があつて、其が差別を强て職業の上に求めようとするかも知れない、併しながら之れもまた甚だ謂れのないことゝしなければならぬ、成程職業には種々雜多なものがあつて、其が中には、快とすべきものもあらうし、不快とすべきものもあるに違ひない、高尚なものがあれば、之れに對して低級なものもあるべき筈である、ところで人間の階級が、職業的に決定され得べきでないことは、今日に於ける原義でなくてはならない、高尚な職業を有つものが、果して善良な人間であるか、低級な職業を有つものが、果して不良な人間であるかといふことは、今更眞面目に解釋するにも及ばぬことであらう。

エタの文字が穢多であるといふところから、兎角直感的に、彼等自體をば、きたなきもの、厭はしきもの、忌むべきもの、嫌ふべきものとして受け入れるといふ事が、一般國民としての通弊であらねばならぬ、吾人の見るところを以てすれば、玆に謂ふところの穢多とは、讀んで字の如く、けがれおほしといふ意味合のものである、ところで此のけがれおほしといふことは、決して彼等自體を主として言つたものではなく、彼等の職業に屬して言はれたものであるのだ、之れを平たく言ふと、けがれの多い人間といふ意味ではなく、けがれの多い職業と解するのが妥當であるので、之れをモウ一層具體的に、けがれの多い職業に從事する人間と解しても差支へないのである、ところが然うした職業が毫も穢れたものではなく、寧ろ頗る立派なものであることは、今日の文化人が身に付けてゐる毛皮や靴や、そしてまた藝術上に於ける音樂の器具

や、宮廷に於ける高貴の方々が食する榮養肉類やなどを取扱つたものであることを思へば、直ちに夫れと首肯することが出來るであらう。

世を擧げてみな高尚な職業にのみ從事する人間ばかりであつたならば、實社會は不便此の上もないことであらねばならぬ、否實に不便であるばかりではなく、此の社會は、社會としての組織成分を缺いて、社會共のものゝ存立が不可能となるのである、ダカラ低級な職業に從事する所のものであつても、社會的には極めて重要な地位を有するもので、決して高尚な職業に從事するものに劣るべくもないのである。

一部國民が生物類に關しての職業は、全く此の意義の上に立脚さるゝものである、前にも屢屢言つた通りに、我國民の慣習として、兎角穢れといふことを忌んだものである、ダカラ譬へば獸屍のやうな、イヤなものでもあつた場合に、普通の人々は、殆ど極度に夫れ等に觸れることを避けようとするのであつた、此のやうな風であるから、其のイヤなものをば、始末し處分するなどゝいふことは、絶對に忌み嫌つたのである、言ふまでもなく其を穢れとし、忌み嫌ふといふことは、甚だ間違つた考へと言はねばならぬ、何となれば、勞働は神聖、彼の人のイヤがる人糞を取扱ふ農民が重要視されるではないか、そは兎に角、其の樣なものを、其のまゝに放擲して置くことは出來ないといふところから、こゝに夫れを專門的に取扱ふ人が出來ることになつたので、之れが則ち前に言つた、一部國民の原發的職業と稱せらるゝ所のものである。

如上の職業的分立が、終に一種族を生じたものとし、そして夫れが漸次に一つの階級に化して、終に一般人と隔絶した世界を造つたものとしたならば、彼等は全く感情の上に生れ、感情の上に育ち、そしてまた感情の上に扱はるゝものであるとせねばならぬ、一般の人が彼等を忌み嫌ふのは、彼等自體を忌み嫌ふのではなく、つまりは彼等の取扱ふもの其のものを忌み嫌ふのである、換言すれば、もの共のものを嫌ふところから、終に彼等自體をも嫌ふといふ結果を齎らしたもので、所謂坊主が憎けりや袈裟まで憎いといつた類に外ならぬのである。

此の樣な感情的差別を以てして、隨分長く彼等を逼塞せしめたといふことは、一般の國民に取つても、極めて不名譽の事としなければならぬ、況んや政府當局者や官憲が、此の感情的差別を根基として、更に差別的取扱法を加用したといふに至つては、眞に嗤ふべき極みである、穢多としての文字が、後醍醐天皇の御代の時の文書に始めて見えたとすれば、此のものゝ由來

も、可なりに古いものであつて、史家の言ふところによれば、約一千年の歴史を有するといふのである、然るに彼等は、其の永い長い歳月を經たる後、終に德川幕府の時に及んで、殆ど浮む瀬がないまでに、酷烈な壓迫が加へられたのである、德川氏が始めて覇府を江戸に開いた時、其が威信を維持せんがために、時に或は無用のものにまで、形式を恪守したといふことは、爭ふべからざる事實であるが、士心を攬るに腐心し、且つ生産民を偏重した結果、玆に極端なる階級制度を立てたといふことは、其が餘弊としての最も大なるものであつた、彼等一部國民が、德川氏の仁政を謳歌しようとする一面に於て、また其の苛酷を呪詛しようとしたのは、甚だ同情に値すべきものがなくてはならない。

併しながら吾人をして、玆に忌憚なく切言せしめたならば、彼等所謂一部國民なるものは、人間として一般から異なつたものはないのであるが、荏苒長日月を經過するに及んで、彼等は少なくとも部落的に、族性の漸化を餘儀なくされて居るものである、之れに就ては、故坪井正五郎氏も、白と云ひ、黄と云ひ、將た部落民といふも、生活の文野と、種々の境遇は、漸次に色々の人種と變化せしめたもので、本來人として別あるものではない、ト言つたのであつたが、實際其の通りに、人間も長い月日の環境次第で、本來の族性に變化が來すといふことは、決して否むことが出來ないのである。

此の關係からであらう、今日に於ては、所謂部落精神とも見らるべき或物が、確かに彼等の間に磅礴されつゝあるのである、言葉を換へて言へば、彼等の社會には、彼等の社會としての特別な氣風があるので、此の氣風は、如何にも根强きものであり、そして現在のまゝの形態にあつては、斷じて彼等から其を拔き取ることが出來ぬものである、ダカラ眞に彼等をして其の本然に復歸せしめようとするには、先づ如何にしても、此の部落的精神に改善を加へなくてはならぬのである、此の精神は、取りも直さず、第二精神とも稱すべきものであるから、適當の方法と、示導とを以てするならば、決して其を撓め直し得ぬといふものではない。

則ち部落民の改造は、可能なりや否やといふ問題に對して、前掲の理由からして、吾人は躊躇なく、然り可能なりと答へて憚らぬのである、そして夫れと同時に、吾人はまた所謂部落民の因襲的性狀を明らかにして、根本的に之れに適應する改善策を發見しなければならないのである。

彼等一部國民の通弊として、先づ第一に數へらるゝところは、一種の猜疑心を有することである、單に猜疑心といつては、或は語弊があるかも知れぬが、社會の全般からして、餘りに多くの壓迫と輕侮とを受けさせられて居るところから、彼等は知らず識らず一種の危惧を抱くやうになり、此の危惧心からして、所謂猜疑心を抱くやうになつたものと思はれる、故に今日の如く、比較的に一般が彼等を知解するやうになつてすらも、彼等は矢張り何等かの不安を抱いて、行動坐臥共が周圍をば疑はずには居られぬのである。

例するに彼等が、町々や村々を通行する場合などには、いつも此の猜疑の眼を以て、一般に對するのである、ダカラ一般の人が、何の意味もなしに思はず笑ふのを見ても、夫れは自分を嘲笑するのではないかと考へる、また何れかの篤志な人があつて、彼等の中の薄倖な人々に向つて、厚意的な援助でも與へようとするものがあれば、彼等は何か非常な侮辱でも與へられたのではなからうかと考へるやうなことがある、此のやうなことは、差したることでもないやうではあるが、事實は決して然うではなく、時としては此の様な猜疑心からして、思ひもよらぬ事態を惹起することもないとは限らないのであるから、之れは大に注意しなければならぬこと

と思ふのである、

彼等にあつては、また一種の引込み思案に捉はれるといふ通弊がある、則ち彼等が、部落を出で、他行する必要がある場合などにも、往々部落民として指笑されはせまいかと言つたやうな考へに囚はれて、外出を厭ふといふやうなものも尠なくないと言はれる、成程一面から言へば、謂れのない指笑を受けるといふことは、彼等に取つて最大の苦痛であるには相違ないが、夫れは要もなき引込み思案に外ならない、彼等が其の身分を恥ぢるといふことは、全く一般に對しての屈服を意味するものと言はなければならぬ、前にも繰返して言つた通りに、理論に於ても、實際に於ても、部落民たることを恥ぢとすべき理由は少しもない、否寧ろ今日にあつては、彼等は眞に獨立の生活者として、大に社會に濶歩すべきものであらねばならぬ、然るに部落民たることを以て、己れに恥づるといふのは、自分自己の人格を無視したもので、自ら我が胸を刺すものと齊しいものである、此の事に就ては、遠藤隆吉氏に一つの名論がある、ソハ外でもない、遠藤氏は熱心なる部落研究者であるが、何れの所に於ても部落民に對して、我れはエタであると立派に名乗りを揚げろと勸説するといふことである、此の點に於ては、吾人とし

てもまた同君と同感であつて、眞に誤まられた地位から解放され、其が本然の人格に立ち戻らうとする部落の人々であるならば、自ら我れは漁夫の子なりと豪語した日蓮の如くに、何うしても我れはエタであると叫ぶまでの勇氣を有たなければならない。

夫れから部落民にあつては、一種の部落民的性格が形ち造られて居るやうである、此れは彼等に取つて、頗る憂ふべきものであつて、此の性格――切言すれば部落的人種としての――が改善せらるゝことでなくては、部落の改造など、いふことは、到底企圖すべくもあらぬことであらう、此の人種改良といふことは、其が部落内の識者達にも唱道されて居るところのもので、目下に於ける急務に屬するのである、方今何れの方面にあつても、所謂優生問題が如實に唱道されつゝある場合、特殊部落に於ては、更に一層其が必要事であることを覺悟すべきである、此の如きは、決して區々たる感情の問題の比ではなく、充分に己れを虛しうして、如法如實に、而も最も眞面目に、具體的の研究と施設を要すべきは言ふまでもないことである。

部落に於て、敬神思想が菲薄であるといふことも、また其が缺陷の大なるものでなくてはならない、ト言つても、此の一事は決して彼等資性の上に、何等の劣惡をも意味するものではなく、其はたゞ從來の施設が、偶々以て此の結果を招來したものに外ならぬのである、前に言つた通りに、我國人は清く潔きことを以て第一義とするもので、就中神は不淨を極度に忌み嫌ひ給ふといふのが、拔くべからざる固有思想であるところから、屠生を以て其が職業とする彼等にあつては、神との接觸を不可なるものとして、夫れに對する奉仕をすら敢てせぬものであつた、此の樣な關係から彼等と神祇とは、形式的に沒交渉のものとなり、隨つて敬神の觀念も菲薄となつたもので、之れは彼等の狀況に於て、眞に餘儀なき次第とせねばならぬ。

其の代りに彼等部落の人々は、希望と慰安とを、佛教の上に於て求めて居た、殊に眞宗は彼等の歸向する的であつて、之れによつて未來世に大なる愉悅を得べく考想して居たことは、前にも述べた通りである、が之れ等も素より信仰の上から妨げないが、一方敬神の思想を涵養するといふ事は、皇祖崇敬上、必要であらねばならぬ、凡そ人間に於て必要なる條件は、氣品の保有といふ事であつて、氣品を保有せぬものは、奥ゆかしからぬものとせねばならぬ、ところで我國に於て、先づ氣品を涵養すべき目標を求むるならば、神事を以て其が第一とすべきものである、秩序あり、規律あり、威嚴あるといふ點は、神事の特有點とも稱すべきもので、人間は

之れによつて、隨分理想的な氣品を享受することが出來るのである、デ此の意義の下に、吾人は部落に神社を設け、每戸神棚をしつらへ、天照神宮や明治神宮の祝祭を普及せしめ、以て其が偉大の感化を彼等のすべてに及ぼさしめんことを慫慂するのである。

敢て全部が然うであるといふのではないが、彼等の多くは、どちらかといへば、一方には卑屈な心理を有して居て、一方には自尊心といふものを缺いて居るやうである、之れも同じく彼等の資性をして、ます〳〵無價値なものに化してしまふのであるから、之れにも多大の注意を拂ふべき必要があると思ふのである、前にも言つた通りに、彼等が殆んど無意味的に引込み思案的であるとか、如何なる場合にも己れ自身に恥づるとか、要もなき猜疑心を逞うするとか言つたやうなことは、要するに此の二つのものゝ過不及にあるもので、卑屈の心を去り、自尊の心を振作するに於ては、斯うした弊害は、忽ち一掃さるべきは言ふまでもないことである。

往昔にあつてはイザ知らず、今日の部落に於ては、遊民と風來人が、案外多數であることも、大なる注意を要すべきものでなくてはならぬ、一口に部落民といふと、至つてしがなき細民のやうに思はれるのであるが、事實彼等は、比較的に富裕な生計を持つて居るものが尠なくない、ダカラ年が年中懐手をして、のんべんぐらりに遊んで暮らすといふ人間も多いのである、然なきだに不景氣風の吹き荒んで居る今日、如何に特殊部落であるからといつて、決してお多分に洩るべき筈はないのであるから、此の樣な遊食の徒は、一日も早く其の跡を絶たすべきであらう、況んや水平運動などゝいふことも企圖されて、積極的に、そしてまた徹底的に、彼等自身の解放を求め、眞なる人格を獲得しようとする時に當つては、先づ勤儉産を治め、以て他に對する資力を充實すべきものである、また部落に漂浪しつゝある風來人なども、素より不生産的人間であると同時に、動もすれば部落内の風紀と平和を害する虞れがあるのであるから、是等もまた西の海へサラリ的に、部落内から一掃してしまはなければならない。

夫れから茲にまた結婚上の大問題が横たはつて居るのである、部落と結婚、一寸聞いたところでは、何も大した意義は持たぬやうであるが、事實は決して然うしたものではない、明白にいへば、此の結婚問題こそ、彼等の死活問題とも稱すべきものである。

既に部落と稱せらるゝほどであるから、其が限局的であることは言ふまでもない、殊に一般との交通が、如實に隔絶されて居るところから、結婚の一事は、彼等に取つて、極めて難澁な

る問題であることも、寧ろ當然であらねばならぬ、前にも言つた通りに、彼等は部落外との雜婚を禁じられて居た所から、勢ひ部落内に於て婚姻を取り結ばねばならぬのであつた、其の結果として、彼等の間には、多く近親結婚が餘儀なくされたので、之れが彼等の種族に對し、多大なる障害を與ふるものでなくてはならない、則ち之れを生物學上から、普通一般人の例に見るも、近親結婚の弊は大したもので、不具の兒や、白痴の兒や、低能の兒は、多く此等の配偶者間に出生さるゝことは、統計上爭ふことが出來ぬ事實である。

ソコデ一部國民の體質が、漸次に劣惡に赴くといはれることも、此の原由によらねばならぬ、また部落民としての一つの種族的傾向を有することも、此の近親結婚と、早婚との弊害によるものであることは、毫も爭ふ事が出來ぬ事實である、ダカラ之れを彼等のために計るに、可及的に部落内的近親結婚を回避し、已むを得ぬ場合にあつては、なるべく其の遠緣のものと結婚する事に努めねばならぬ、が之れを根本的に改正する手段を以て、出來得る限り、一般民との間に、雜婚を遂行すべきものである、前に言つた人種改造など、いふ事も、つまりは根柢を此所に有つものであつて、之れを今日のまゝに放任するとせば、部落は早晩體質的に滅亡しなくてはならぬであらう。

次に注意すべきことは、早婚と産兒制限といふ二つの問題である、此の二つのものは、前掲のものゝと同じく、何れも其が根柢を性の上に有するのであるから、事實に於て最も困難なる問題としなければならぬのである、が彼等の部落を理想にし、彼等をして如實の人格を保有せしむる上には、何うしても此の問題から解いて行かなくてはならぬのである、前にも屢々繰り返したやうに、彼等部落民は、一般との交通が絶たれてあるところから、何うしても其が慰安を部落内に於て求めなくてはならないのである、ところで彼等はまた、社會的に何等の娯樂をも有せぬのであるから、勢ひ性の上に突進するので、之れもまた彼等としては、餘儀ない狀況であると言はなければならぬ、其の結果として見るべきものは、早婚といふ事と、産兒の過剩といふことである。

早婚の弊は、近親結婚の弊にも劣らぬ弊害を釀成するもので、結婚當事者の體格を非弱ならしめたり、或は性的疾患を誘發せしめたりすることは言ふまでもなく、生兒にまで其が累を及ぼして、或は未熟兒を産し、或は白痴低能の兒を産し、或は兇惡性を有する兒や、種々な不具

的兒を産せしむること、恰も近親結婚に同じきものがある、是等は眞に慮るべきものであつて、此の一部國民に多く見るところの、或種の忌まはしき疾病なども、之れ等に因由さるゝことが多いのを見ては、愕然として怖れざるを得ないところであらう、此の様な弊風は、何を措いても先づ第一に芟除すべきものであらねばならぬ。

産兒過剰といふことは、之れも部落に取つての、最も重要なる問題であらねばならぬ、之れを戸口上の統計に見るも、其が關係は歴然たるもので、今日のまゝに押し進むとしたら、部落は其が内部からして崩壞される結果を見ねばならぬのである、明治四年八月、階級打破令の出でたる當時にあつては、此の一部國民の數は、三十八萬を以て算せられて居たのであつた、ところが其の數は年々に遞加されて、今や其が實數は尠なくとも優に、三百萬をも數へらるゝに至つたので、其が增加率の强大なることは、眞に驚歎すべきものがあるのだ、我國全體の日數に比し、約四分の一に居る彼等族民が、然かく驚くべき多産率を以て進み行くことは、やがて我國に於ける人口大增加の直因たるもので、之れを部落的に考へても、また國家的に考へても、決して輕々に附すべき問題ではないのである、世俗には多産を以て、此の上もなき慶事であるとし、子寶とか子福者とか言つて、無性に目出度がるのは、人情に於ては素より間然すべきではないが、社會的經濟的方面からしては、決して然かく祝福さるべきものではないのである、此の産兒制限に就いては、吾人は後章に於て、一般的に其が論評を試むる筈であるが、兎に角部落に於けるものとしては、之れを今日に策するといふ事は、最も急務であるとせねばならぬ。

果して然らば、部落にあつては、如何に之れに處すべきであらうか、前にも言つた通りに、素々斯ういふ問題は、其が深き根柢をば、性の上に有するのであるから、到底個的施設を以てしては、何等の効果をも收め得べきものではない、ダカラ之れを達成せしめようとするには、當然部落的の施設に俟つべきものである、則ち先づ第一に、性道德に關する知能を啓發せしむる事に努める、そして一方にあつては、部落内に於ける秩序を正しくし、風儀上の改善と規律とを勵行せしめ、子女の素行は嚴重に之れを監視して、努めて常道を履ましむるやうに掖導せねばならぬ、それから迭樂を回避し、飲酒と飽食を制限し、居常必ず一定した業務に從事せしむると言つたやうに、一に規範を以て其が放逸に備へるやうにすることが肝要である、そして夫れと同時に、部落内にのみ屈居する弊を釐め、性的衝動の機會を薄からしめるやうにしたな

らば、之れをして常的に復せしむることは、必ずしも難事ではないのである、併しながら此のやうな事は、何うしても自律と內省とに俟たなければならぬのであるから、部落民の中に於ける、識者とか先覺者とか、乃至は有力家といつたやうな人達が、自ら其が模範となつて、現實の上に全部を化して行くといふことが、最も大切であらねばならぬ。

夫れから生活上の改善といふことが、更に大なる必要條件であらねばならない、が此のやうなことは、言ふに易くして、行ふに難きものであるから、此の改善を策行するに方つては、先づ其が心性の上に、大なる努力的用意を築き立てねばならぬ、そして改善の要項は、單なる規定的のものでなく、尠なくとも理解的のものであつて、自發的に其が要約を決行すべく施設しなくてはならぬ。

生活の樣式と內容に至つては、素より種々雜多なものがあつて、到底一言にして之れを言ひ盡すことは出來ぬのである、が先づ大體に於ては、服裝、食事、家屋、禮儀、言語、動作などを以て、其の主要なるものとすべきであらう、則ち吾人は其が改善の一提案として、次に於て順次に之れ等のもの、解說を試みようとするのである。

服裝といふことは、社會に生息する人間に取つては、極めて大切なる意義を有して居るのである、之れを普通に解說すれば、寒暑に對する體溫の調節に資するのと、一定度にまで皮膚の被覆をなすことを以て、其の本義となすところであるが、之れを社會的から見ては、或る一定の形式を整へるといふことが、主たる要約となつて居るものである、ところで何でも、實用一點張りであつた昔とは違つて、尠なくとも文化に適應して行かうとする現代にあつては、服裝其のものに於ても、或る程度までは、整形的に利用さるゝものでなくてはならぬ、然るに多くの部落の人々は、今日にあつても、猶ほ其が舊態のまゝの服裝に安んじて居るものが尠なくないやうである、形容などは何方でもよいではないかといふ時代は、疾うの昔となつたのであるのに、斯うした古態に因循して居るといふことは、或る論法を以てすれば、之れも時代錯誤の一つであらねばならぬ、ト言つて吾人は、敢て分を超えての服裝をなせといふものではない、其の分を守るといふことは、何れの時何れの場合にあつても、素より必要なことであるに違ひないが、一見して部落民であることが分るやうな服裝は、斷然之れを廢止しなくてはならぬのである、部落民的の服裝を止めて、一般的な服裝をするといふことは、分を超えたもので

もなければ、奢侈に傾いたといふものでもない、事實に於て既に一般民衆であるところのものが、一般民衆の服裝をするといふことは、素より當然のことであらねばならぬ、ダカラ其の時其の場合に應じて、羽織袴を着ることもよろしい、洋服を着ることも差支へがない、一般民が着たり附けたりするものは、ドシ〳〵之れを利用するに不思議はないのである。

服裝といふことは、身の飾りであると同時に、また心の飾りともなるものである、奇麗サツパリとした衣服を着けた時には、同じく奇麗サツパリとした氣分になることは、何人と雖も承知して居る筈である、馬子にも衣裝髪容といつて、キチンとした好い衣服を着けたものは、何所となく上品らしくあり、利巧らしく見えるものである、則ち人は或る程度までは、其が心性すら左右さるゝもので、此の點から見ても、相當な服裝をするといふことは、最も必要とせねばならぬ。

夫れから食事のことであるが、之れは服裝などよりも、更に一層大なる必須事であるだけ、より多くの注意を拂はなくてはならない、由來彼等部落民は、肉食するといふことによつて、可なり强烈な不快感を一般民に抱かれて居たのであつたが、一般に肉食を重んずるといふ今日となつては、此の一事だけは、最早何等云爲すべきところはなからう、併しながら、同じく肉食をするといつても、彼等には一種惡食の習慣がある、則ち牛豚犬羊。其の何たるを問はず、手當り次第に、而も其部分の何れたるを顧慮することなく、殆ど無關心的に貪食すると言はれて居る、勿論之れとて一般民にあつても、或は藥用とし、或は特殊なる嗜好物として、蝮や蛇などの昆蟲類を食し、また現代文化生活にあこがるゝハイカラ人種などは、洋風料理用として、蚌や蝸牛や蛞蝓などを賞味し、また人によつては、犬や猫を平然として食するものもある、ダカラ部落民にあつても、種々な生物類を食するといふことが皆が皆まで惡いといふのでもないし、また夫れが殆んど全般といふのでもなからうが、其の多くが、斯うした傾向にあることは蓋し爭ふべからざるところである、ト言つて、今日に於ける食品研究者などが、由來一般から廢物視されたもの丶中に、却つて高價値の榮養成分が含まれて居るといふやうな意見の發表さへあるのであるから、彼等に其の食物の全部を改革せよと强うるものではないが、或程度までは、所謂其の惡食的習慣から脫すべきものであらうと思ふ。

前に部落民が、惡食をするといふことを言つたが、西洋などの文明諸國では、富があり高貴

の地位にあるものほど、一般の食物に飽き、且つ目新らしき流行を追ふ結果、惡食することを、寧ろ誇りとする傾向さへある、殊に紳士等は蛇の皮を以て裝飾せるステッキを持ち、貴婦人などは、同じく蛇の皮を以て造れる帽子を珍重して居る、シテ見れば、部落民などが、皮革類を業とする如きは、決して穢れたものとは言はれない、殊に生物の毛皮を身に纏ひ、また生物類を食するといふやうな、原始生活に近いことも、或は人類の自然生活から來たものであるかも知れない、ダカラ何も特別に部落民を嫌惡すべき理由は、毫も認められぬのである。

次には家屋であるが、之れも充分に改善すべきものがある、彼等の多くは、其が境遇的に、住居などの亂雜と不潔などには、一向に介意せぬ風がある、殊に其の業體の上からして、兎角不衛生な現況にあるので、是非もないところであるにしても、何事も文化の施設によつて、向上發展して行かうといふ現代の社會にあつては、何うしても部落住居の改善を徹底させなければならない、部落に入つて獸臭を感ずることは、漁村に入つて魚臭を感ずると同樣、何も不思議なことはないが、尠なくとも衛生的に處するといふことは、極めて必要のことであらねばならぬ。

部落に於ける住居が、宛も細民長屋の如く稠密して居るといふのも、風紀上からしても衛生上からしても、是非改めなければならぬと思ふ、流行的疾患であるとか、衝發的惡風儀であるとか言つたやうなことは、多くは此の細民的群居に特發するものであるから、部落の改善を圖るものにあつては、此等の點に向つて、充分なる考慮を要すべきである。

言葉は國の手形と言はれる通り、言語によつてよく其のお里が判じられるのである、そして單り其が生國鄕關ばかりでなく、時としては身分や職業までも判じられることがあるのは、誰れも周知のことであらう、ところで部落民にあつては、其の所々に應じて、必ず特定的な言葉を有して居る、ダカラ場合によつては、其が言葉つきによつて、容易に所謂部落民であることが知らるゝのである、何も部落民だからといつて、些の不都合もないのではあるが、彼等に於て、差別撤廢を以て刻下の要求とするならば、一聞して其が身分を知らるゝやうな言葉は、速かに改良すべきであらう、夫れでなくても、言語は人間としての意思發表であり、其が心性の發現さるゝところのものであるから、之れは何人に限らず、充分に注意すべき事柄である、南蠻缺舌などゝ言つて、言葉の野卑なのは、野蠻の特徴とさへされて居る、素より好言令色とい

ふことは、決して賞讃すべきことではないが、兎も角も一應の語格を有つといふことは、文明の社會に立つものに取つて、極めて必要な條件であらねばならぬ。

禮儀の重んずべきは、人間としての通有事である、人間の人間たる所以は、禮といふことがあるからで、之れを缺いては、人間たる定格を喪失したものである、ダカラ禮儀といふことは、自他關係を理想に保持する上に於て、また動もすれば放逸ならんとする人間性を節度する上に於て、必ず之れに遵由すべきものである、併しながら禮といふことにも、また實際的程度といふものがあるといふことを知解しなければならない、禮を執らんがために禮を執るといふのでは、決して眞の禮に處ることは出來ない、彼の繁文褥禮など、言はれるやうな禮儀は、禮儀のための禮儀で、人間のための禮儀ではないのである、ところで世人の多くは、禮儀を以て、一の修飾であるかの如く考へて居るやうであるが、夫れは大に間違つて居るのである、勿論修飾といふことも、言はれぬではないが、之れは見られた外形である、禮儀の眞作用は、各人の內在に働くもので、隨つて社會に於ける內在意思を表識する形式である、ダカラ人間は之れによつて、已れ自身の精神と肉體とを適法に自律して行くことが出來るし、社會は之れによつて、

關係的節度を確立することが出來るのである。

故に禮儀の重要であるべきは、言ふまでもないことであるが、サテ世の中の人々は、決して之れを如法に取扱つて居ないのである、辭令は文明の花など、言つて、近代人は禮儀を誇り物にして居るのであるが、之れは前に言つた禮儀のための禮儀で、眞なる禮儀ではない、シルクハットにフロックコート、白襟紋附に裾模様で、キッスの握手のと騷ぎ廻つて居るといふのは、文明の禮儀であるかは知らぬが、決して文化的禮儀とは稱する事が出來ない、鄉に入つては鄉に遵へ、里に入つては里に馴れよで、眞なるそして純なる禮儀は、眞實と誠意と純心の在るところによつて見られるのである、ダカラ都會には都會の禮儀があり、田舍には田舍の禮儀がある、則ち吾人は、將さに適法に開放され改善され向上さるべき部落に向つて、先づ其が施設の一として、適法な禮儀を有つべく慫慂するものである。

昔からよく言はるゝ言葉に、衣食足りて禮節を知るといふのがある、此の意を吟味して見ると、生活が第一義であり、禮儀などは第二であるといふことになる、勿論世の中の現實は其の通りで、人間が生活に忙殺されて居るやうな時には、禮儀などは疎そかになつてしまふのであ

る、が之れは取りも直さず普通の世情であつて、少なくとも理義を以て本旨とする社會に於ての眞相であるべきものではない、たとひ衣食に窮して居るやうな窘迫の場合にあつても、一定の禮儀を守るといふのでなくては、禮儀其のものゝ根義に生きるものではないのである、衣食に窮した場合には動物であり、衣食足つた場合には人間であるといふやうなことは、謂はゞ生活上の御都合主義であつて、決して社會人生の眞諦たるべきものではない。

衛生の事に至つては、部落に於て猶一層の改善進歩を期しなくてはならない、デ之れをして徹底せしめようとするには、衛生思想の皷吹を以て急務とするのである、而して其が方法としては、小學教育、各種補習教育、衛生講話、活動寫眞、各方面に於ける衛生的見學等が必要であるが、衛生書類の便讀をも圖らねばならない、デ此の場合には、其が根柢的教養として、德義上の思想を涵養させなくてはならない、若し公德といふことに缺くるところがあつたならば、自己衛生は兎に角として、公衆衛生などに對し、大なる支障を來すべきは勿論である。

部落と眼病（トラホーム）は附き物のやうに言はれて居る、成程實際に於て、トラホームは、部落に於ける特有とも稱すべきものである、此の原因の主なるものは、前にも言つた通りの、細民的群居から來るもので、猛勢なる直接傳染を逞うしつゝあるのである、デ之れをして減少せしむるには、何うしても衛生思想に俟たなくてはならない、元來傳染性疾病の豫防といふことは、自動的であらねばならぬのであるから、自ら夫れを爲すといふまでに、衛生思想が進歩しなければ駄目なものである。

部落の疾病で、更に寒心に禁へぬものが、決して尠なくないが、彼の連續的な血族結婚から釀成さるゝ特異病の如き、實に人生的の一大問題として、極力之れが絶滅を策すべきものである、斯くの如きは、實に人道的であり、社會的であると同時に、また國家的であらねばならぬ、若しも此等の大なる問題を閑却して、徒らに枝葉のものゝ改善をのみ事とするやうなことがあつては、啻に部落の改善を期し得ないばかりでなく、實に社會國家の大策を誤るものであつて、何人も愼重に之れが施設的研究に努めなくてはならぬところのものである。

風儀の改善は、何れの方面にあつても必要であつて、何も部落にのみ限つたことではないが、部落に於ける風儀の頽廢が、或る特殊な生活狀態から誘發さるゝのが多いのに見て、吾人は部落改善の上に、其が改良と矯正とを叫ばずには居られぬのである。

飲酒と淫蕩と賭博とが、下級なる世界の反映であることは、何人も周知の事實であるが、部落にあつては、此の弊風が殊更に烈しいと言はれる、ト言つて、素より皆が皆までといふ譯ではないが、比較的に多數の者が斯の如き狀況にある事は、蓋し爭ふ事は出來ぬのである、前にも屢々言つた通りに、彼等部落民は、其の境遇上、兎角一小天地にのみ蹈躇しつゝあるところから、其が娯樂と慰安とをば、此の三拍子によつて滿足させようとするのである、現在に何等取り留めた生活上の意義がなく、また之れと筋道の立つた希望などがないところから、一意に現實的な快樂に陶醉しようとするものである、ダカラ其の眞意の底には、多少自棄的の傾向を有して居るので、殆ど放縱的に快樂に向つて突進するのである、故に彼等は酒を飲むとしても、常に其が定量を超過する、性に於ても其通りで、只々眼前の肉慾に滿足を與へようとするのであるから、之れとても放恣度なしといふ有樣に流れることが多い、之れ等のことは、一般の社會にあつても、同樣な淺ましい狀態が露呈されて居るが、彼等部落民にあつては、其の生活が一定圈內に局在されてあるだけに、更に一層惡化を蘊釀するもので、其がためには、部落の風儀を紊り、經濟狀態を危うし、其の品性をして、倍々墮落せしむるに至るものである、且つ賭博の如きは、素より國禁に屬するもので、其が罪惡たるは言ふまでもない、而も彼等は部落なる特別の境地を利とし、其が暗き影に隱れて、此の罪惡を慣行するものであつて、其の結果、或は囹圄の人となり、或は不穩なる爭鬪を惹起し、或は怠惰の風を馴致し、或は產を破り家を滅すに至るもので、其の弊害の及ぶところ、眞に測るべからざるものがある、且つ賭博の常習あるものにあつては、平生眞面目なる職業や勞作に從事するを厭ひ、然なくとも袁彥場裏に時を浪費し、生產能力に多大なる損耗を招來するのであるから、之れを經濟上から見ても、決して等閑に附すべからざるものがある。

如上は一局部づゝの改善を述べたのであるが、百尺竿頭一歩を進めて、其を全體の上から觀察し、所謂部落民をして、大局に善處せしめようとするには、玆に一大鐵案を持して、根本的に之れが對策を講じなくてはならないのである、此事に就いては、今日まで多くの論議が重ねられて居たのである、が吾人の見るところでは、未だ眞に鐵案と目すべきものがないのである、が夫等の中で、やゝ注目するに足るべきは、彼等落部民の中の最も若き男女をして、早く其が部落から離れしむるといふ事である、併しながら、出來得るとしたならば、單に最も若き男女

ばかりでなく、部落民の何れをも、機會を利して部落を散出せしめ、以て隨處到所に一般民と雜居せしむるやうにしたならば、更に一層妙であらうと思ふのである、此のことに就きては、喜田貞吉氏も、雜居は部落撤廢の根本策であると言つて居るのである、また故金原明善氏は、部落民にして本然の人格に復らうとするならば、宜しく其が部落から離散して、其の職業を改むべきものであると言つて居るのである、素より之れには、多少の異論も挾めぬでもないが、吾人は先づ大體に於て、此の散出雜居說に左袒するものである、然はいへ彼等部落民にあつては、素より此の散出を以て、所謂離散的の意に解し、散出雜居を以て、宛も流離散亡であるとし、極めて不快なる感想を持つに相違ない、ダカラ彼等は依然部落を以て其が本據とし、眞向から聲を大にして、人間としての天賦の原義によつて、自ら解放され、自ら向上しようとし、一般民をして、如法に彼等に向つて歸同せしむべく試みつゝあるのである、此の心理たるや、また一面の道理を有つものであつて、決して意義のないものではない、しかしながら靜かに之れを考察して見ると、徒らに正面的聲明によつて爭ふといふよりも、寧ろ應變の方便によつて、的確なる効果を收むる方が、事實に於て、より以上の得策であらうと思ふのである、要するところのものは、手段ではなくて効果である、難き手段を捨てゝ、易き方法を執るといふことは、今日に於ける部落民に取つて、よりよき聰明なる態度であらねばならぬ。

けれども茲に一つ難關とさるゝところは、彼等部落民が、極めて强靱なる聚落性を有して居ることである、聚落性といふのは、彼等が、好んで所謂部落に集居する性狀で、今日にあつては、之れが殆ど第二の天性とまでなつてしまつたのである、斯うばかり言つては、普通一般にいふところの、鄉土愛着心のやうに思はれるのであるが、聚落性は決して然うではない、つまり彼等は、其の場所は何れの處であらうと、夫れには一向構はぬのであるが、たゞ彼等の同族と目せらるゝものが、必ず密集的に一圈內に群居することを欲するものである、前にも一寸述べた部落精神などいふことも、畢竟は此の特別な性狀から馴致されたものに外ならないのである。

ところで此の聚落性なるものは、事實に於て案外に鞏固なるものであつて、之れを打ち破るといふことは、中々困難であらうと思はれるのである、尋常の故鄉であつてさへ、故鄉忘じ難しとか、故鄉去り難しとか言はるゝのであるが、彼等としての部落が、或る特別な同族的集團

を意義する上に於て、彼等は眞底からして、之れが解散を欲せざるのみならず、之れより離れ去ることをも欲せぬものである、そして之れが殆ど先天的に固結されて居るのであるから、此の性を撓むるといふ事は、尋常にあつては、殆ど不可能と言はなければならぬ、デ此の樣な關係からすると、前に述べたところの、最も若き男女をば、まだ部落に於ける愛着心の起らぬ中に、散出雜居せしむることが、最も適當なる方法であらうと思ふのである、彼等の若き男女は、部落にあつても、別に生産上の幇助者とはなり得ぬのみか、却つて多大なる消費を意味するものであるから、之れを促して一般の社會へ散出せしむるといふことは、經濟的に見ても極めて有効なものでなくてはならぬ、斯くの如くして、彼等散出した男女は、或は技藝界に、或は實業界に、或は勞役界に、或は知識界に、夫れ〴〵の好むところによつて、其が身を立つることとしたならば、彼等は知らず識らずの間に、一般民と化してしまふに相違ない、現に彼等部落民と稱せらるゝものにして、一般民に純化し、異數なる成功を收めたるものも尠なくないのであるし、夫れでなくとも、普通市井の間に伍して、誰れも其が部落にあつたものであるといふことさへ知らぬものも多いのは、吾人が實例によつて、其の多くを知るものである。

特設の名による營造物――部落に對する――などを撤廢することも、今日に於ては極めて必要である、彼の部落や細民地に往々見るところの、特殊小學校など呼ばるゝものは、速かに之れを撤廢するか、或は根本的に特殊の意を含ませぬやうに工夫しなくてはならない、名稱などは何うでもいゝやうなものであるが、實際に當つて見ると、之れがまた重大な結果を招來することが尠なくないのであるから、漫然として之れを閑却することは、決して策の得たものではない。

之れを要するに、部落などゝいふ名稱さへも、彼等の上に加ふべきものではない、事實はたとひ立派な部落であつても、部落として稱呼することは宜いことではない、總て彼等に對する特別的な稱呼は、其の差別的待遇と共に、根柢的に一般民の胸から忘れしめねばならぬ、元來部落民なるものをして、此の社會に出現せしめたといふことも、また夫れをして如實に窮窟な境地に推移せしめたことも、彼等をして深刻な怨嗟を抱かしめたことも、一般民に於て、其が大半の責を負ふべきものである、ダカラ此の際に於て、所謂部落民の側にあつては、自ら努めて其が陋習を去り、よりよき革正の下に地位を回復すべきは言ふまでもなく、一方一般民の側

にあつては、充分に彼等に知解を持つと同時に、其が祖先以來、故なく彼等に與へたる抑壓に對して、多大なる遺憾を意識し、現在以後、全然彼等が特殊の民であつたことを遺忘し、以て如實に平等無差別の取扱に出でなければならぬのである、斯うして兩者の間に根本的の諒解が出來たならば、双方の間にあつた忌まはしき障壁や溝渠は、一頓にして撤去さるゝと同時に、今までは宛も氷炭的であり、水と油的であつたものが、釋然混融して、此の特異層をも見出すことが出來ぬやうになるのである、吾人は公平なる眼を以て、敢て之れを双者に勸奬すると同時に、同じく双者に向つて、彼の怖るべき誤解と反意を放擲すべきを勸告するものである。

殊に此の項の最後に於て一言すべきは、斯る事實によつて惹起されたる、所謂水平運動なるものに對し、世人は何所までも、冷靜なる態度を以て、愼重之れに對する覺悟を有すべきことである、對岸の火災視することも宜しくないが、風聲鶴唳的であるのも失當である、併し玆に大に注意すべきは、或一つの問題に對しては、單に一局部に於てのみの問題として輕々に看過することなく、遍く眼界を極めて、其が眞相を明かにし、斯くして其が進展すべき道途と、將來さるべき影響とを察知すべきものである、エタとユダ、必ずしも似通つたところがないと言へない、隣りの赤い火は、赤い火を招ばうとして盛んに燃えて居るではないか、苦惱を體驗せる者は苦惱せる者に同情する、殷の鑑遠からずと考へたならば、吾人は何事に對しても、透徹玲瓏の精査眼を用意せずには居られぬのであらう。

第三篇　道德的思想の誤謬

第二十一章　國民道德より觀たる思想中毒

社會の進運は、今や慥かに多大なる文化的成果を齎らしつゝある、が夫れと同時に、また一面に於て、より多くの害惡が釀成されつゝあることも、決して爭ふべからざる事實であらねばならぬ、殊に科學の進歩は、玆に著しき物質向上の偏倚を招き、精神的方面にあつては、漸次に頽廢的荆棒を生じようとする傾向が、時と共に著明となり、人々は只自利自得にのみ汲々として、世を擧げて、主我の巷に化せしめようとして居るのである、彼の道德地を掃うて空しなどいふ形容詞は、決して對岸にのみ使用さるべきではない。

人が人たる所以のものは、よく自らを律し得るところにある、人にして自らを律することがないならば、其の人は最早社會人としての價値を有せぬもので、謂はゞ只一個の人間たるに過ぎぬものである、併しながら人間が社會の一員として立つ以上、斯くの如き一個の人間では、到底其が社會的存在を確保することは出來ない、則ち何うしても社會人として、夫れに相等した意思と行動とを持するものでなくてはならない、之れが則ち道德の由つて生ずるところのものである。

そこで此の道德といふことは、如何なる意義を持つものであらうか、そしてまた社會的國家的に、何んな關係を有するものであらうか、今玆に之れが解明を試むることは、決して無用のことではないと思ふ、デ此の道德なるものには、東洋に於ける倫理學上からと、西洋に於ける倫理學上からとの、二つの解き方がある、則ち之れを東洋的に解說すると、道といふのは路であつて、萬人共に行くところのものである、德とは得であつて、行つて其の心身に體得することであるといふことになる、ところで西洋的にいふと、通例社會倫理として見らるゝところの道德は、社會現象の一つであり、全體精神の所產であると解釋されて居る、言葉を換へて言ふと、道德は事實である、そして其が事實は、社會關係を基礎として發現さるゝところの事實である、ダカラ社會的生活を營む生類の間には、必ず此の道德的事實が存せられて居るのであつ

て、之れを存せぬといふことは、斷じてないことであるとするものである、故に之れを約言すると、自他意思の整合を意味することになり、其が發現せらるゝものは、道德的價値意識の現れとして、やがて良心又は誠などゝ名づけらるゝところのものである。

ところで此の道德なるものは、固定的のものであるか、將たまた進歩的のものであるかといふに、之れが肯否の所說は、古來から紛々として居て、未だ猶ほ其の決定を見ぬところのものである、併しながら、道德なることが、善惡兩つながらの現象を指して言はるゝものであるとすれば、道德其のものは、必ず進歩すべきものでなくてはならない、何故であるかといへば、善惡兩つのものは、其が性質として、進歩すべきものであるからである、其が內容にして進歩する以上、其が全體がまた進歩すべきは、言を俟たざるところである、此の點からして見ると、道德は一貫した社會的原義と、あらゆる時期に出つて屈伸さるべき、究竟的適應性とを有するものと解すべきものである、則ち吾人が、其の一貫した原義を討ね、其が適應能性を檢覈して行くといふことは、決して徒勞に屬すべきものではないのである。

要するに道德とは、人と人との情意關係が、一定の規矩に依つて營まれて居るところの事實であるといふことになるが、此の道德をして、如法に且つ如實に、理想的な働きを有せしむるには、充分なる道德意識をして活動せしめなくてはならぬのである、道德意識といふのは、道德現象、則ち自他の行爲と品性、又は社會的人事に就て、其の正しきこと、邪まなること、善きこと、惡しきことをば知り、そして夫れをば感じ且つ意志するところの、普遍的な心的作用を指すものである、そして此の心的作用が、實踐的であり、情意的であつた場合には、良心と同じ意義に用ひらるゝところのものである。

ところで道德の完成には、必ず其を完成せしむべき要素がなくてはならぬ、言葉を換へて言へば、道德が完全に執行さるゝといふのには、其所に必要な土臺がなくてはならぬ、則ち此の土臺は德性と名づけらるゝものであつて、道德が事實として現前せらるゝには、必ず此の德性を有するものでなくてはならない。

德性なるものは、道德的活動をなし得る性質をいふものであるが、當然之れには二つの區別がある、則ち一つは天性によるもので、一つは修養によるものである、其が修養によるものは、取りも直さず習慣によつて得らるゝところの第二の天性である、そこで德性は、また品性と呼

ばるゝこともあるが、其の德性の器は所謂良心である、そこで此の德性を涵養する方法は、二三にして止まらぬのであるが、其が中に第一とせらるゝところは、善習慣の養成である、人間は此の善き習慣を養成することによつて、よく德性を享得することが出來、良心を含藏することも出來る、彼の德器を成就すといふのも、之れに外ならぬのである。

併しながら、たとひ德性は維持されて居ても、其を順用して、一つの道德的事實を現前せしめようとするには、何うしても一つの規矩に據らなければならない、若し斯る規矩といふものが存せぬのであつたら、吾人は何に依つて其が行爲の完成を期することが出來よう、規矩といふものがなければ、一定の目標とすべきものもなく、只々漫然として行爲することになるので、之れでは整然として彼此相互を規道の中に遵行せしむることは出來ないのである、則ち此の理由の上に定められたものが、取りも直さず道德律と名づけらるゝものである。

道德律といふのは、道德能性を適法に指示したものである、其が定義として認められて居るところは、道德律は、吾人の理想を實現する所以の行爲を示して、以て吾人を律すべき法則であるといふにある、其の定律の精神が、理想を實現する上に存するのであるから、其の所謂理想に適順して存するものであることは言ふまでもないことである、ところで此の定律は、個々に行はれ、全體に働くが故に、よく以て一般の關係を整調することが出來るのである、秩序といふことなども、此の定律から現前さるゝもので、社會的若しくは國家的行動も、一に此の定律を目標として營爲さるゝものでなくてはならない。

デ道德其のものゝ發動は、素より或る對象によつて其の形式を異にする、道德の根本義はたとひ一であつても、其の標的とするものゝ異なるによつて、其所に對象的區別が生ずるのである、則ち現在にあつては、所謂實踐道德を體別して五つとするのである、其一は個人道德、其二は家族道德、其三は社會道德、其四は國家道德、其五は人類道德が之れである、吾人が今此の章に於て述べようとするのは、此中の國家道德である。

國家道德といふのは、所謂國家的道德であつて、一般に國民道德と稱せらるゝところのものである、ところで此の國民道德なるものに就ては、今日のところ、まだ其の定義が一定されて居ないのである、が之れに對する說としては、大別的に四つのものが擧げらるゝのである、則ち其一は國家的道德說であり、其二は國內道德說であり、其三は特有道德說であり、其四は國

民實踐道德說である、先づ今日では、此の四つのものを基準として、之れによつて、所謂國民道德なるものを解釋すべく試みられて居るのである。

そこで第一の國家的道德說は、國民道德其のものは、畢竟國家に對する道德であるといふ說である、則ち此の解釋によるときは、取りも直さず、國民道德を以て、實踐道德の一部門と見るべきものである、玆に言ふ實踐道德とは、國民必行の道德であると見做さるゝもので、之れにもまた五つの分類が擧げられる、此の分類は前に記した通りであるが、其の第五の人類道德をば、或はまた宇宙的道德とも唱へるのである、デ此の中の國家的道德をば、國民道德と稱するのであるから、此の說によれば、國民道德の外に、更に多くの道德が、所謂實踐道德として存在することになるのである。

第二の國內道德說にあつては、國民道德其のものは、元來が國內にのみ行はるゝことを以て原則とする道德であるとし、隨つて道德其のものには、此のもの、外に、猶更に國際道德といふものが存在されてあるといふ說である、ダカラ道德といふもの、中から、國際道德といふものを除き去つたところのものが、取りも直さず國民道德であると解くものである。

第三の特有道德說は、元來國民道德なるものは、國民に特有なるところの道德であると說くもので、其が解釋によると、元來道德といふものは、言ふまでもなく、人類に共通のものである、けれども其の境遇の異なるに隨つて、實行上の手段方法に相違を生じて來るのである、之れは何故であるかといふに、若し其が境遇に適應した手段や方法に依るといふことが無いのであつたならば、道德といふもの、實行が、到底爲し得るものでないからである、則ち國民としての境遇によつて現前された、或る特有の道德をば、所謂國民道德と稱するのであると解釋するものである。

次には第四の國民實踐道德說であるが、之れは、國民道德とは、國民の守るべき道德であるとの說である、此の說によつて解釋さるゝところによれば、國民の行爲の規矩たり模範たるべき道德は、盡く國民道德の中に包含されるものである、ダカラ國民の守るべき道德の全部が、取りも直さず國民道德に外ならないのである、個人道德といふものも、人道と唱へらるゝものも、みな國民道德の概念の中に入るのである、凡そ國民共れ自體としては、啻に國家に對する道德のみに限らず、個人道德であれ、人道であれ、盡く之れを守らなければならぬものである、

ダカラ此の意味に於ての國民道德は、個人道德や人道と對立するものではなくて、全く國民的見地から構成されたところの、實踐道德の全部の稱となさるべきものであるといふのが、此の說の主眼とするところである。

如上の四說によつて、略ぼ國民道德の內容が窺知されるのであるが、之れは國民道德の一般的解說であつて、當然何れの國民に對しても共通さるべきものである、ところで吾人は、其が實際的見地からして、國民道德と我が國民道德との二つを意識しなければならないのである、言葉を換へるならば、我が國の國民道德は、別に「我が國民道德」として取扱はなければならぬのである。

則ち單に「國民道德」と言はれるところのものは、其が性質に於ては、普遍的であり、其が內容に於ては、抽象的である、更に言へば國家組織をなして生活するところの人類の道德が之れである、則ち日本であるとか、佛蘭西であるとか言つたやうな、具象國家に關係しない、抽象名詞として意得さるべきものである、果して然らば「我が國民道德」とは如何なるものであるか、言ふまでもなく、之れは日本と稱する、特殊なる國家の、國民道德を指すものである、同じく國民道德ではあるが、我が國に於ては、大に其所に特色が見られるのであつて、此の特色のある國民道德が、所謂「我が國民道德」である、併しながら吾々日本の國民にあつては、此の「我が國民道德」といふことをば、單に國民道德と呼稱するのが通例である、夫れは丁度、日本歷史や日本語を指して、吾々が單に國史といひ、國語といふのが慣例となつて居ると同じことなのである。

則ち吾人は、普遍的であるところの國民道德の觀念から一歩を進めて、其所に所謂「我が國民道德」なるものを認めなくてはならない、然るに世の多くの人々、殊に動もすれば總てに於て、謂れもなく輪廓を取り去らうとする人々は、單なる國民道德を以て、何等の識別もなしに、我が國民道德を律して行かうとするのである、斯くの如きは、疑ひもなく、其が內容成分に於ける、特殊な有効成分を除去して、以て或る特殊なものに加ふるもので、一面からいふと、眞に憫笑に堪へぬものがある、此等は畢竟するに、事物に對する區別性を缺いたもので、偏見もまた甚しと言はなければならないのである。

事實今日に於て、我が國民道德が、往々にして或種の缺陷を感ずるといふのは、此種の事柄

が、不知不識の中に、其が累をなしつゝあるは疑ふべからざるところである、普遍的な共通的國民道德を拉し來たつて、之れを我が特殊な國柄に立つ國民の上に施さうとするのは、さながら酒を好むものに、一碗の水を與へ、病めるものに、一抹の饂飩粉を與ふるが如きもので、其の愚や到底及ぶべからずである。

國民が國家の最大要素であることは、言ふまでもないところであるが、所謂其が國民は、國民としての實質の上に於て、相互的生活なる一大責任を有するものである、共存は人類の一大要約であると同時に、また社會といひ國家といふものに對する要約であらねばならぬ、そこで此の要約を達成し確保するには、則ち其所に道德が存在されねばならぬ、デ此の道德が、取りも直さず國民道德であつて、國家としての秩序ある活動的生命は、一に此のものゝ保障によつて維持せらるゝところのものである。

實踐道德の五つの分類の中に、個人道德なるものと、家族道德なるものとがあることは、前に述べた通りであるが、之れは個人を對象としたものと、家族を對象としたものとであつて、此等は古來からして、可なりに多く論議されて居るのである、個人道德は、個人と個人との關係的整調であり、家族道德は、一家と一家との關係的整調であつて、つまりは社會的道德の單位が、個人的道德であり、國家的道德の單位が、家族的道德であると言へるのである、個人道德としては、先づ自身をして道德的たらしむることを主要とするもので、之れを以て他の個人との整調を維持するのを目的とする、自身をして道德的たらしむるには、其所に道念なるものがなくてはならない、道念といふのは、原語にイデーといふもので、之れに三義があるが、茲に言ふところのものは、其が第一義であるところの、眞知の對象を意味するものである、此の道念なるものにも、種々な解說や種別があるが、中にもよく世人に周知されつゝあるのは、ヘルバルトの五道念であらう、之れは言ふまでもなく、ヨハン・フリードリヒ・ヘルバルトによつて提唱されたもので、品性の根元である意志を律するものである、ヘルバルトは、美の中最も重要であるものは、意志の關係に存するところの、よしとするものを現在に有するところの美、卽ち道德的美であると考へたのであつた、そこで彼れは、意志の美を判斷するところの理念、又は標型概念として、所謂五つの道念なるものを撰び出したのである、卽ち一には內的自由、二には完全、三には好意、四には法、五には公正又は應報といふのが之れであるが、普通

には分り易いやうに、自由、完成、好意、正義、衡平と言はれて居る、デ吾々が表象されたる、若くは現實に起りたる意志の、道德的の價値又は無價を判斷することは、必ず此の道念の何れかに據るものであるといふのである。

國民道德といふものが、普通の場合には、普遍的意義を有つといふことは、前に述べたところであるが、併しながら巨細に之れを檢覈すると、所謂普遍的に解せられるものにあつても、時としては多少の特異と見らるゝ色彩が見られるのであるから、現代の世界にあつては、眞に普遍的な、特有色彩を帶びない國民道德はないと言つても差支へがないのである、今之れを例するならば、彼のホツプス以來の功利說が、英國の國民道德とも稱すべきところの、少なくとも特有的な色彩を帶びて居ることなどが之れである、またカントやフィヒテの義務論や、ヘーゲル派に於ける、國家中心的道德論が、獨逸の國民的道德としての特色を表明して居るといふことは、蓋し爭ふことの出來ぬものでなくてはならぬ、ところで此の樣な特有的色彩を帶ぶるといふことは、各々の國に、各々の素地があるからである、日本には日本の素地があり、支那には支那の素地がある、素地といふのは、其の本來の色であつて、之れこそ他に對して特有のものであらねばならぬ、忠義を第一とするのは日本の素地であるが、支那にあつては、孝悌を以て第一とするので、其の素地は孝悌であると言ふべきものである、此等は特に其の社會的生活組織及び其の歷史に現はるゝところの、最も有力なる道德の自然的素地としての國民的性質である、ダカラ總ての現實の道德は、如何なるものであつても、悉く國民的特色を帶びた道德であることは事實であらねばならぬ、道德の道德たる普遍的本質は、此等の特殊な現實的道德に卽して存するのであつて、普遍的道德が、此の以外に超然として存在して居るべきものではない、ダカラ道德哲學、則ち倫理學上に於けるものに關しては、深く此の特有性色彩といふことに注意し、果して此の特殊性を脫し居るや否やに、多大の注意を拂ふべき必要があるのである。

デ之れを我國に於ける、今日の國民道德に觀るに、所謂其の國民道德が、著しき浮動狀態にあることは、眞に慨歎に堪へぬものである、要するに此の如き現象は、國民性の消長に、大なる關係を有すべきは言ふまでもないことで、一面から言ふと、其が國民道德を通して、其所に現代的世相が現前さるゝものである、ダカラ或る一方には、所謂普遍的な國民道德に立眼して、

我が特殊な國柄であることを閑却するものもあり、また一方には、不精選な因襲的道德に捉はれて、時世の運行といふことに氣の附かぬといふ時代後れのものもある、此の過不及な點が、やがて國民道德としての統一を破壞し去るもので、種々なる浮動的思想と相須つて、倍々道德の根柢を動かすものであらねばならぬ。

國民道德の寮圍氣内に活動するところの國民に、最も重要なる意義を有つものは、共同的責任觀であらねばならぬ、則ち吾々は國民の一員として、玆に或る適法な道德行爲者とならなければならない、そこで適當な道德行爲者となるには、他者との關係に於て、如法の整調を維持することを要する、而して共が整調をば、全然理性的ならしむるに當つて、最も必要なるところのものは、共同的な責任を負荷し、共所に理性の遂行を完了せしめようとする、大なる決心に立つを要する、此の共同的責任觀にして、彼此相互の間に存在され得る以上、社會なり國家なりは、よく共が秩序の上に働き得ると同時に、所謂人間としての能性も、遺憾なく發揮さるべきものである、然るに萬一にも此の責任觀なるものを缺いたとしたならば、彼此相互に背馳の狀況を呈出して、あらゆる紛爭は玆に釀成さるゝものでなければならぬ。

今の世の國民道德が、動もすれば共が眞義を湮沒せられようとして居るのは、全く此の國民的共同責任といふ觀念が、相互の間に菲薄となつて居るからである、此の風潮は國家の上に取つて、極めて憂ふべきことであらねばならぬ、殊に我國にあつては、近來著しく此の觀を呈し、何れの方面にあつても、責任を輕々に看過する傾向があるのは、眞に國家の不祥事であらねばならぬ、彼の政治家が共の責任を忘れて、敢て不信を國民に沾ひ、官憲が職責を輕んじて、以て瞻職の誹りを招き、教育家宗教家が、共の責任を土芥視して、非道不倫を敢てする如き、みな此の道德的責任を閑却遺忘したものであつて、一種の論法を以てするときは、全く國民的背任の罪名を負ふべき、一種の犯罪者たるべきものである。

日本が日本たる所以のものは、日本としての特色を有するからである、故に若し日本からして、共が特色たるものを取り去つて了つては、最早日本と稱することが出來ないのである、隨つて日本に於ける國民道德からして、共の日本的な、或る特有な色彩が除去されるとしたら、最早夫れは所謂我が國の國民道德ではないのである、吾人は之れに就て、前にも一寸述べた通りに、現代の日本人は、兎角日本の國民たる特有點が銷磨されつゝあるやうに見える、そして

漸次に、普遍的な國民性に近づくのではなからうかとさへ想像されぬでもない、斯の如き不祥の事は、素より吾人の想像のみに止ることを希ふのであるが、萬が一にも、此の想像にして事實であらしめたならば、夫れこそ國家の一大事ではあるまいか、結果は頓成するものではない、其が成るには、必ず漸長の氣運を有するものである、霜を履んで堅氷至るの言は、よく此等を言明したものであつて、吾人は如何なる場合にあつても、事物の消長を閑却してはならない、殊に禍害の成るや、其が漸長の間に於ては、往々眞美的光彩を放つものであるから、苟くも眞に社會を看、國家を觀んと欲するものは、此等に對して、多大の注意と用意とを忘れてはならぬ。

第二十二章　國際道德より觀たる思想中毒

個人と個人、一家と一家との道德關係に繫縛せられつゝある人間社會は、また其を統一しつつあるところの國家と、他の同樣なる國家との間に於ける國家との、相對的道德網の中に、二重なる道德的統一を受くべく餘儀なくされて居るのである。

此の國家と國家との相對的道德は、所謂インターナショナルモーラルであつて、通例國際道德と譯されて居るところのものである、ところで此の國際道德と言はれるやうな道德が、果して國家と國家との間に成立され得るものであらうかといふことは、之れまで可なりに論議せられたところであつて、今日に於ても、まだ的確な結論を見ぬのである、一體道德其のものゝ實現には、必ず德性を有すべきものなることは、吾人が前章に於て述べた通りである、ところで此の德性なるものが、國家夫れ自體に於て、如實に具備せらるべき可能性を有するや否や、之れ頗る考慮を費すべき問題であらねばならぬ。

ホツブスの學派にあつては、道德を國家の作爲と見るものである、此の見解に從ふときは、約束の法と、そして其の法を遂行するところの權力をば缺く國際的生活には、利害の交渉はあつても、道德なるものは無いとせねばならぬ、何が故であるかといへば、利害と道德とは、素より如法的に一致すべきものではない、之れを個人と個人との間に見ても、利害はよく道德を蹂躪する、利害のあるところに道德なしとは、實際的事相を表明したものであつて、利害と道

德は決して兩立さるべき性質のものではないのである。

プラトンの學派は、道德の成立をば、國家に於てのみ認むるものであるが、此の見解によつて見ても、國際的道德なるものは成立し難いのである、併しながら一面に於て、プラトンは、不滅の理性を以て、道德の原理であると認めて居るところを見ると、啻に人類全體のみに限らず、一切理性者に通ずるところの道德が存立さるべき可能性が認知せらるゝのである、此の關係によつて見ると、決して道德其のものゝ存在が、根柢的に否定さるゝのではなく、たゞ其が實現に必要なる條件が缺けて居ると解すべきものである、ダカラ之れに適切な條件を附與し、其をして道德的に可能なる性狀を有せしめたならば、國際道德なるものも、其所に一つの實力的要約として現前さるべきである。

果して然らば、如何なる樣式のものを以て、國際道德と稱すべきものであらうか、吾人の考ふるところを以てすれば、統一原理に合致された道德を以て、正しき國際道德と稱すべきものである、更に一層之れを詳言すれば、夫れ〴〵の國家に統一されつゝある國民が、更にまた國際的に統一せらるべきときに於て、其が統一の力其のものをば、國際的道德と稱すべきもので

ある、之れ取りも直さず、人類としての有機的生活をば、更に一層大なる有機的生活に統一して、其所に所謂國際關係網が張られた場合に、其が國際道德も、漸次に實現せられねばならぬところのものである。

如上は所謂國際道德なるものについての理論であるが、サテ今日に於て、果して此の理論通りな國際道德が存せられて居るであらうか、インターナショナルなる語は、今や全宇宙の大關係網として、世界の隅々にまで張り及ぼされてゐる、或は政治に、或は交渉に、或は藝術に、或は競技に、或は其他の總てに、國際なる語は、廣汎なる冠詞として例用せられてゐるのである、隨つて相互に國民を有するところの國と國とが、其の國際關係の上に、雜多な事相を現前されつゝあるは、當然であらねばならぬ。

道德なる語の立場から言へば、其が發現の事實は、如法に理性であらねばならぬ、然るに今日に於ける、國と國との關係は何うであらう、或者は正義を標識とし、或者は人道を看板にし、そしてまた或者は誠實を旗印として居るのであるが、夫れ等の國々が、果して正義的であり、人道的であり、誠實的であるであらうか、吾人は先づ眉に唾して、此等の國々に就き、看一看

せねばならぬ。

いくら正義であつても、夫れが一個の銅像たるに止るのであつては、一文半錢の値打もない、右の手には劍を執り、左の手には飴を持つて、ニコ〳〵顏で摺り寄つて來る奴には、素より碌なものは無いのである、舌ッたるい辭令を弄して、心の中で嘲笑して居るやうな外交政治家が生きて居る中は、國際道德などが役に立つものではない、曰く軍縮、曰く差別撤廢、曰く博愛、曰く平和、曰く何、曰く何と、吾人は可なりに多くの國際的提議なるものを耳にしたのであるが、何か其の中の一つでも、如法如實に完行されたものがあるであらうか、吾人は常に、其の聲の大にして、而も其の實の小なるに驚かざるを得ぬものである、否往々にして、其の聲はあつても、全く其の實が無いのに呆然たるところのものである、此の樣な事で、何うして國際道德などの實現が望まれるであらう。

非軍國主義でも、トロツキーが起つべき時が來ないとも限らぬ、非權謀主義でも、マキアベリーが必要とされる時もある、海に戰鬪艦を減じても、必要があれば、ドシドシ航空艦を製造する、平和地帶だの、軍備制限地だの、共同管理地域だの、委任統治地だのといふものを設けて置きながら、海軍の根據地や、陸軍の駐屯地に血道を上げて居る國もあるのだ、一體此の樣な現象をば、何と見たら宜いであらう。

米國が最初に我國民を喚び起したのは、米國の國際道德であつたと言はれて居る、這般の我國の大震災に對して、米國が卒先して多大なる救濟を遂行したのも、同じく米國としての國際道德の現れだと言はれて居るのである、成程世運の進展といふことを箴言として、我國民をして、長夜の夢から醒めしめたことや、大なる慘害の時に當つて、應急的な救濟を齎らしたことは、確かに感謝すべき事實であり、賞讃すべき彼國の國際道德であるに相違ない、併しながら此の殊勝らしき外交振り、換言すれば彼等としての國際道德的行爲なるものが、果して彼等の眞心から爲されたものであらうか、そしてまた眞に夫れが彼國としての、僞らぬ國際道德の發露であつたであらうか、之れは大に考へなければならぬところであらうと思ふ。

米國が排日策に腐心して居るといふことは、隨分古くからの事實であつた、彼れは如何にも、して日本人を遠ざけようとして、樣々に苦心したことは、久しき間の國交記錄によつて明らかなる事實であらねばならぬ、が其が圓熟して、遂に國是としての成法に制定されたのは、今次

の排日案問題であつた、吾人は前に於て、右手に劍を執り、左手に飴を持つと言つたのは、實に彼れ米國の行き方であらねばならぬ。

外交の術が、マキアベリズムを以て優れりとする世界にあつては、米國の排日策、否寧ろ對日本策なるものは、素より然かあらねばならぬ筈のものである、浦賀に來て、我が朝寢の宿の戸を叩き破つたといふことも、日清日露の兩戰役に、順慶流を極め込んだことも、今次の大震災に、博愛同情の涙を揮つたといふことも、つまりは一場の演伎に過ぎぬものであつた、彼等は得んと欲せば先づ與へよといふ格言を執行する上に、餘りに怜悧なものであつた、此等の行爲は、彼れとしては實に外交上の慣手段とせねばならぬ、ダカラ單に日本にのみ加ふるばかりでなく、支那にも之れを加ふるのであつた、斯くして彼れは、或る何物かの最後の獲物を覘つて居るものである、之れは吾々日本國民たるものゝ、大に注意すべきところである。

米國は富を以て、宇内の第一に居ると稱せられる、勿論事實に於て、然うであるかも知れぬ、ところで彼れは、口にデモクラシーの大道を說きながら、事實に於て、ブルジョア的我儘を振り廻はさうとするものである、何事かあると、彼れは直ちに金に物を言はせる、長屋の事件に大屋が飛び出して來たやうに、片端から金權でイタメつける、それで居てグーの音が出せないといふのは、所謂プロの悲哀といふものである、今次の排日案は、言ふまでもなく、人道と正義を無視したものであつて、世界の何れの國々でも、決して米國の行爲を正當だとは思つて居ぬであらう、がブルとプロとであつては、何うしても角力が取れないところに、皮肉な苦笑が禁じ得ぬではないか。

米國に於て、所謂排日法案が通過されてから、我國民の遺憾的な表情は、一時其の極に達したのであつた、之れがためには、謂はゆる無名國士の腹切りもあり、一部の人々による非買運動のやうなものもあり、中には隨分激越な示威運動をして、世人の耳目を驚かしたものもあつた、要するに之れ等は、みな一時の感情的衝動運動と見るべきもので、襟度ある國民としては、深く云爲すべきものではないのである、併しながら翻へつて、其が事實の由つて來るところを考へるならば、其所に一つの大なる教案が横たへられなくてはならぬのである、教案とは何か、取りも直さず、吾々日本國民が、事實によつて與へられたる一の教訓其のものである。

米國を以て、どこまでも如實に正義の國であり、そしてまた人道の國であると信じ過ぎたと

いふことは、確かに我れにあつての不明であらねばならぬ、家と家との附合のやうに、國と國とにも附合がある、そして其の所謂附合なるものが、或る場合に世辭や追從やが主なる辭令となつて居る事に氣附かなかつた所から、斯うした馬鹿を見る羽目に立たされるのである、米國を本據として居た我國の基督教界の者すら、口を揃へて米國の假面的文明を謳つて居るのに見ても、其の全班が知らるゝではないか、軍縮を唱へる米國が、軍事的國民總動員を行ふとは。

其の樣な心理狀態にある米國の人々にあつては、其が氣儘的な振舞は、素より恠しむに足らぬところである、彼等は利と害とを知ることに於て、實に天下一品である、そして夫れと同時に、利益のためには、如何なる横車を押し通すといふことも、また天下一品であるのだ、謂はば成り上りの惡摺れのした殿樣的態度は、彼れの十八番とも稱すべきものであらう。

外の電車がいくらはち切れさうに滿員であつても、其樣なことには頓着なしに、自分の乘つて居る電車だけを、空明きの樂々したものにして置かうといふのが、彼等の流儀である、成程自己の權利といふことを楯にして、眞向から論じたならば、自分の國の問題は、何所までも自分の國の問題で、外國勞働者の入國を拒否することについて、何等外國の容喙を許さぬといふことも、立派な主張であるに相違ない、併しながら吾人をして之れを言はしむれば、其の主張はたとひ如何に立派であるにしろ、夫れは實に權利――言葉を換へて言へば國家の主權――を以て唯一の武器とした抗言であつて、夫れには何等の正義の響きも、人道の影も見得られぬのである、之れが則ち利害のためには、正義をも人道をも無視し蹂躙すると言ふ所以である。

が吾人は、如何なる場合にあつても、公平な立場に立脚するものである、彼れ米國の僞善的虛僞的政策を擯斥すると同時に、一面に於て、我國民の缺陷をも痛擊せずには居られぬのである、一たび米國に足を投じて其が實狀を見るに、吾人は所謂正義人道の國なるものゝ正體に驚くと共に、彼の地にある我が同胞の有樣にも驚かされるのである、歐羅巴にある邦人などは、教養あり品格あるものとして目されて居るに反し、米國にあるものは、何うも評判がよくないのである、蓋し之れには原因があることで、歐洲などにあるものは、內地にあつても、一廉の人格者として立つものであるが、米國にあるものゝ多くは、所謂勞働階級のものであるから、其が品性に於て劣れるのは止むを得ぬことである、而も鄕に入つて鄕に從はず、彼等と全く同化し難い所にも缺點を有する、然うした關係から、在米の邦人が、一般的に彼等から嫌惡され

るのであるから、吾々としても、深く此の點に內省すべき必要がある、己れを省みずして、漫然として他をのみ責むるといふことは、決して賢明の態度ではない。

吾人の見るところを以てすれば、國威の消長は、當然國民の能性に比例するものでなければならない、國民に威信の要素を缺いて、共の國家に威信があらう筈がなく、威信を缺いた國家にして、外侮を受けぬ例しはないのである、故に今次に於ける米國の排日策の如きも、切言すれば、我れに對する、頂門の一針たるべきものである、此の時此の際、吾々日本國民は、深く己れに省み、進んで大國民たるの資格と襟度を示し、一意國運の隆昌を期して、彼等をして、今日の擧を悔いしむる底の策を執らなければならぬのである、徒らに惡聲を放つて彼れを罵しつたり、非買運動やデモンストレーションに一時の快擧を夢みる如き事では、取りも直さず、暴に報ゆるに暴を以てするもので、結局兩者をして、深怨の谷底に墮在せしむる外、何等得るところがないのである、さあれ沈默の威力を思へ、そしてまた不言の實行を念とせよ、要するところは、實力の問題であつて、決して外形的に解決さるべきものではない。

臭いものは身知らずといふ、我が同胞が米國に於て排斥されたといつて憤る一面に於て、我れまた同じやうな仕方で、支那の人民を憤らせて居るではないか、お互ひに芥の捨てつこをして、詰まらぬ繩張り爭ひをするといふことは、何う考へても大人氣のないことであらねばならぬ、が此の芥の捨てつこといふことも、國際的には重大なる意義を有するもので、近き將來に於ける全世界の一大禍亂は、必ずや此の芥捨て問題によつて生起さるべきものである、玆に於てか吾人は、また冷靜に、人口問題を考慮しなければならぬのである。

我國の人口が、今日に於ける增加率を維持する以上、此の種の問題は到底回避することは出來ない、果して然りとせば、吾人は今に於て、之れが對策を講究すべきもので、徒らに他人の家の門戸を私議すべき秋ではないのである、土地開拓策、人口調節策、屬領地殖民策、住民配分策、產業增進策、優生種問題等、何れ一として緊要でないものはない、此等の對策が決定せられざる限り、國際紛議は、何時までも未知數として殘留されねばならぬ。

之れを要するに、現代の各國家は、前にも言つたやうに、ホッブス派の所謂約束の法及其法を遂行する權力を缺きたる、單なる利害的交渉のみによつて立つもので、國際道德の根本的發現などは、到底望み得べきものではない、ダカラ完全なる國家を樹立し、約束の法及其法を遂

行する實質的權力を養ひ得て、而して國際道德の漸現を策すべきである、若し此の根本策に出でぬのであつたら、百の辭令も、千の成文も、何等効果があるべきものではない、そして所謂現存されつゝある國際道德なるものは、單に國家と國家との外面を粉飾するに過ぎぬことゝなるのである、併しながら玆に注意しなければならぬのは、所謂國家の實力的權力なるものは、決して武備的軍事的軍國的でないことを要約とするといふことである、言葉を換へて言へば、將來に於ける國家の實力は、何所までも經濟的のものであり文化的のものであらねばならぬ。

第二十三章　政治道德より觀たる思想中毒

政治といふことは、其の本質に於て、既に道德の表現たるべきものである、果して然らば、政治道德などいふ名詞は、極めて不可解なものであらねばならぬ、が夫れは單なる本義的正論であつて、實際にあつては、道德を政治の上に高唱しなければならぬほど、政治其のものゝ根柢はグラツカされて居るのである。

神の權力が政治の權力となり、政治の權力が經濟の權力となつたといふことは、吾人が第一篇の初頭に於て述べた通りであるが、さあれ今日に於ては、政治は猶且政治として、大なる權力の下に、統一樞機として儼存されつゝあるのである、ところで現在に於ての政治が、如何なる性狀のもとに、そしてまた如何なる資質のもとに、其が活動が營爲されて居るのであらうか、吾々國民たるものは、先づ此の點に注視しなければならぬ。

デ吾人は、之れが注視の目標として、所謂改治的道德なるものを假定する必要があるのだ、そして之れから出發して、あらゆる政治的事相を見比べて行くことにせねばならぬのである、ところで玆に吾人をして、先づ思はしむるところのものは、今の政治界に、果して道德なるものがあるか何うかといふことである、併しながら道德なる作爲的事實が、善的方面にも存し、惡的方面にも存するものである以上、政治界に道德なしと極める譯には行かない、一言にして之れを云へば、开が善であれ惡であるに論なく、一應は之れを道德問題として、其所に忌憚なき吟味を遂ぐべきであらう。

現代國民の通弊としての責任閑却は、容赦もなく政治界にまでも及ぼされて居ることは、何

人と雖も拒否されぬことであらう、ところで一般的な責任閑却は、或は漫然として責任を知解せぬか、或は單に之れを遺忘したといふやうなことも尠なくないが、比較的高級な政治界にあつては、往々作爲的故意的に、責任回避が公行されて居るのである、殊に所謂政治家なるものに至つては、權謀術數を以て、其が本義と心得て居るところから、好んで責任回避を以て一時を偷安するものである、信を國民に失つても、猶ほ且つ晏如として其が地位に止ることなどは、彼等にあつては、尋常茶飯事に過ぎぬのであるが、此等とても、大ぴらに且つ公然と、其が責任の回避を行つて居るものである、また已れの一身が、濟世治民の重責を有するにも拘はらず、其が一身上や、或は其の身が屬する或る何者かの都合のためには、世を損し民を害しても厭はぬといふ手合が尠なくないのである、之れなども公然たる責任回避者であつて、立派な政治道德の叛逆者であらねばならぬ。

二枚舌三枚舌と言ふやうな、忌まはしい言葉は、過去に於ても、可なりに多く聞くところであつたが、今日の政治家、殊に直接政局に立つ人々にあつては、此種の言動は、寧ろ當然事とされて居るやうである、憲政の擁護を叫び、官紀の振肅を高調し、國本の充實を聲明しながら、

其の一面に於て、自己の地位をのみ擁護し、自黨の利益のみに熱中し、所謂人氣取りの政策にのみ汲々として、國家の大策を二三にするのは、畢竟政治道德の圏外に妄動するものでなくてはならない、世人は加藤護憲内閣の出現を謳歌し、之れを以て國家の慶福であると思惟したが、今日に於ての形勢は何うであるか、其の叫びと高調と聲明とは、果して如何なる結果を齎らしたであらう、加藤首相は、曾て漸を以て其の緒を收めると言つたが、然りとては氣の長い事である、而も其の時になつて、待ち呆けを食ふ樣な事であつては、國民こそい、面の皮ではないか、面の皮といへば、國民の面の皮と、金佛の面の皮とでは、其の厚さに於て、問題にならない。

財政計畫に於て、必要なる緊縮を策するといふことは、理論に於て素より非議すべきところではない、が其の所謂緊縮の一端の現れとしての奢侈品關稅問題は何んなものであらう、素より奢侈品——則ち贅澤品と目されるもの丶關稅引上げは、一寸聞いたところでは、至極道理にも聞えるのである、が吾人が不思議に感するところは、所謂贅澤品なるものが、然かく多種多量に輸入さる丶ものであるかといふことである、之れを實際的に調査したところによると、所謂眞に贅澤品と稱すべきものは、輸入品としての、九牛の一毛に過ぎぬといふ事である、而も

政府の期するところは、之れに依つて、輸入を抑制し、正貨を維持し、爲替を調節するにあると言ふに至つては、理論を以て實際を誤るの陋を嗤はずには居られぬのである。

然るに或る一部の論者は、之れを以て、奢侈の惡風を抑制し、堅實の美風を助長せしむる旨意に出でたるものであると說くのであるが、此れまた一噱にだも値せぬものである、何となれば、吾人は政府に斯る誠意ありや否やを疑ふからである、見よ政府は、一方に於て奢侈に斧鉞を下すと同時に、一方に於て賭博的債券の發行を畫したではないか、言ふまでもなく政府は、之れによつて、射倖的に蝟集する巨額の資金を吸收しようとするものであつて、之れ明かに不德の政策であらねばならぬ、一面には美風を勸奬し、一面には惡風を慫慂す、之れをしも矛盾ならずとせば、世に何の矛盾かあらんやだ、之れを以てしても、政治の大局に立つものでありながら、都合のためには、其の意思を二三にするものであることが分るであらう。

其は姑く措き、奢侈品關稅引上げに就て、其の所謂奢侈品として揭げられつゝあるものを見るに、吾人をして轉た怪訝に堪へざらしむるものがある、其が二三を擧ぐれば、彼の香料藥品の如きが、何故に奢侈的のものであるか、指定されたる香料藥品の如きは、石鹼や齒磨粉の原料となるもので、決して奢侈品ではない筈である、然るに之れを以て贅澤品であると斷ずるからには、政府者は、齒磨粉や石鹼を使用することを以て、一種の贅澤であると解して居るのであらう、之れでは手もなく、國民の衞生といふことを無視したもので、沒義道千萬と言はねばならぬ、また運動具の如きも、同じく奢侈品として指定されて居るのであるが、之れとても奢侈としての性質は認められぬのである、夫れも內國に相當の品があつて、たゞ舶來品たる故を以ての買入れであるならば、或は贅澤品といふ意義も附せらるゝかも知れぬが、實際現在の內國品では、到底其が代用たる價値がないのである以上、之れが輸入も亦餘儀なき事とせねばならぬ、然るに單に奢侈抑制の上にのみ立脚して、之れが輸入に高壓を加へようとするのは、國民體育の上に、大なる阻碍を與ふるものでなくてはならぬ、然は言へ、貴金屬や寶玉類の如きは、誰が目に見ても、贅澤品たるは言ふまでもない事であるから、之れが關稅引上げは、何等非議すべきところはない、けれども此等の品物は、由來富者階級の需用品であるから、たとひ數割の稅率が引上げられ、夫れに連れて、價格が如何に暴騰しようとも、そんなことに辟易するものではない、元來贅澤といふのは、他に比儔が少ないものを獲て、夫れを以て他に誇らう

とするのであるから、其が滿足を得るためには、價格などは素より問ふところでない、現に今日の狀況は何うか、其の所謂贅澤品の中で、以前よりも却つて輸入が增加されて居るものがあるではないか、價格が高くなつたので、小大概なものは買ふことが出來ないとなると、直ぐ一方には、其の高價なものをヒケラカして、大にブル振りを發揮しようとするものが簇出するのである、之れでも當局者は、よく奢侈の惡風を矯め得たと考へて居るのであらうか、また此の如き事を以て、眞に我國の通貨を、經濟的に維持し得ると考へて居るのであらうか、吾人は先づ政府者の心事が、模稜であり、說夢的であるといふことに、一驚を喫せずには居られぬのである。

口善惡なき京童は、之れを以て、政府が多大なる關稅の收入を目的とするものであると取沙汰して居るのである、亦は甚しき憶測のやうであるが、實際の成績からして見て、政府者に何等答辯の餘地はないであらうと思ふのである、が之れは姑く措くとしても、政府者の遣り方は、所謂大題小言であらねばならぬ、其の志や嘉し、其の愚や及ぶべからずとは、支那流に往々言はるゝところであるが、吾人は此の言を以て、よく政府當局者の爲すところを言明したものとして、多大の興味を有つものである。

理論と實際とが、多くの場合に、提灯と釣鐘的比例の差異を生ずるものであることは、吾人が呶々を俟たずして、何人も周知する所でなくてはならぬ、政府者が區々たる贅澤品の關稅引上げを斷行して、滔々たる奢侈の風を抑制しようと企圖することは、丁度これに類したものでなくてはならぬ、輸入贅澤品に、十割百割の稅を課したからといつても、金のある奴原には、何等の痛痒も感じさせることが出來ぬのである、否寧ろ彼等富有者は、斯る贅澤品の獨占を以て、より以上の誇りとなし、より以上の快樂として、彼等の贅澤は、更に一層其の程度を高くするに相違ない、彼等ブル黨なる者は、自己が雇傭する職工の、些少な賃銀の値上げに對しては、容赦もなき澁ッ面を以て、斷々乎として之れを排拒し去るのであるが、而も其の一夕の遊蕩に對しては、惜氣もなく千金を投じて洒々乎たる者である、此の樣な輩に對して、關稅引上げの効果が、何うして見得らるゝであらう、燒石に水か、蛙の面に水か、將たまた向ふ水か。

奢侈の抑制が、今の政府者の主張であるならば、儉勤といふことも、同時に其の主張であらねばならぬ、政府者の理想とする主張が、果して玆にあるとするならば、ナゼ徹底的に其が主

張の周行を企圖せぬのであるか、彼等は往々にして米價調節なることを試みる、而も其の結果は如何、其が買上米による米價の釣り上げは、最も多數なる小作農をば、塗炭の窮地に陷し入るゝ反面に、小數なる地主農に多大なる增收を與へて、其をして贅澤に流れしむるものではないか、また奢侈を以て眞に憂ふべきことであるとするならば、政府當路に立つところの大官巨僚が、先づ其の範を一般に示すべきものではないか、其の身先づ分限者としての贅に居て、而も一般國民に儉勤を强ふるといふのは、確かに矛盾であらねばならぬ。

贅澤品を抑制する手があるならば、先づ富豪からして征伐する必要があらう、彼等は其の有する富と、脫稅其他による不期の餘裕とを以て、實價十圓の眞珠一個を、百圓二百圓にても購ひ得るものである、一回の常食に數圓の金を費して、而も尙ほ足らずとする人間共をば、政府者は何と見るであらう、墨王ルイ十六世は、國民の飢ゆるを見て、彼等は何故にパンを食はざるやと問ふたとか、贅に居て贅を知らぬ徒輩の多い今日、國民の必需品を高價ならしめて、たとひ無意識にもせよ、巨額なる關稅をせしめて、靦然たるに至つては、吾人は眞に其が眞意の那邊に存するかを疑はずには居られぬのである。

世の中には、己れに寬にして、他に酷なるものが尠なくない、自分は山海の珍味に舌鼓を打ちながら、他には數片の香の物で飯を喰はせるといふ類が之れである、而も其の言ふところを聞くに、儉素なれ、質實なれ、剛健なれといふのである、こんな虫のいゝ注文をば、旨く問屋で卸して呉れるであらうか、官人や富豪は贅澤御免で、一般人民は儉約質素に縛られる、太ッチと痩せッポチは斯うして出來るのである、差別は何うしても世の中の眞理であるらしい。

米價調節といふことについて、吾人は一寸述べたのであつたが、猶ほ玆に一言すべきことがある、夫れは政府當路者が、此等の施設に關して、著しく缺陷した思想を有して居ることである、缺陷した思想とは何であるか、夫れは彼等が、米價が高ければ高いほど、農村は歡喜するのである、そしてまた同時に繁昌するものであると考へることである、が前にも言つた通りに、此の樣な米價釣り上げは、確かに地主偏重に外ならぬものであるといふことなどは、一向に思ひ浮ぶところがないやうに見える、米穀のやうな、國民必須の常食品に對する政策すら、斯の如く偏頗不公平であるとしては、吾人は飽くまで其が措置を認容することが出來ない、一體政府者流は、ホンの眼前の狀況にのみ捕捉されて、眞なる根本的具體策を閑却したものである。

果して然らば、如何なるものが、其の具體策であるかといふに、夫れには素より種々なものがあるが、先づ其が對策の第一問題たるべきものは、米價其のものに就ての、調節原義に思ひを致し、斯くして其が基準に就て規定するといふ事である、外米關係に於ても同様であつて、何等の基準を持たぬ米價調節や外米處分は、恰も的なしに鐵砲を放すもので、啻に何等の効果を奏しないばかりでなく、却つて米穀政策をば、根柢から擾亂せしむるものでなくてはならない、何れにしても、其が施設方法には、徹底的な成案を求むべきであつて、徒らに一時を糊塗するが如き政府者の遣り方は、決して看過すべきものではないのである。

政府當路の大官は、動もすれば官紀の振肅を言ひ、能力の增進を說くのである、が所謂官紀の振肅や、能力の增進が、其の說くところの如く現前されたであらうか、之れまた吾人として、疑ひを挾まずには居られぬところである、今の政治家は、理論に巧みにして、實際に拙なるものであらねばならぬ、テーブルの上の空談義や、ペンを舞はしての御座なり文句には、一般をしてアツと驚嘆せしむるほどの妙腕は持つて居ても、イザ鎌倉といふ實際に臨んでは、案山子ほどの實力をすら持たぬのが少なくない、此様な有様では、現代の政界も、案外心細いものと言はなければならない。

殊に政黨政治家などには、斯うした矛盾が多くに見られるのであつて、最早今日となつては、政治家の道德などは、殆ど云爲する餘塵をだに有せぬと言つて宜しい、然ういふと所謂政治家達、眞額から湯氣を立てゝ憤るかも知れないが、事實であれば之れも仕方がないではないか、民は倚らしむべし、知らしむべからずなどゝ、古流に澄まし込んで居たところで、今時の人民は夫れで往生するものではない、倚らしむるには、知らしめなくてはならない、盲目滅法に彌陀を念ずるやうな、其様な古手の國民は、モウ日本には居ない筈である、ヤレ機密であるの、樞議であるの、政策であるのといつて、無暗に空威張りをしたところで、夫れが何になるか、實力のない國は亡ぶのである、實力のない政治は滅してしまふ、そして實力のない政治家は、いつか溝壑に顚じてしまふ時が來る。

誰れか議院政治を以て、美なること華の如しといふや、誰れか議員や大臣を以て、精英珠玉の如しといふや、姑く去つて、彼等の行動に見よ、そして其が心事を洞察せよ、思ひ蓋し半ばに過ぐるものあらんだ。

世人は、帝國議會に於ける、議員の駄問を知つて居るであらう、そしてまた夫れに對する、國務大臣や政府委員の、途徹もない愚答を聞いたであらう、彼等議員なるものは、一種の賣名のために、殊更質問と出掛けるのである、ダカラ何時でも、何等の根柢を有つたことがない、此の護謨的質問に對する政府側當局者は、チヤンと議員の腹の底を見透かして居るのであるから、極めて巧みに开が質問の核心を捕捉せしめず、また何等の要領をも得させることなしに、其の場限りに、ウマク切り拔けることを以て、唯一の能事として居るのである、此の間に何等の道德作用を認むることが出來ないので、之れ全く双者に眞面目を缺き、而も一點誠意なるものが存して居ないことに因由するものでなくてはならぬ。

さあれ吾人は、夫れをも姑く目を閉ぢて忍ぶべしとするも、其が幕間に於ける、彼等の餘興は如何、野卑低劣な彌次でなければ、獰猛野獸の如き叩き合ひや蹴合ひが演出されるのである、まことや日比谷の動物園、罵るもの、喚くもの、笑ふもの、嘲るもの、飛ぶもの、跳るもの、あらゆる狂態を以て終始するのが、議會の實況ではないか、斯くして彼等は、自分自身を侮ると共に、明かに議院の神聖を汚辱するものであらねばならぬ。

之れでは、議會政治否認の聲の起るのも、決して偶然ではないのである、吾人は主義として、政黨政治を認め、組閣の基礎を政黨に置くべきことを理想とするものであるが、國民の利福を本位とするよりも、政黨の利益を本位とする、所謂政略黨略本位の政治を事とする政黨政治には與みせぬのである、口に民本を唱へて、實は自己の政黨の黨勢擴張を念とするが如き、現代の政黨政治は、國民の生活幸福のために、極力之れを排斥するのである、吾人をして尙ほ進んで極言せしむるならば、眞の民本政治を行ふもの、古への仁德天皇や、聖德太子のやうなものであれば、それがよしや專制政治であつてもよいと言ふやうな結果になりはしないか、自己の生命を拋つても、國家のため、國民のために盡すといふ、一點の私心をも有せぬ俊傑の出現をば、吾人は心の奥底からして、眞に仰望しつゝあるのである。

或る議員が、偶々議院能力をクサしたからと言つて、飛んだ物議を釀したことは、まだ新たなる事實として、世人の腦裏に印されて居るであらう、其が全般の論旨は姑く措き、議院能力の非弱といふ點に於ては、吾人は甚深なる共鳴を禁じ得ないのである、我國の政界に於て、最も能率の悪い政治機關は、實に我が帝國議會であるといひ、言論は空虛であり、黨爭は一つも、

政策としての根本的相違點から出づるものでないと叫び、現今政治家の論ずるところ、其の國家的見地から遠くして、眼光の豆よりも小なるを嗤はざるを得ずと喝破したところに、匕首直ちに他の肺肝を刺す底の慨があつたのである、而も獅子身中の虫は、終に一個の好漢をば、罵聲怒語の裏に葬り去つたのであつた、處が此の好漢、選擧に後ろ暗い所があるから皮肉だ。

政治の道德、政治家の道德、議會の道德、議員の道德、吾人は一般の國民と共に、より多くの道德を瞻望するものであるが、遺憾ながら現代にあつては、其が中の一つをだに求め得ぬのである、一體現時の既成政黨なるものは、如實に政權爭奪に血道を上げて居るものである、而も其が政權爭奪なるものは、國民に對して、何等政策を問ふことなしに、他のあらゆる權謀術數を以てして、敢て其が爭奪を事とするものである、此の一事に見ても、彼等の重んずるところは、利にあつて德でないことが知らるゝのである、吾人は前に述べた通りに、政黨內閣を要望し、議會政治を維持すると同時に、特權內閣を非とし、官僚政治を非とするものであるが、其の政黨內閣と、議會政治とが、然かく大なる缺陷を有するを見ては、一般國民と共に、見事に其の期待を裏切られたるものとして、呆然自失せざるを得ぬところである。

故原敬氏の黨政擴張論と、現首相たる加藤高明氏の寄附金受納說とは、確かに大政治家としての、排德的大襟度を表明したものであらねばならぬ、黨勢を擴張するといふのが何うして惡いかとは原君の論で、寄附金はいつでも頂戴するとは加藤君の言であつたとか傳へらるゝのである、黨勢が何んな工合に擴張せらるゝのであつたか、寄附金が如何なる動機によつて奉納されたのであつたか、此の內容的樣式を拔きにして、單に擴張と寄附の外形をのみ云爲するのであつては、偶々以て其が盲目滅法を押し通すものではなからうか、若し玆に一人あつて、選擧運動が惡いと言つたならば、彼等は必ず、選擧運動か何んで惡いと逆擊するに相違ない、選擧運動を惡いといふのは、其の裏面に種々樣々の不德があり、違法があり、からくりがあるからである、遵理であり、正實であり、潔白なものであるならば、何人とても選擧運動が惡いなどと言ふべき筈がないのである、黨勢の擴張や、寄附金の受納の如きも之れと同じく、其を非とするところのものは、其の外面ではなくて內面である、表面は立派でも、惡い內面を有つ黨勢の擴張や寄附金の受納が惡いのであるといふことであるが、之れを知りつゝ言つたとすれば、橫道な橫紙破りであるし、知らずに言つたとすれば、低能的盲目であつて、其の何れにしても、

不德たることは爭ふことが出來なからう、而も其の言明が、二人の巨頭によつて爲されたゞけに、可なり大きな弊害を後進に貽すものであらねばならぬ。

吾人の此の言を疑ふものは、一たび去つて地方の狀勢につき、仔細に之れを觀察して見るがよい、或地方に不要な鐵道が布かれたこと、或地方に立派な橋が架けられたこと、港灣の改築や、國有林の拂下げなど、之れみな黨勢擴張の跡でなくて何であらう、中には其の地方の利益のために、節を他黨に賣つたといふ名望家もあるのだ、之れでも黨勢の擴張に惡い所は無いのであらうか、吾人は往々にして、名前さへも聞えぬ地方の物持の老爺が、議員の肩書でオヅオヅ帝都に引張り出されて來るのを見て、心窃に其が醉興に驚かされるのであるが、其の實を聞いて見ると、醉興でも何でもない、彼等は全く黨利の犧牲となつて、已むを得ず引張り出されるものである、外政とは何であるかさへ知らず、豫算とは何ういふものであるかさへ解せぬ彼等であるが、地方のためといふ甘言に乘せられて、ツイうか〳〵と擔ぎ出されるのである、然うして握らされるところのものは何であるか、所謂お土產建議案が夫れで、斯くして黨勢はチクチクと擴張されて行くといふものだ。

政友會から一旦脫黨した本黨々員と、舊政友會黨員とが、あやめ會と、さつき會の二つの會を起して、兩々復緣しようとしたことは、吾人が前に、一寸述べて置いたところであるが、之れについては其の當時、さすが厚顏者流の兩黨幹部連も、世間の手前たまり兼ねて、彼れ此れと制肘したところから、彼等も一時其が運動を中止するの止むべからざるに立ち至つたのであつた、ところが、まだ幾程もないのに、再び此の腐れ緣復活の運動が持ち上つた、則ちあやめさつきの二會をば、打つて一丸となして、天聲會といふものを組織し、兩者屢々往來して、合同機運釀成の策に努めてゐたことがある、之れが所謂陣笠や末派などなら、まだ多少恕すべき點もないではないが、終に幹部連中までが、之れを是認しようとするに至つては、言語道斷といはねばならぬ、一方に護憲三派として手を握り合ひながら、一方に反對黨と提携しようと試みるなどは、まるで賣笑婦の遣り口ではないか、此の樣なことでは、政治家の道德などゝいふことは、迚も求め得らるべきものではない、吾人は之れ等を思ふときに、今時の政界に對して、愛憎もコソも盡き果つる感がなくてはならぬ、ソコデ一度眼を轉じて、之れを憲政會の行動に見たら何うであらう、之れにも中々云爲すべき矛盾行動が尠なくない、彼の護憲三派なるもの

は、言ふまでもなく、貴族院研究會を主腦とする、特權政治に對抗し、之れを打破することを以て主義として成立したものである、處で何うであらう、現內閣、則ち加藤金佛首相は、副大臣格なる政務官を設くるに當つて、其がお鉢をば、貴族院側而も當の敵たる研究會に持ち込み、美事に肘鐵砲を喰はされたのであつた、無恥か厚顏か、實に沙汰の限りといふべしである、夫から新政黨組織計畫にしろ、提灯は幾ら張り替へても矢張り提灯で、アーク燈の光りは發しない。

官吏の能率が擧がらないといふ事も、隨分久しい間の事實であるが、實際今時の官吏ほど、職能的責任が缺けて居るものはなからう、デ當局者は、遲がに國民の手前默つて見ても居られぬのか、時々思ひ出したやうに、チョイ〳〵官紀振肅などで小細工を試みるやうであるが、之れとても通り一遍なものであつて、一向利目らしいものが見えぬのである、夫れは中には、出仕退廳の時間などを八釜しく言つて、時としては脅かし的態度で之れを改めさせようとするものもあるやうだが、矢張り文字通りの空文空令に過ぎぬのは何うしたものであらう。

ト言ふのは、何事も官僚的遣り口であるところから、兎角時代的には行かぬものと見えるのである、そして一つも徹底的な、根本的な改革策を講ぜぬのであるから、如何に振肅の鼓吹を遲くしても、通り一遍ですぐ立ち消えとなつてしまふのである、此樣なことで、何うして根本的な改造や振肅が出來るであらう、ところで加藤首相は、其が組閣當時の聲明の手前とあつて、所謂官吏の能率增進事項なるものを訓諭したのである、則ち其が訓諭の事項は、大體に於て、十一項として示されたものである、試みに之れを左に揭げることにする。

一、執務の方法は、上より下へ移し、主として局長又は課長等、高等官自ら執務するの方針を採ること(局長中心主義)

二、官吏は、執務に當りて、常に改善の工夫を凝らし、煩瑣を除き、簡易に就かしむること(處務簡捷主義)

三、執務に當りて、努めて、機械の應用を圖ること(處務機械化主義)

四、處務に當りては、速かに裁斷し、裁斷したるものは、卽時決行し、以て事務の停滯を除くこと(速斷卽行主義)

五、努めて、形式に拘泥するを排斥し、專ら實質に就き裁斷すること(實質尊重主義)

六、常に執務に興趣を感ぜしめ、疲勞除去の方法を講ずること(興趣亢進主義)

七、部局の長は、絶えず、部下の能否を注視し、適材を適所に配置すること（適材適所主義）
八、適材を、永く同一地位に置くこと（適材重用主義）
九、官吏は、恪勤精勵たるべきこと（恪勤精勵主義）
十、官吏は、健康保持に注意すること（健康尊重主義）
十一、官吏は、虚禮を排し、質實の風に就くこと（質實剛健主義）

何と盛澤山のものではないか、之れで其の實が行はれるとしたならば、結構此の上なしであらねばならぬ、デ前掲のものを通覽するに、其が第一項の中の、高等官自ら執務するといふのは、高等官に取つて、青天の霹靂であらねばならぬ、由來仕事は部下がして呉れるものとのみ思つて、大椅子にフン反り返つて居た人々としては、實に由々しき大事が持ち上つたに相違ない、こゝらが慥かに官紀振肅の利目であらうが、大官連がよく之れに遵由して行くか否かは、頗る注目に値するものである、夫れから第三項の、處務機械化といふのは、何だか一種の皮肉感が禁じ得ない、人間としての全力がまだ盡されて居ないのに、より進んで機械化を試みようとするのは、之れも一つの現代傾向であらねばならぬ、能率增進は勞役者の上ばかりではないであらう、ところで第九項の、恪勤精勵主義といふに至つては、マザ〳〵しく官吏者流の不恪勤不精勵をサラケ出したものに外ならない、人間たれと言はるゝ程の人間こそ不敏至極だが、なまけるな、はたらけと言はれる官吏者流こそ、不用意千萬なものでなくてならぬのである、之れでは所謂官吏なるものゝ値打も、スツカリ下落したものに相違ないのであると斷ずべきだ。

が何でもよい、之れだけでも眞面目に行へたら、夫れこそ近來の見附けものである、誰れだい？　便所で煙草を吹かし乍ら油を賣つてるのは――イヤ我國民は、此の條々が活きて働くことを希望して止まない、が理窟は到底理窟であり、實行といふことに難い今の政府者に、何所までも之れが遂行を期する大決心があるか何うか、首相は漸を以て其が成果を收むるのが抱負であるといふから、我々國民は、少くとも心永く、而も刮目して其を監視すべきものであらう。

第二十四章　官憲道德より觀たる思想中毒

或人が言ふには、官憲に對して道德を言ふといふことは、我々の世界にあつて、最も至難な

事に屬すると、正直なる吾人は、由來其の意味を解することが出來なかつた、が近來所謂官憲なるもの、實際を見得るに至つて、漸く此の話を解し得ることが出來たのである。

官憲が民衆的であるとか、官僚的であるとかいふやうなことは、吾人が常に耳にするところである、併し吾人をして言はしむるならば、官憲其の者は、其が性質として、當然官僚的——職務に熱心で責任の觀念が強く眞摯な淸廉な公明な心事を有する點——であるべきは言ふまでもない、而も其の官僚的である事が、何所までの分量であるかに、論議の餘地は存せらるゝものである、官憲にして全く官僚味を去つたならば、夫れは氣の脫けた芥子であらねばならぬ、ト言つて餘りに官僚味が多過ぎても、宛も味噌の味噌臭きが如く、鼻持ちのなつたものではない。

官憲が官憲としての事務を執行するには、當然官僚的であらねばならぬ、官憲の仕事は、民衆の仕事とは異なるもので、之れを混淆するといふことは、理論に於ても、實際に於ても、決して許さるべきものではない、ところで官憲に於ける道德が、今日如何なる狀態に於て發現されて居るであらうか、モウ一歩進んで、所謂官憲道德と名づくべきものが、果して彼等の上に存在されて居るものであらうか、之れが先づ第一の問題であらねばならぬ。

併し玆に斷はつて置くべきことは、官憲道德といつても、夫れは何も官憲同士の關係にのみ限局されたものではない、如實に言へば、官憲と官憲との關係的道德であると共に、官憲と民衆とに於ける關係的道德たるべきものである、斯うして考へたところでは、所謂官憲道德なるものは、勿論立派に存在されねばならぬものである。

實際官憲道德は、疑ひもなく存在しつゝあるが、之れも他の一般の道德と齊しく、方今著しき萎微狀態を呈して、辛くも其が餘喘を保つて居る觀を呈して居るのである、何れの方面にあつても、德性の拂底なのは、現代に於ける通有的現象であらねばならぬ、ところで吾人が、常に慨歎に堪へぬことは、官憲其のものが、甚だしき自我觀に捉はれて來たといふことである、言ふまでもなく、官憲は一種の公人である、其が對象とする所のものは、所謂民衆其のものであつて、其所に彼等は、私的道德を別にした、公的道德を持たなければならぬものである。

然るに彼等の多數のものは、よく此の公的道德なるものを解して居ないやうである、彼等は、自分自身に執るところの職務が、對他的であり、公的であることは、日常的習慣的に閑却されて居るのである、そして夫れ等の事務なり職務なりは、恰も自分自身に向つての、生活的事務

であり又は職務であるかに感じて居るのである、言葉を換へて言ふならば、彼等は公的に對して仕事をするといふことを考へずに、自分の生活に對して仕事をして居るのだと考へて居るのである、斯うした主客顚倒的な考へを有して居るのであるから、彼等は往々にして對者に向つて、過不及的な擧措を敢てするものである。

官憲が多くの場合、極めて不親切であるといふことは、全く此の對他道念の非弱なることに因由するものである、一言にして之れを掩へば、我が職務は、パンを得んがための職務であつて、他に對しては何物をも有しないと言つたやうな、極端な自利思想に捉はれて居るのである、斯ういふと、餘りに極言し過ぎるやうであるが、世の所謂官憲なるものは、たとひ此の樣な自利主義を意識しないまでも、少なくとも斯うした傾向の意思を有して居ることは事實である、夫れは何もひとり官憲にのみ限つた問題ではないが、其の多くの例が、官憲によつて見らるゝのである、之れは一種の官憲病と見做すべきもので、官民共存と、官民歸一を原理とする文明社會にあつては、實に忌まはしき弊事であらねばならぬ、此の病にして除かれない限り、法と人との關係は、決して圓滿なる結合的關係を成就することは出來ない。

原則として、官憲は常に嚴正の地歩に立つべきものである、曲を去り正に與みし、惡を捨て善に就く、之れが取りも直さず、官憲の常道であらねばならぬ、此の常道からして出發さるゝところの彼等は、進退共に正義正道の道途を歩むべきで、苟も邪道曲路に對しては、敢然として其を回避すべきであることは、其が天分であらねばならぬ、ところで今の世の官憲にして、果して此の常道に立ち、よく其の天分に善處して居る者があらうか、退いても、進んでも、何等心に愧ぢないと言ふ者があるだらうか、之れが先づ吾人の問はんと欲する所のものである。

此のやうな問ひを敢てすることは、事實官憲に對して、やゝ不穩當であるかも知れない、併しながら吾人をして、斯くの如き問ひを發せしむるといふには、其所にまた或る已むなき事由が存するものであらねばならぬ、官憲は理法に正義であるといひ、其を如實に信じ得ることならば、吾人は決して斯くの如き問ひを發するものではない、が遺憾なことには、吾人には然かく速かに彼等の正義を信じ得ぬ理由があるのだ、ト言つても、官憲其のもの全部が、悉く然うであると斷ずるものではない、中には眞に模範たるべき官憲者も無いではないが、夫れ等は極めて少數なものとして、一般的に然か言ふのである、夫れからモ一つは、吾人は何も官憲否認

論を振り廻すものではない、否寧ろ官憲の重んずべきを知つて、之れをして如法的なものたらしめんことを希ふものである、故に吾人は、何等の偏見をも有することなしに、公平明大なる心意を以て、虚心に彼等に對するものである。

官憲は、時あつて己を捨てゝも、正義正道に與みしなければならぬのである、ところが今の世の彼等には、往々己れのために、正義正道をも蹂躙して顧りみぬものがある、所謂隨時隨所に見らるゝが如き、壓迫や干渉や誣告や威嚇の如き、眞に其の要があるものは格別として、更に其が要を認めぬにも關はらず、之れを敢てして憚らぬといふ類が之れである、之れでは官憲でなくて非官憲であり、治民者ではなくて害民者である、若し此のやうな官憲者があるとしたら、夫れこそ社會なり國家なりは、眞にくらやみであると言はなければならぬ、ところで一たび首を回らして、洽ねく全社會を看一觀したならば、此のやうな官憲が、比較的にウヨ〳〵して居るのに驚かぬ譯には行かぬ。

社會の進運に、大切なる貢献を有すべき、思想の發表に對しても、彼等は容易に抑壓の蓋をかぶせてしまふ、勿論世の中には、所謂危險性であり、害毒性である思想もあるのであるから、官憲として、之れに多大なる注意を拂ふことは、最も必要であり、よき事であるに相違ない、斯くの如きは、寧ろ官憲者の職務的本事で、素より然かあらんことを望むものである、が彼等は、斯かる必要のなきものにまで向つて、敢て其が棘腕を揮ふ事がある、玉石混淆といへば、些か罪が輕いやうであるが、中には思想の何たるかをさへ解せぬものもないではない、斯かるものにして、麗々しく官憲として濶歩するに至つては、世の中の正義正道者は、いつもビクビクもので世を渡らなければならぬのであつて、思想界にあつても、之れほどの不祥事はないとせねばならぬ。

病氣は潜伏期の中に治さなければならぬ、禍害は未然の中に之れを除くことを要する、ダカラ官憲の手としても、事前を把握することがなくてはならない、併し餘りに事前をのみ掴まうとすると、得て飛んでもない方角違ひに突進することがある、デ夫れが彼等にあつては、單に方角違ひであつて、謂はゞたゞ骨折り損の草臥れもうけ位に終つてしまふのであるが、社會に取つては、其れ位のことでは埒がつかない、方角違ひの思想壓迫などは、時代的必須の思想に對して、何れだけの進歩を阻止するか知れない、一つの惡思想を抑ふるために、百の善思想を

阻害するとなつては、人生のためにも、社會のためにも、將たまた國家のためにも、天を仰いで哄歎すべき、最も大なる痛恨事であらねばならぬ、此の如きは、所謂牛を矯めんとして角を折り、禾を長ぜしめんとして其の苗を拔くもので、偶々以て反對な惡結果を招來するに過ぎぬのである、此の樣なことは、我々共同の幸福のために、極力之れが排去に努むべきである。

抵抗の力が、壓力と正比すべき事は、物理學の敎ふるところである、苟も官憲たるものは、深く之れを銘肝すべきである、强壓を以て最良の手段と考ふるやうなものは、眞なる官憲の資格を有せぬものである、强制を以て官權の第一義となして、非常な失敗を敢てした地方官もある、民を諭すは愚なり、民を懲らすは賢なりと考へて、三年の治を棒に振つた良二千石もある、一時的威壓の成功に甘心して、民の御し易きを思ふの徒は、畢竟治民の術を知らざるものである。

官憲の道德は、よく民情に明らかなる事によつて行はれるものである、苟も民意を解せず、世情に通ぜざるものであつては、其の意義ある道德は發揮さるべきでない、然も尙ほ晏然として其の職に止る如きは、不德の甚だしきものと言はなければならぬ、前章に於て述べた奢侈品關稅引上げに於けるも其の通りで、當局者は何等民情をも顧念することなく、民意の存するところを酌量することなしに、たゞ漫然として、小策を提げて民に臨むものであらねばならぬ、此の如きは、言ふまでもなく、不明を以て民を虐ぐるもので、不德之れより大なるはなしである、彼等は豆大の眼孔によりて、宇內の形勢を管見し、之れを以て强て民意を律しようとする、要もなき詮議立てをして、却つて國民に多大の不便と迷惑とを與へて、果して何の益があるか、コーヒーを贅澤品として、八割五分の增稅を課することによつて、プロレタリアの中食に多大の恐慌を現じたではないか、また一時の人氣取の爲に、行財政の整理や事業の打切を策して、尠からぬ失業者を出し、甚しき不景氣を招來せしめ、ブルジョアの大官は知らぬが、飢餓に堪へず、今や無錢で市井の一瞻めし屋に駈け込む者の多きを見る、亦は政府者が、餘りに民情世態を無茶にした因果であらねばならぬ、之れといふのも、畢竟當局としての責任を缺いた、不明を以て世を律する不德のものである。

殊に官權を直接に使用する、警察官憲などにあつては、一層此の德性に疑ひなきを保せぬものである、素より警察官憲の如きは、一部の法曹として、比較的に健實なりと評せらるゝもの

であるが、之れも所謂時代的の風潮を受けて、動もすれば官憲道德に缺如せる擧措を見るのは、矢張りお多分に洩れぬものであらう。

干渉と檢擧とを以て、其が本事と心得て居る警察官憲の多くは、動もすれば職務的に脫線することが多い、自己の功績を顯著ならしむるためには、往々功名爭ひをやる、そして時には無辜を鞭打ちて、火の無い所に烟を立てさせようとすることもある、何事も規則一方で、兎角民衆を異端者扱ひにしたがるといふのも、また官憲道德の不具者であらねばならぬ、殊に選擧などの時に於て、或る方面の犬馬となり、走狗となつて、辛辣なる手腕を揮ふものさへあるといふに至つては、最早官憲道德の範圍を超越したもので、全く沙汰の限りと言はなければならぬ。

官憲には、兎角權柄振るといふ癖がある、夫れは職務上などからして、自然に然うした態度が馴致されるものかも知れないが、併し其の或者にあつては、隨分極端に威張り散らすのである、彼等は威張ることを以て、威嚴を保つものであると考へる、そして威張らなければ、職務が遂行されぬと思つて居るらしい、ダカラ一般人民に對しては、ビシリ〳〵と手酷く當り散らすのである、之れだけなら、單に官憲道德の缺陷者として、多少寛假すべきところもないではないが、驕へつて其が反面を見たときに、其が酌量の餘りに無意味であつたことが感知さるゝのである、則ち彼等が一たび富豪者や權力者に對した時は、果して如何なる態度を取るであらう、中には少數の異例者もないではないが、其の多くは、一般人民に對したときとは、正しく正反對の態度に出づるのである、唯々諾々低頭平身して、出來得る限りの慇懃を盡す所は、恰も何物をか哀求するものゝ如き觀があるのだ、之れを一般人民に對した時の、傲慢不遜な態度に比したならば、實に別人であるかの感じがするのである。

民衆に驕りて、權貴に媚ぶるといふのは、現代官憲者流の通弊であらねばならぬ、平等なるべき人間を差別視し、富と力との分量によつて、其の腰の角度を伸縮するところに、彼等のマザマザしい心事が窺はれるではないか、彼等は一面に於て、公僕たる性質を有しながら、利害の上にあつては、私人だも敢てせざる底の汚辱を事として辭せぬものである、玆に至つて、吾人は官憲道德なるものゝ、案外力弱きに驚かざるを得ぬものである、判檢事が醉狂して、旗亭に大喧嘩をオツ始めたとか、物品出納官吏が、奸商と結托して不正の私利を貪つたとか、地方知事が、內務大臣の內命によつて、謂れなき選擧干渉を試みたとか、下つては警察巡邏が、密行

中窃盗に押し入つたとかいふやうなことは、素より其が人格の然らしむるところであらうが、官憲道德の非薄が、與かつて力あることも、また否むことの出來ぬものであらねばならぬ。

之れを要するに、現代は世を擧げて、みな滔々として、惡化せる思想の氣流に搖蕩されつゝあるものである、人間は人間として、單に自己にのみ生きようと考へる、人間の本義としては、自我より重んずべきものはないとして、進んでエゴイストたるべき勇氣を鼓舞するものもある、理想も天國も、己れ自身の外にはないとするところに、彼れ等の道德は、微塵だも跡を留めないのだ、取らざれば奪はれる世の中と觀じ來たつては、自分の懷より外に顧みるべき何物もない、斯うなつては、理想も道德も絲瓜もあつた譯のものではないのである。

が、此のまゝに押し進んで行くとしては、國家は確かに滅亡の憂目を見ねばならぬ、官紀の弛緩は、政道の頽廢となり、政道の頽廢は、民心の乖離となり、民心の乖離は、國本の動搖となり、國本の動搖は、直に國家の衰滅を招來するものであらねばならぬ、故に苟も國を憂へ民を思ふものは、官憲道德の振作に努め、以て國家の活動に、剛健質實の新動力を與へなくてはならぬ、吾人は此の意味に於て、所謂官憲者流の、公私道德を顧念して、耿々寤寐に安んぜぬものである。

第二十五章　風教道德より觀たる思想中毒

世運は慥かに進展した、文化の光明はあらゆる世界に透徹して、文明の花は爛熳として咲き亂れて居るのである、此の間に伍する、我が大和島根は、東海洋上の雄として、重きを列强の間に認められつゝあるもので、我等大和民族に取つては、無上最大の欣幸であらねばならぬ。

文化の光り、文明の花、あらゆる美はしきものによつて飾られたる我が帝國は、外形に於ても、內容に於ても、確かに押しも押されもせぬ、偉大なる國家であることは、今更呶々するを要せぬところであらう、併しながら吾人は、此の美はしく妙へなる祖國を思ふにつけて、寤寐念々に忘れ得ぬところは、時勢に伴ふべき民情は如何にといふ事である、徒らに文化の光りにのみ眩惑し、無下に文明の香にのみ醉ふことは、決して忠良なる臣民の能事ではない、天下の憂へに先だつて憂へ、天下の樂しみに後れて樂しむといふことが、眞に堅實なる民としての心

事であらねばならぬ。

我國は世界の一等國であるといふ、質に於て量に於て、夫れ或は然からんか、否吾人は然かあるべき事を希ふものである、併しながら飜へつて思ふべき事は、徒らに空名をのみ博することの非なることである、名はたとひ一等國であつても、其の實が二等國であり、三等國であつては、素より足るに足るべきものではない、此の理法からして、吾人は寧ろ其の名は二等國三等國であつても、其の實力に於て一等國であらんことを希望するものである。

現代の文明は、文化の文明である、科學の進展に於ては、眞に嘆美すべきものがなくてはならない、が吾人は、何れの時と雖ども、精神方面を閑却してはならない、物質の文明も大なる必要事であるが、精神の文明もまた大なる必要事である、然るに現代の人々は、動もすれば物質的文明にのみあこがれ、精神的文明を閑却する如き態度があるのは、眞に慨歎に堪へぬところである、成程今日の實生活は、物質を外にしては之れを充足せしむることは出來ないのであるから、勢ひ物質的にのみ趨りたがるといふのも、一面に於ては、無理もないことであらねばならぬ、が人間はあながちに物質にのみ生きるものではない、精神の上にも、其が生活はあるので、此の兩者を兼ね得たものでなくては、完全なる生活を營むことは出來ぬのである。

ところで之れを我國民の現在に見るに、果してよく此の兩者を兼ね備へたものであらうか、吾人をして之れを言はしめたならば、我國民の現在は、物質的に優つて、精神的に劣ると言はなければならぬ、其は何故であるかといふに、近來我國民の道德的品性が、著しく低下されつつあるがためである、科學の日進月歩は、物質的文明に對しては、遺憾なき福音を傳へつゝある中に、精神的生活は、一日一日と墮落の徑路を辿りつゝあるかに見えるのである。

それかあらぬか、吾人は我國に於ける風敎が、日に〳〵頽廢し行くを感ぜずには居られない、或る人は、現代國民を以て、よく理性に覺醒したものであるといひ、思想の上にあつても、驚くべき向上を見つゝありといふ、成程其が點としては、或は說者の言の如くであらう、併しながら思想の向上と、德性の向上とは、必ずしも一致すると限つたことではない、德性は畢竟別個の問題として、思想や學問とは特別な眼を以て之れを觀ねばならぬのである。

風敎の衰へ、夫れは實に國家としての、由々しき問題であらねばならぬ、之れを古今東西の歷史に稽へて見ても、一國の盛衰興亡は、先づ第一に風敎に其の足を置くものである、風敎に

して興れば、其の國は必ず隆昌する、風教にして衰ふれば、其の國は必ず凋落の影に浸されるのである、這は決して一片机上の空論ではなくて、歴然動かすことの出來ぬ事實である、ところで玆に最も注意しなければならぬ事は、風教と文物の相異である、世の中の人々の中には、往々此の二者を混同して考へて居るものがある、故に文物が隆昌したといふことを以て、直ちに風教も向上したのであると考へるのである、が之れは甚だ間違つた考へで、實際に於ては、文物と風教とは、決して其の軌を一にするものではないのである。

羅馬の文物が隆昌であつた時にも、其が風教は非難すべき頽廢にあつたのである、バビロンの文盛時代にも、夫れとしての風教弛廢は拒み得なかつたのである、シテ見ると風教と文物の關係は、決して之れを同一轍に見做すことは出來ないのである、我國に於ても、由來此の事蹟に乏しくない、奈良平安朝の文物隆昌と、其れに隨伴された風教の頽廢とは、明らかに其が事實を語るものではないか、元祿時代に於ける文物と、同時代に於ける風教とが、如何なる狀態に推進したかを思つたならば、文物の隆昌なる所以を以て、直ちに風教の理想時代であると斷ずることは出來ぬのである。

之れを現代の世界に於ける、文物の隆盛に見ても、風教の振作が、必ず之れに比例されて居るとも思はれぬのである、否寧ろ近代にあつては、風教の頽廢は、宛も文明の附き物であるかの觀を呈して居るのである、彼の支那人などが唱ふるところの、文弱なる語意も畢竟此の邊から出發されたものであらねばならぬ、平家の滅亡か文弱であり、其の文弱が所謂文物に因するといへば、文物の隆昌といふことにも、中々油斷が出來ぬものであらねばならぬ。

扨は兎に角として、現代の我國は、慥かに風教上の、大なる恐慌時代と言はなければならぬ、時の文相や內相などは、何と考へて居るかは知らぬが、我國民は今や風教上の叛鬼に魅せられ、次第々々に廢頽の深谷に導かれつゝあるのである、今にして之れが救濟の策を講じないのであつたら、我國民は滔々たる頽波に沈溺するの慘を嘗めなければならぬのである、此際此時、徒らに一時の快言に甘んじ、暫かに一日の偷安を貪るべきものではない、問題は對岸にあらずして、寧ろ我が眉宇に迫りつゝあるのだ、覺めよ國民、起てよ新人、まさに堅禪一番すべきの秋ではないか。

政府當局者は、容易に國民教育なるものを云爲するものである、健實なる國民の養成、有爲

俊秀の士の薫陶、國民風紀の肅清、言ふところは中々に多いやうである、が其の量の多い割合に、果して夫れだけの實績が擧げられて居るのであらうか、例に依つて例の如くならずんば、之れ實に國民の大幸たるべきものである。

吾人をして、忌憚するところなく之れを言はしむれば、今の時は、正に教育者を教育せねばならぬ時である、言葉を換へて言ふならば、今日に於ける教育事蹟を根本的に顧みて、其が教育さるゝ位置にあるものを教育するよりも、其を教育すべき地位にあるものを教育してかゝらなければならぬといふのである、被教育者を第二にして、先づ第一に教育者を教育するといふことは、實に矛盾であり、奇怪であらねばならぬ、併しながら吾人は、決して夢中に夢を說くものではない、また虛無を實有として談ずるものでもない、要はたゞ語らざるべからざるが故に語るもので、徒らに奇矯を衒ふごときは、吾人の能とせざるところである。

實際に見よ、總ては諒解すべしとは、古來哲人の高唱するところである、理論や學說には、虛僞もあらうし、過誤もあるであらう、併し實際は一切に於て事實であり、赤裸である、其所には何等の虛僞も、何等の過誤もあり得ないのである、今の世の教育者を以て、如實の教育者とし、而して其が教育者を、不要教育の地位にあるものとすることは、理論であり學說であらねばならぬ、則ち今の世の教育者の多くには、其れ自身が他を教育することよりも、夫れに先だつて、其れ自身が他より教育されねばならぬものである、モ一歩率直に言つたならば、今の世の教育者には、教育者としての資格を有せぬものが尠なくないのである、彼等を庇護しようとするものは、吾人の此の言を以て、極めて非理なものとするであらう、そして所謂教育者が、一定の公資格を有して居ることを以て、彼等の言を裏書きするに相違ない、が吾人の言ふところは、彼等の見るところを超越して居るものである、彼等は教育者たる公資格を云爲するのであるが、吾人にあつては、寧ろ其が公資格をも擧げて否定せんとするものである、教育者としての公資格があるから、夫れが立派な完全無缺な教育者であると斷ずるのは、論理的に其の意をなさぬものである。

教育者の尊重すべきものであることは、吾人としても異議のないところである、併し夫れであるからといつて、事實の上に資格の無いものをも尊重すべしとは、何うしても信ずることが出來ないのである、資格問題は、看板問題ではない、實力の無いものに向つては、決して資格

が與へらるべき筈がないのである、ところが今の世には、何う見ても資格が無いものが、堂々として其の公資格を有して居るから不思議でないか、何々大學の教授だとか、何々學校の講師だとか、何々小學の教員だとかいふやうな公資格者を並べて、一々仔細に之れを點檢したならば、吾人の不思議とする所以のものが分るであらう。

教育者には、教育者としての技能があり、道德があり、品位があり、性能があらねばならぬ、そして彼等に於て、最も大切なるものは、よく風教的儀範たり得べき實質を有すべきことである、デ此の大切なる素質的資格を有するものにして、始めて教育者たる公資格が與へられねばならぬ、否な今日にあつても、勿論此の要約によつて、其の公資格が與へられて居る筈である、ところが實際に於ては如何、此の理論は、見事裏切られて居るのである、彼等は其の資格に於て、また其の職務に於て、押しも押されもせぬ風教上の儀表者でありながら、其が內面に於ける事實的素行は、眞に筆舌にするだも堪へぬものが多いのである、人妻と駈落ちしたり、教へ子を疵物にしたり、甚だしきに至つては藝妓と心中したり、學校の卒業證書を販賣したり、或は强盜や竊盜を敢てするものもある、殊に日本の風教維持者たる彼等の或者の中には、無政府主義の宣傳を試みたものさへあるではないか、惡い方の喩へではあるが、巡査上りと教員上りとが、無賴的に指彈されるのは、果して社會の罪であるか、抑もまた彼等の罪であるか。

方今青年者流の、著しく風教的に墮落しつゝあることは、爭ふべからざる事實である、第二の國民としての彼等が、滔々として此の弊流に溺沒し去ることは、正しく大事であらねばならぬ、之れといふのも、今や時勢的に浮動しつゝある所の、所謂似而非新思想に誤まられて、其が本來の良能性を攪亂されるのに因由するものである、生嚙りの西洋新思想を、金科玉條と心得る結果、自我に走り、重利に赴き、本能に突進し、自尊に慢ずるに至つて、玆に彼等は、正眞正銘のエゴイストとなり了るのである、師父を見ること奴僕の如く、長上に對する仇敵にも似、社會や國家を屁とも思はぬところに、圖々しさと太々しさを極端に發揮するものである、師父を前にして、滔々と自己の權利と自由を說き、怖いものなしの自儘氣儘をやるといふのが、現代青年の通有性である、ダカラ家庭にあつては、無類の駄々ッ子であり、學校にあつては、驕慢なる暴れものであり、社會にあつては、猛惡なる無賴漢であるのだ、今日社會の通語となつて居る不良少年なるものは、實に現代青年の代名詞であると言つても差支へないのである。

デ此の様なものゝ輩出するといふことは、一面に教育の大なる缺陷を表明するものでなくてはならない、上に有力適切なる教育がなく、下に滔々たる惡流が漲つて居るところに立つ彼等が、よき感化を受けぬといふことは、寧ろ當然であらう、加ふるに鋭角的な西洋新思想に刺戟さるゝ彼等は、高慢となり、生意氣となり、手も附けられぬものになつてしまふのだ、寄語す世の所謂教育者よ、そしてまた治教の局に當る官人連中よ、徒らに己が懐ろ勘定にのみ腐心することなく、此の怖るべき青年者流の頽風につき一考せよ、そして社會のため、國家のため、將たまた人類のために、此等の弊事を消滅して貰ひたい、一時胡麻化しの責任逃れをやつて、夫れで腮の下を安穩にしようといふのは、餘りに虫のよき考へではあるまいか。

現代に於て、最も吾人の注意を惹くところのものは、所謂戀愛問題と稱せらるゝところのものである、吾人が日夕に見聞するところのみを以てしても、斯うした問題は可なりに多いのである、勿論世界は人の世の中であるから、戀愛的事相が絶ゆる筈もなからうし、此の種の問題が、頻々として吾人の耳朶を打つといふことも、決して怪しむべきものではないのである。

戀愛が神聖であることゝ、其が自由であることゝは、吾人としても何等異議を挾むものではない、在來の道義學者などは、一夫一婦といふことにすら滿足せずに、女は一生涯の中に、一人の男子の外には見えぬとか、男子も家道のための外には、生涯他婦を娶らぬとか言つたやうなことを以て、貞操上の眞善であると考へ、無暗矢鱈に、戀愛抑制主義を振り廻し、戀愛の神聖や、自由やをば、一嘘に附するのであるが、吾人よりして見れば、此の様なる因襲的道德觀念に捉はれたるものこそ、眞に嗤ふべきものでなくてはならない。

併しながら、翻へつて之れを現代に見るに、所謂其の戀愛といふところのものも、往々にして其が神聖的要素を缺いたものが尠なくないのである、戀愛にして、既に神聖性を缺いたものであれば、其が自由を叫ぶといふことも、玆にスッカリ無意味なものになつてしまはなければならない、換言すれば、神聖なる戀愛であればこそ、其所に戀愛としての自由が認められるのであつて、然うでない限りは、決して自由などゝいふ理想は云爲さるべきものではない。

戀愛の自由性は、其の戀愛が神聖的である時にのみ付與さるべきである、ところで今の世の所謂戀愛なるものを見るに、其が神聖的であるといふ事實に觸れたことはないのである、彼の戀の三角關係など言はれるやうな、いづれが甚底であるやら、何れが尖頂であるやらさへ分ら

ぬやうな、一種奇體な戀愛が、頻々として見られるのは、人類正義のために、大なる不祥事であるとしなければならぬのである、一體現代の人々は、何事に對しても、極めて厚顏的な傾向を帶びて來たのであるが、殊に此の戀愛などに向つては、更に一層甚だしい厚顏的態度を取るやうになつた、夫れといふのは、曾て戀愛などゝいふことを以て、士君子の口にだもすべからざるものとの觀念から、自然此のやうなことには、餘り當面せぬといふ風であつたのが、時代的自由思想からして、戀愛も亦如實に自由なるべきものであると考想するに至つたからで、之れも時代的な思想上の一推移であらねばならぬのである。

餘りに遠き過去は措いて論ぜず、近頃にあつて所謂戀愛問題を以て、世人の耳目を聳動せしめたものは、柳原燁子と有島武郎となどが、其の最も重なるものであらう、彼等にして、一たび其が事實の演出せらるゝや、世論は忽ち囂々を極めたのであつた、或者は彼等に同情し、或者は彼等を痛罵したのである、甲是乙非の論議は、一時世上を賑はしたと同時に、其が風教上の影響も、また甚だ大なるものがあつたのである、一體人間其のものは、何れも共通的に、或る一種の模倣性を有して居るものである、ダカラ何か一つ變つたことでもあると、一般世人の心理に、必ず何等かの衝動を與へずには居ないのである、彼の共鳴者など呼ばるゝものが之れで、打てば響くといふ、社會的影響は、決して輕々に看過すべきものではない。

其の當時、伊藤白蓮として謳はれた燁子其の人にあつては、其の自由なる戀愛といふのは、果して神聖なものであつたらうか、之れが吾人として、先づ吟味すべき問題であらうと思ふ、伊藤某といふものが、果して其の當時新聞紙などで喧傳されたやうなものであるか何うかは、素より吾人の知らぬ所であるが、たとひ其の人の性格品性が、如何なるものであつたにせよ、白蓮其の人に取つては、確かに夫であつたに違ひない、シテ見ると如實に之れを考へるならば、白蓮其の人は、有夫の身を以て、更に他の男子に意を通じたものであらねばならぬ、此の一點からして見て、吾人は彼等相愛者の間の戀愛が、決して如法的に神聖なものであつたとは思惟せられぬのである、既に其の戀愛が神聖でないものであるとしたならば、モウ其所に自由を要求する餘地はないではないか、斯る場合に於て、如何に其の夫の人格品性を云爲した所で、それには何等の力も有せぬものである、ダカラ白蓮其の人にして、眞に神聖なる愛に生きようとするものであつたら、如法に其が夫と絶緣し、清淨無垢の身となつて後、相思の愛に浴すべき

ものである、斯くしたならば、其の戀愛は神聖であり、そしてまた自由であるべきである。

之れを有島武郎に見ても、また之れに同じきものがある、彼れが何某といふ有夫の婦人に戀したといふことは、言ふまでもなく不穩當であり、且つ淸淨的行爲とは認め得られぬのである、更にまた吾人の聞くところを以てすれば、彼れには立派な子供があつたのである、シテ見ると、彼れは其の戀愛のために、其の最愛の子供をも棄てゝ顧りみぬ底の心事にあつたである、故に有島武郎が、眞に其の理解するところの戀愛(夫れが文藝によつて育まれたものにしても)によつて、所謂神聖なる戀に生きようとしたとしても、彼れは彼れの自體からして、あらゆる既存的な道德上の羈絆を除去したものではなく、全く自由なる境地に立つて居たものではない、ダカラ彼れにあつては此の點に於ても、また或る道德上の缺陷者であつたといふことは決して爭ふことが出來ない、戀愛が如何に自由であるからと言つて、あらゆる何物をも破壞して差支へないとは言へない、社會や國家には、秩序があり制規がある、苟も社會國家に民たるものは、何うしても此の原則に遵由しなければならぬ筈だ。

併しながら、理窟は理窟として、所謂戀愛なるものが、如實に人生的大問題である以上、ただ道義一片や、皮相なる風教觀を以て、やすやすと之れを片附けてしまふことは出來ぬであらう、一通りは戀愛の原義位は知つて、少なくとも理論的實際的の、價値ある判斷を下さなければなるまい。

戀愛が、對他的犧牲的であることから、現代人の個人主義と背馳すると言ふことは、何人も不思議に感ずるところであらう、が戀愛を以て、自我の解放であるとするならば、其が犧牲氣分は充分に了解されよう、愛の情熱による所の、大なる要求からして、自我の全幅を以て、愛するところの一方に捧げ盡すところに、根本的な奉仕的犧牲が、遺憾なく對者に與へられるのである、其の時に於ける自我の滿足、夫れが人生の全であり、生命であるとせねばならぬ。

此の自我の解放によるところの、奉仕的犧牲が、兩者合致したところに、渾然的同身一體的人生快感が現前されるのである、そして其が大なる人生的秘密として、あらゆるものゝ底深くに秘め鎖されて保存せられつゝあるのである。

ダカラ少なくとも戀愛問題を解決しようとするには、二つの點に視線を下さなければならない、則ち一は本能的、靈性的、生理的ポイントで、一は社會的、秩序的、道德的ポイントであ

る、ところで世人の多くは、前者のポイントを閑却するものである、そしてたゞ後者のポイントにのみ着眼立脚して、這般のあらゆる問題を論評し取扱はうとするものである、則ち彼の道學者流などが其の代表者であらねばならぬ、此の樣なところから、兩者の葛藤が起り、見解の矛盾が生じ、其所に大なるアグノスチックが現はれて來るのであらねばならぬ。

ト言つて第一のポイントにばかり立脚するときは、全く環境を度外にした、單なる個性的作爲をのみ實とするものとなるのであるから、決して社會と關係した、相互的論旨に到達することは出來ないのであるから、單なる人生的觀から離れて、社會的觀に移入されたところの、制規的生活に向つて、幾多の不便な論理が構成されなければならない、故に之れとしても、素より適性の見地に立つものとはすることが出來ない、之れを要するに、此の如き問題に逢着した場合には、先づ第一に靈性的に之れを觀、而して後、理性的に之れを觀ることを要とするものである、斯うしたならば、一面に於て、戀愛其のものゝ實質を看過することがなく、一面に於て、社會的秩序をも閑却せずして、其所に缺陷の最も小なる見解を釀出し得るものである。

扨は姑く措き、現代人の如くに、動もすれば人妻と通じ、他の夫と姦し、夫れがために妻を捨て、夫を捨て、子を捨てゝ、而も平氣の平左で濟まし込んで居るやうなものが多くては、風教道德も片なしであらねばならぬ、餓者たるものは食を擇ばずといふ流儀で、ドシ〳〵女や男を漁り歩き、最後の果てが、ヤレ駈落ち、ソレ心中と酒落れ込み、夫れが眞の愛情であるの、神聖なる戀愛であるの、戀愛の自由解放であるのと喚き廻るに至つては、笑止千萬とも、氣の毒千萬とも、イヤハヤ何とも評して見やうがないのである、吾人は戀愛なるものを神聖視すると同時に、其を今日に於けるものゝ如き、安價なものとは認め得られぬのである、戀愛の自由としても、吾人はより多く之れを認め开を諒するが、而も之れを以て、自己獸慾の手先きとし、看板とし、口實とし、武器とすることを以て、戀愛に對する大なる叛逆的犯罪行爲として、力を極めて之れを排斥せんとするものである。

風教道德の叛逆者は、到る所にウヨ〳〵して居て、泥濘の中の石ころの如く、浮つかり道さへ歩かれぬのである、貴族の蓄妾、待合政治、富豪の女漁りに茶屋肥やし、紳士面の貞操蹂躙から、坊ッちやんの小間使ひあそび不良の手習ひつひ見覺えの道成寺、モひとつおまけが淑女令夫人連の役者買ひ、其樣なことを數へ立てたら、竈の飯が焦げついてしまふのである。

風教道德の上から觀て、更に一層の寒心に禁へないことは、現代に於ける學生の品性的墮落である、學生と墮落といふと、何人も其所に教育なる一事を聯想するであらうが、兎に角其の教育の缺陷と、全般社會の惡風的感化とが相俟つて、彼等學生達は、今や滔々として、相率ゐて墮落の深谷に急ぎつゝあるのである。

疑ふものは事實に見よ、事實は總てを裏書きするものであらねばならぬ、方今學生に對する種々なる問題は、最早疑ふべからざる事實として、眞の知者をして眉を顰めさせて居るのである、彼等に對する風教上の矯正は、彼等自身の問題ではなくて、實に社會と國家の大問題である、此の問題にして解決さるゝことなく、此の弊風にして匡正されざる限り、我國は近き將來に、最も大なる、最も怖るべき禍害を招致すべく餘儀なくされねばならぬ、之れ蓋し机上一片の議論として、無造作に押し片付けてしまふべきものではない。

近來學生間に頻發するところの、彼の同盟休校などゝいふことは、慥かに學生としての、一種の變態行動と言ふべきものである、勿論此のやうなものが生起されるといふには、其所には何等かの事由もあり、動機もあることは言ふまでもないところである、昔からよく言ふ、火の無いところには烟りは立たぬといふのが夫れであらねばならぬ、が一つの事實があつたからと言つて、必ずしも夫れにのみ罪責を稼せしむることは出來ない、事實は事實であつても、夫れを受取るものゝ見解に、果して如何なる異同があるかを辨別してかゝるべきものである。

盜人にも三分の理ありで、如何なる行動を取るものにも、必ず夫れ相當の理窟は持つて居るのである、ダカラ學生連の同盟休校などいふやうな場合にも、彼等は大々的に、所謂其が理由なるものを公表し聲明するのは勿論である、夫れと同時にまた學校側としても、夫れに對する、或る宣明を告示し對抗するのも例となつて居るのであるが、此のやうな事實に接した吾人は、何所までも冷靜な態度を以て、公明正大な批評眼を投げなければならぬのである。

昔の世界にあつては、師弟關係などは、實に極端なほど嚴肅なものであつた、師の影を踏まずとか、師の前一丈を隔てゝ坐すとか言つたやうなことをば、弟子としての最要な禮儀とされたものである、然るに今日にあつては如何、師の影を踏まぬどころか、日頃鍛へた柔道の腕で、英語の教師を投げ飛ばした中學生もあるのだ、少しでも學生の感觸を害したら往生、教師だからとて、お構ひ會釋もなしに、ドシ〳〵叩き附けられてしまふのである、田舍の中等教員など

が、夜間の歩行にさへビクついて居るといふことは、吾人が親しく聞いたところであるが、實際今時の教師ほど、みじめ極まるものはないのである。

夫れは時あつては、學校側にあつても、また教師側にあつても、不適當な處置や、非義的行爲もあることに起因する事がないではないが、夫れとても、多くは單に感情の上から出發される衝突であつて、眞に相爭ふべき事柄でないことが多いのである、彼の教師は傲慢だから遣付けろとか、彼の舍監は不親切だから排斥してしまへとか、彼の職員は氣に食はぬから放逐しろとか、或は教授振りが面白くないの、生徒を見て笑つたのが怪しからぬのと言つて、忽ち反抗の宣傳をやるのである、そして夫れが學校當局に依つて採用されないとなると、忽ち團結して同盟休校と拗ね込むのが常套事である。

學生としての、此の様な所置は甚だよろしくないに相違ない、が學生をして、此の様な居措に出でしむるといふ、現代學校の責任も、決して輕微なものではないのである、昔しは人に教ふるのは、眞に長者たる心事を以てしたのであつたが、今の學校や教師は、自らのパンのために人を教ふるものである、學校は店舗であり、教師は店員であり、學藝は商品であるといふのが、今の學校に對しての適評であるかも知れない、ダカラ學校側から見ては、生徒や學生は、正しくお客様である、其のお客様から取り上げる月謝や校費が、手もなく賣代金となるもので、教育の商業化とでも言ふべき狀態にあるのである。

則ち生徒や學生などにあつては、無論增長せずには居られない、然なきだに、現代的自我に目覺めて來た彼等は、納付する月謝だけの權利は回收すべき理窟を持たされるのである、お客様だ、氣に入らなければ買はないまで、夫れで困るなら、先づ店から店員までも改正しろといふのが、彼等の鼻息であらねばならぬ、何千坪の校舍、何十何百の職員、そして何千何萬の維持費、之れだけを要する學校の會計は、決してお客さまたる生徒や學生に强硬なる態度を加へる事は出來ないのである、終には監督當局の仲裁とか、學界有力の名士とかの扱ひに隱れて、何分かの讓歩で鳧をつけてしまはなければならない、此の消息を心得て居る生徒や學生は、高を括つて高飛車と出掛けるのである、斯うなつては、教育上の道德も、學生としての道德も、師弟としての道德も、テンデ問題にならぬのである、文教に於ける風紀の墮落も、玆に至つて極まれりと謂ひつべしだ。

文教の親玉である文相は、斯界の長老と稱されるものである、が其の長老は、ますます長けて老いぼれてしまはなければ幸ひだ、學校の騒動などは、自分の邸内の長屋が風に吹き捲られたほどにも感じないやうなことがあつては、國家風教の前途も、悲觀せざるを得ないではないか、起つて天下の風教を匡すといふことも、男子と生れての一大快事ではあるまいか。

學生が政治に干與するといふことも、充分に考慮すべき問題であらねばならぬ、ト言つて吾人は、決して政治的に彼等を無視するものではない、彼等としての政治的見解を持つことは、時勢上然かあるべきを信ずるものであるが、たゞ恐るゝところは、其が餘りに深入りして、終に學生たる本分を失はんかといふことが之れである、彼の議員選擧などに、彼等學生が、多大なる應援を與へた事實は、最近に吾人が目覩せるところである、言ふまでもなく此の如き單純なる應援を以て、直ちに彼等が政治に干與したものと認むることは出來ぬのであるが、一歩は百歩の前提であることを思ふては、然ういふことにも、或る注意は拂はなければならぬ、單なる應援とはいふけれども、夫れによつて少なくとも利益を受けたものがあるとしたならば、將來進んで彼等を利用しようとする野心家が出現しないとも限らぬのである、殊に選擧界の如きは、其が目的のためには、斷じて手段を擇ばぬのを以て通則とするのであるから、此の樣なことは、單に杞憂を以て一嚔に附すべきものではなからうと思ふのである、萬一にも其の樣なことがあるとしたら、彼等純潔なるべき學生は、滔々たる今の選擧界の汚流に捲き込まれて了はなければならぬ、そして其が一方に於て、倍々政治上の何ものにか感化せられ、惹いては惡思想の源泉たるべきものを取得せぬとも限らぬのであるから、事實はたとひ小であつても、其が意義は極めて重大なるものを有つものでなくてはならない、之れなども漸次に西洋あたりの學生の氣風と思想が、知らず識らずに流移されて來たものに外ならない、何かあつた場合に於ける、外國の學生などは、之れまでに其の多くの俑を示して居るのである、曰く莫斯科大學生の政治運動とか、曰く伯林大學生の何々運動とか、曰く北京大學生の某々運動とかいふやうなことは、隨分世人に知られて居る事柄である、吾人は一方に彼等の政治的知能性を開發すると共に、一方に其が適當なる限定方法を講ずることを以て、現下に於ける急務と見做すものである。

之れを要するに、學生の風教を匡正し維持するには、現代に適應した教育の上に、更に我國固有の正義的要素を鼓吹し、彼等をして十全に其が地位を知解せしむべきである、而して之れ

をなすには、學制の革新も必要であるし、一般人士の風教的感化も必要である、そして學校經營者や、教職員などにあつても、單に維持費やパンの問題にのみ汲々することなく、己れを修めて、他を化する底の慨を示さなければならぬのである。

第二十六章　雇傭道德より觀たる思想中毒

實踐道德の範圍が、人間のあらゆる方面に發現さるべき廣さにあることは、素より言ふまでもない事である、デ所謂雇傭關係の上に於ても、また儼乎たる道德が存在すべきであらねばならぬ、則ち雇ふもの丶方面にあつても、傭はる丶もの丶方面にあつても、其所に相互的な道德があつて、始めて傭者被傭者の關係が理法に現前せられ、保持せらる丶ことは言ふまでもないことである。

吾人は前篇に於ける勞資問題の條下に於て、傭主と傭人に就て、可なり詳しく批判を加へたのであつたが、玆には所謂道德上の方面から、忌憚なき觀察と批評を試みて見ようとするのである。

道德が、相互關係の調整的事實であるといふことは、既に述べた通りであるが、此の原義からしていへば、傭主と傭人との間に於ける道德は、則ち此の兩者の關係を調整するところのものでなくてはならない、また實際にあつても、然うした事實であることは既に明白なる事柄であらねばならぬ。

傭主の側からして言へば、彼れには所謂資本家としての、或る特有な實力を有して居るのである、言葉を換へて言へば、傭主なる資本家は、其の有するところの資本の力、謂はゞ金錢上の權力を以て、少なくとも卓然として、傭人則ち勞働者(精神方面のものをも含むところの)の上に臨んで居るものである、ダカラ階級的に兩者が存在されて居る以上、治者と被治者的態樣に置かれることは、目今としては餘儀なき事とせねばならぬ。

勞働問題などの惹起せらる丶ことを以て、いつも勞働者、則ち傭人側の過當なる要求にのみよるものと考ふるやうなことは、餘りに現代の世相に對して無理解であらねばならぬ、此の樣な問題が、頻々として惹起されるといふことも、傭主たるもの丶方面に、其が責任のあること

も決して尠なくないことは、何人といへども否定することの出來ぬ事實であらう、一體現時に於ける傭主階級のものは、其が通弊として、餘りに過當な重利觀念に捉はれて居るものである、素より彼等にあつても、人間としての情味が皆無であるといふのではない、また夫れと同時に、自己が使用する傭人の、最も大切なるものであることを知らぬのでもない、中には隨分非道な天性を持つて居るものもあつて、此のやうな考へを沒却して居るのも無いではないが、事實に於て多少の佛性は、誰れにあつても持つて居るのである、彼れも人の子樽拾ひ的な思ひ遣りもあり、傭人がなくては營業も仕事も出來ないといふことは、萬々承知して居るのである、けれども其所が資本家たり企業者たるものゝ悲しさには、利益といふものを前にしては、夫れ等の人道的觀念は、手もなく打ち消されてしまふのである、所謂重利觀念……利を重んずるといふ心が、何れよりも先づ彼等の意識を支配せずには居ない、そこで彼等は、殆ど本能的でゞもあるかのやうに、何事も遺忘して、たゞ〳〵利益の一方に猛進するのだ、其の場合には、心はただ利の一本鎗で、之れを遮るものは、一氣に突破して進むだけのものである、鹿を逐ふ獵師は山を見ないといふのが之れで、利のためには、或る場合自分の生命を殞しても悔いないといふのが、彼等の常例である。

昔からして、商人は利を重んずといつて、利を重んじ、利を尙ぶことは、彼等の特定要約として許されて居るのであるから、武士や學人が、高潔を誇ると同樣に、利に赴くことを以て、商人の權利であるかのやうに衒ひ誇るものである、斯ういふ立場にあるものに向つて、正義のため、人道のため、利を輕んぜしめようとするのは、無理な註文であらねばならない、併しながら、時世はいつも停滯しては居ない、進みに進み行く社會の風潮に會しては、何うしても夫れに適順して行くことを要する、則ち重利の特權者たる彼等としても、時代的に其が蛻皮を脫しなければならぬ秋に到達したのである。

獨占は共存の原義を破壞するもので、共同生活の由々しき害敵である、官權であれ、金權であれ、何れも其の特有のものによつて、或る種の極端なる獨占を試むるといふことは、我々共同の敵であらねばならぬ、此の點からしても、資本家や企業者は、夫れ自身の道德に目醒むべき時が來たのである、而も此の時に於て、尙ほ因襲的迷夢から覺むることがなく、昏々として舊套の臥床に眠るが如き徒は、いつか大なる時運の手によつて、悲慘なる境地にまで運び去ら

れなければならぬことゝなるのである。

傭人が不遜なる態度に出づるといふことは、一面に傭主の道德を疑はるべきものでなくてはならぬ、よく〳〵な不逞の傭人でない限りは、傭主の德性に懷かぬものは無い筈である、元來傭人其のものには、傭人としての心理がある、此の心理は、一概には傭人根性と言はれるもので、何うやら不善の傾向にあるものゝやうに聞えるのであるが、環境と立場とによつて、或る特發の心理を有すべき人間としては、傭人に斯うした心理のあるといふことも、また已むを得ぬことゝしなければならない、殊に所謂傭人根性なるものが、傭主側の仕向けから誘發されたものであるとしたら、其が罪は寧ろ傭主の方にあるとすべきもので、斯る場合單に傭人根性なる一語を以て、漫然之れを罵り去ることは、酷の最も甚だしきものとしなければならない。

ダカラ傭主にして、眞に傭人の忠實善良を要望するのであるならば、其をして忠實善良ならしむべき、何等かの行爲を與へなければならない、己れ不德にして、他の不德を責め、己れ不備にして、他の不備を罵るのであつては、畢竟愚にもつかぬ鼎ごつこたるに過ぎないのである。

慰安を欲するの情は、傭主と傭人に於て異るところはない、よく傭主の口にするところに、何だ慰安なんて、傭人の分際でありながら……などゝいふのがある、之れが抑々傭主としての心の缺陷を示すものでなくてはならない、傭人であつたからとても、人間たるに於ては、傭主と異なるべきものではない、傭主だから樂しみ、傭人だから樂しまなくても差支へがないといふのは、全く差別的優劣的な淺薄な舊來の道義觀念に外ならない、其樣な舊思想を以て、此の新らしき社會に應用しようとするところから、さま〳〵な矛盾的交渉や衝突が起るのである、況んや現代文明の敎ふるところでは、能率の增進は、慰安の程度に正比するもので、傭人に慰安を與ふることを解せぬ傭主は、到底資本家たり、企業家たり、勞力使用者たる資格を有たぬものと言つてよろしい。

傭人として、最も快く感ずるところのものは、傭主の溫味ある態度と素行である、如何に實力ある傭主であるにしても、傭人には冷眼を以て對し、己れ自身のみ驕傲なる態度を持して居るのであつては、偶々以て傭人の反感を買ふに過ぎない、且つ其の素行が修まらずして、奢侈驕遊を事とし、一方には傭人を督責するに急にして、一方には己れを持するに緩なるものであつては、如何に善良なる天性を有する傭人であつても、必ずや一種の不快なる感想を以て之れ

に對せずに居ないのである、然るに之れに反して、己れを持するには急であつても、傭人に對しては緩を用ひ、己れ先づ下つて、傭人を愛撫するといふ態度を取つたならば、傭人の忠實と善良とは、求めずして得らるべきは、毫も疑ふべきものではないのである、之れ實に現代的資本家たり企業家たる傭主として、大に考ふべきことでなくてはならぬ。

が飜へつて之れを傭人の上に觀るに、彼等も亦た往々過不及の行動に出で、之れによつて、傭主に不快なる感を與ふるものが尠なくない、之れは彼等の身上に取りて、最も不得策と稱すべきであらう、吾人は曾て常山紀談を繙いたとき、新參二十日といふ語を見出したのであつた、言葉の意味は、如何なる種類の傭人であつても、來たての二十日間は、實にまめ〳〵しく働くが、夫れが過ぎると、追々に地金を現はして、後には手も足もつけられぬ振舞ひをするに至るものであるといふのである、成程然うだ、如何にも夫れに違ひない、新らしい中は、新參氣分で、人一倍に働くが、直ぐ其の本音を出すといふのは、一般傭人に通有の事柄である、之れは傭主に於ても、傭人に於ても、大に注意すべきものでなくてはならない。

傭主となること、傭人となることが、素より前世からの約束事であつた譯ではない、極端に言へば、或る仕事のために、双方の間に雇傭關係が成立したに外ならぬのである、ダカラ一定の報酬の下に、働かせたり働いたりすれば、夫れで文句は無いやうなものであるが、併し然うした乾燥無味なものでは、到底其が間の關係を圓滿に進行させて行くことは出來ないのである、則ち其所には、一點の情味といふものが必要であつて、之れによつて双方の關係に、言ふべからざる温味が見られるのである。

ト言つて、吾人は通り一遍の温情主義には左袒せぬものである、そしてまた單なる奉仕主義にも贊成するものではない、理解のない温情主義には、何等の根柢も有せられない、そして自覺のない奉仕主義にも、素より目標がないのである、根柢の無い温情主義や、目標を有せぬ奉仕主義が、人生的にも社會的にも、決して究竟的善美を齎らす筈はないのである、眞といひ、善といひ、美といふものには、必ずや動かすべからざる原義と根柢があらねばならない。

雇傭關係にあつても、責任觀は最も大切なるものであらねばならない、現代に於ける傭主と傭人とが、往々否な寧ろ多くの場合に、シツクリした譯に行かぬといふのは、全く此の責任觀の缺陷から來ることが多いのである、傭主は傭主として責任を回避し、傭人は傭人として責任

を回避するところから、双方の利害は著しく背馳し、其が間の感情は夥しく疎隔する、之れでは名は傭者被傭者であるけれども、實は讐敵たるものでなくてはならない、之れで爭端が起らぬのであれば、夫れこそ天下の奇觀と謂ふべきものであらねばならぬ。

ところで此の際、一つ双方の責任とは何んなものであるかを明らかにして置く必要がある、デ傭主の責任といへば、言ふまでもなく傭人に對する全生活の保障である、此の責任は、傭主に取つても重大なるものであるが、傭人に取つては、更に一層重大なるものであらねばならぬ、賃金を支拂ひ、俸給を給與したからといつて、夫れで傭主の責任の全部を果したものであるとは言ふべきでない、賃金や俸給は現在を支持する限度のもので、決して傭人の全生活に對してのものとは言へない、雇傭中の不時の出來事や、解傭時の適應なる手當を始めとして、傭人の心身に對する必要なる施設までが保障されなければ、眞の保障たる意義も價値もないのである、然るに多くの傭主にあつては、賃金若しくは俸給の一事を以て、全然雇傭上の義務を果たせるものと考へて居るので、之れが則ち傭主としての、當然なる責任を回避するものであるとせねばならぬ。

夫れから傭主の通弊とも言ふべきは、傭人の働き振りに對して、全く無關心的態度を取るといふことである、ト言つて、彼等は傭人の如何なる働き振りにも無關心であるといふのではない、其が惡しき働き振りに對しては、無關心どころか、より以上の監視眼をヒケラカスのであるけれど、其のよき働き振りには、一瞥をも投げないといふのである、傭人の方にあつては、之れほど詰まらぬことはないと感ぜられるのだ、惡い働きもしない代りに、よい働きもするには及ばぬ、いくら働いたつて、結局は働き損になるばかりだといふのが、彼等の考へであらねばならぬ。

事實多くの傭人の中には、出來能ふ限りの働きをするものも尠なくない、そして人一倍の能率を上げるものもある、斯る場合には、傭主は善意の眼を以て之れを觀、其が働きに應じた、何等かの奬美的態度を取るべきものである、然るに惡は責めるが、善は賞せずといふのは、身勝手も甚だしいものと言はなければならぬ、之れと同樣に、傭人の方にあつても、之れを反對にした通弊がある、則ち傭主が、ある情誼的な待遇を與へても、傭人の方で一向之れに感應せぬことが多いのである、否な啻に感應しないばかりでなく、却つて之れをいゝ事にして、倍々

放恣な振舞ひに出ることがある、そして此の樣な場合に、何か一つ吐言でも言はれると、自分の不埒は棚へ上げて、直ぐ反抗的な氣分を漲らして來るのである、寛大なれば圖に乘り、嚴格なれば反抗するといふのが、所謂現代の傭人根性である以上、傭人は傭人としての義務責任を閑却し、傭人道德を根本から破壞するものであらねばならぬ、之れでは傭主に對して、其が不德をも不備をも責むる資格も理由も有たぬものである。

古來からの野諺に、人の物は我が物、我が物は人の物といふのがある、之れは如何にも彼此共通の原義を道破したもので、言ふ所は野卑であつても、其が意味は深長なるものである、ところで現代にあつては、此の言葉は事實に於て改訂された、夫れは則ち、人の物は我が物、我が物は我が物といふのである、實に深刻を極めた改訂振りではないか、其の通り實際現代にあつては、自我が露骨に發展されて、對他的觀念は、道德と共に地を拂つて空しと言つた現狀を呈して居るものである、ダカラ利益はいつも片務的で、損失はいつも双務的である、便利といへば便利だが、さりとは勝手千萬なことゝせねばならぬ。

之れを要するに、現代の雇傭は、其所に所謂雇傭道德なるものが缺如されて居るのである、否な缺如されて居ないまでも、甚だしく其が非薄なものと化せられて居るものでなくてはならない、ダカラ傭者と被傭者との間をして眞に社會的理想の下にあらしめようとするには、何うしても此の道德觀念を涵養せしめ、之れを兩者の間に發揮せしむることを必要とするものである、そして非薄なる溫情主義や、根基なき奉仕主義は、全然要なきものとして之れを排斥し、理解ある責任觀を打ち立てゝ、意義ある相互關係の下に、其が特定の約束を履行し推進せしむべきものである、這は眞に方今に於ける、社會的一大急務であつて、決して輕々に看過すべき問題ではないのである。

第二十七章　營業道德より觀たる思想中毒

顧客に誠意なしといふことは、古來からよく言はるゝ世諺であるが、之れを現代としては、營業者に誠意なしと改訂しなければならぬことゝ思ふ。

ト言つても、吾人としては、顧客に誠意ありと斷言するほどの勇氣は有つて居ない、が其は

先づ別な問題として、所謂營業者なるものゝ、多くは不誠實であることを歎ぜずには居られぬのである、一種の論法を以てするならば、營業者に誠意がないといふことからして、自然顧客にも夫れがないと言はれぬでもない。

道德上の缺陷は、營業者其のものをも見棄ることはしない、營業者は其れ自身に於て、御多分に洩れぬ營業道德の叛逆者であらねばならぬ、一體何れのものに限らず、既に一の營業者として社會に立ちつゝある以上、また營業者としての道德は持たなければならぬ筈である、然るに彼等の多くのものは、此等のものには一顧をも與へぬ代りに、寧ろ極端に近きエゴイズムを有して居るのである、既にエゴイズムである、其所に何等の道德をも認められぬのは、素より當然であらねばならぬ、營業者も一個の商人であるから、重利は彼等の特性であり權利であると言つてしまへば、何等文句を費やすべき必要はない、が之れも一般商人と等しく、今更そんな片輪的論理を以て、お茶を濁して行くことが出來ぬのである。

クリームを扱つて製した菓子を食つて、劇烈な中毒を惹起したとか、魚商人の肴を食つて、非常に苦悶をしたとか、汁紛餡屋の菓子を食つて、瀕死の重態に陥つたとかいふやうなことは、吾人が日常耳にするところのものである、デ此等の事實の原因として報ぜらるゝものは、職として其の店舗や製造所の不注意や不用意に起因するものである、元來不用意とか、不注意とかいふやうなことは、營業當事者夫れ自身の怠慢であつて、決して不可抗力とは言ひ得ぬものである、營業當事者にして、少しにても責任觀があり、親切心があるとしたならば、然うした弊害は、易々として除去さるべき筈である、製造器具の怠慢な取扱ひや、製造原料の不選擇などは、畢竟するに怠慢より生ずるもので、其の怠慢はまた無責任といふところから生ずるのである、錢さへ取ればそれでよろしい、成るべく省けるだけの手を省いて、少しでも得をしようといふ心事から、總ての不始末が醸成されて來るのは言ふまでもない。

錢が第一義で、お客が第二義と考へて居る店舗に赴く顧客は、先づ第一に店舗其のものを疑ぐる必要がある、夫れでなく浮つかりして其樣なところへ飛び込まうものなら、時としては大事な生命を棒に振らなければならぬといふ大事件が起るからである、こゝらがお客としての猜疑心を要する所以で、顧客に誠意なしなどいふのは、之れを言つたのであるかも知れぬ、すし屋が昨日の殘り飯を捨てゝを惜しんで今日の炊き立ての飯と混ぜるのは事實であり、牛肉屋が